

投 稿 誌

わいふ

291

グラビア ● わが家の歴史写真 —志賀壽美子さん

特集 ● 忘れ得ぬ友

特別寄稿 ● 乳がん検診顛末記

特別寄稿 ● アラスカ冬の旅

座談会 ● 泥棒体験を語る

特別寄稿 ● 黄金級の大歓迎



超初心者のための パソコン通信講座「クラブネット」

電話でしっかりサポートだから安心です。



只今
「わいふ」読者
受講料10%OFF
キャンペーン
実施中!

クラブネットなら目的に応じて選べる特にお得なセットコースを設定。受講料はお手頃な月々7,500円から。必要な方には最新のパソコンセットを大型電気店に負けない価格でご提供。パソコン機材も受講料も、分割払いができますから安心です。

「手順に従って進めるだけで

パソコンができるようになる！」

クラブネットでは、

コンピュータの専門用語を極力使わずに

パソコンが全く初めての方にも

分かり易いテキストを作り上げました。

「パソコンはどれも苦手」という人にこそ

チャレンジして欲しい。

それがクラブネットの通信講座です。

3、4カ月後にはきつとあなたも

パソコンを使いこなしてしまいます。

今こそ勇気を出して始めてみませんか？

クラブネットが最後までお手伝いします。

只今、「わいふ」読者一割引キャンペーン中！

クラブネット通信講座を受講してできるようになること

●文章を書く ●案内状やお手紙、年賀状等を作る ●簡単な

表やグラフを作る ●インターネットを使って、情報を集め

たり買い物をする ●電子メールのやりとりで、友だちやサークルとの交流をはかる など……らくらく学習で、「中級程度のパソコン技術が身に付きます」

■お問い合わせ・資料請求は

Club Net

初心者のためのパソコン操作通信講座 クラブネット

〒104-0045 東京都中央区築地2-4-10
株式会社アイデックス
「クラブネット事業部・わいふ係」

TEL 03-3544-4500 FAX 03-5565-1066



わいふ

読んで書いて、
みんなで作る



わいふ

読んで書いて
みんなでつくる

291号

目次

デザイン／宮塚真由美
表紙イラスト／小林正子

イラスト／ 荒田ゆり子
イシノフミ 小沢恵子
栗田笑 弘法堂建二
佐藤瑞江子 西宮さき
橋本美智子 馬場紹美
海砂 眞輪絵衣子
柳沢順子 渡辺美帆

4 わが家の歴史写真

戦中生まれ、自己主張の強い私の軌跡

東京都板橋区 志賀壽美子さん

写真提供・文／志賀壽美子

特集 忘れ得ぬ友

アメリカンママ友 伊藤琴子

友情は太平洋を越えて 桜井淳子

読んでよかった 馬場紹美

19 エッセイスト・クラブ

砂原富美子・布施幸子・寺田真佐

82

座談会 私も言いたい
泥棒体験を語る

川久保郁美・野田めぐみ・S・R

91 国会議員になってしまった②

黒岩ちづこ

94

あなたへスマツシユ

山田恵子・後藤 晶・新井純子

林 直美・岩田和子・鈴木由美子

102

黄金級の大歓迎

バセダカオル

108

ズバリ一言

馬場紹美・中西紀美子・高松恭子・武藤徳子

115

今これに夢中

福島みさを

117

ドイツニーランドふたたび

真野由美子

テレビカメラに

追われたわが家

松本とみよ

パソコンワールド

白井優子

乳がん検診顛末記

三好敬子

ワーキンググライフ

吹野あゆ子・田口恵子・後藤 晶

家族のスケッチ

祥 まゆ美・麦穂・三枝きよみ・匿名

大沢陽子・隅田美幸・田中慶子

アラスカ冬の旅

矢嶋美代

私の意見・あなたの意見

安田敏子・ゴル

フリートーク

和田美代子・藤池弘子・新井純子

鈴木貴子・井上暁子・野本美希子・高梨陽子

コミック これが子供の生きる道23

栗田笑

失業騒動

沖田美子

子育てフォーラム

●NMSのページ●

石井しのぶ

記憶の箱

大野幸子

コミック 毎日が平日 海砂

私もひとつと

祥 まゆ美・馬場紹美・鈴木和子

武藤徳子・本間美恵・鈴木佳子・加藤智恵子

伊藤てる子・林 直美・永田道子・真野由美子

森田章代・白井優子・林 夏子・太田啓子

バセダカオル・後藤 晶

スタッフから 147

募集します 149

編集だより 152

わいふインフォメーション 148

投稿のきまり 150

わいふホームページ 116

お友達にわいふを 43

文章講座のおすすめ 89

バックナンバー

戦中生まれ、自己主張の強い私の軌跡

東京都板橋区

志賀壽美子さん



1944年秋、父(31歳)が兵役休暇で帰宅した折りに母(24歳)、妹と一緒に



1949年4月、小学校入学。百葉箱のみがピカピカ。
後列右から4人目が私



1959年9月、高校2年生の
運動会。仮装行列



1957年、中学3年生。妹、弟、
杜氏のお頭さんかしらと共に



1967年3月、
野辺に行く
田舎の花嫁

1967年4月、新婚
旅行でございます



私は昭和十八年二月二十八日に信州は上田市近郊の一農村に生まれた。太平洋戦争の最中で父母、妹と一緒にの写真にも父の軍服、母のモンペ姿に戦争の影が見てとれる。妹とは一年も離れていない年子で、授乳期間が短いうえ食糧難で満足な離乳食も得られず、山羊の乳（気持ち悪い？）などを飲んでいたといい、子供のころから病弱であったのはそのせいかとも思う。さらに小学校六年には肺結核を患い、母が頼み込んで小、中学校の体育と掃除を免除してもらったので基礎体力もつかないことになった。

サラリーマン家庭で裕福でもない



1980年9月、ドイツ語学校ライン川下り。
4か月机を並べたトルコのアフェティン君（19歳）と

のに人の出入りが多く学校の先生、お医者さん、和尚さん、出稼ぎの杜氏、近所の母親のいない若者たちなどを飲食でもてなし、時には泊めてもいた。だから卒業二十七年にして初めて出席した中学校のクラス会で、担任の先生は私の顔を見るやいなや「スミちゃんのお母さんの五目強飯は旨かったなあ！」と言う始末。

中、高等学校の成績はよかったが（言いにくい我常常にトップ！）、大学進学に際しては母が女の子の都会での一人暮らしに大反対で、そのうえ本人も将来に対する確固たる意志もなく高校を卒業して就職した。

二十四歳で結婚したが夫は結婚式



1980年10月、大家さん母娘のクリスマス
イブに着物を着たいとの願いを叶える



1985年3月、日本女子大学卒業。創立者成瀬仁蔵
念賞受賞。頭が高くどっちが学長さん？



1986年6月、参議院議員青島幸男氏の自宅にて
選挙騒音を出さない主義の人なので訪問



1988年11月、日本愛国党総裁赤尾敏氏を訪問
騒音発生者の弁を聞きに行った



1987年5月、オランダ・マドローダムのミニチュアタウンで
とし坊（愛するぬいぐるみ）も一緒

に反対の変わり者で、式にこだわる
両親のたつての願いで花婿欠席のま
ま花嫁側の知人と親戚のみの式
（見立て式）を行った。しかし夫は
新婚旅行には参加した。
結婚後、体は弱くとも性格が強く
口では喧嘩するが、抗議の文章とな

ると三〜四行くらいしか書けない妻
に驚愕して、夫が大学に行くことを
勧めた。結婚後十年たつて住所が落
ち着いた時だった。それで大学の通
信教育を始めたものの大変で、三年
がすぐに経過してしまい、夫がドイ
ツに行くことになり休学した。

当時の西独・マンハイムで三十七
歳にしてドイツ語学校に夫と共に通
ったが、ここで様々な国籍の人たち
とつきあうことができた。この国で
の二年四か月の生活体験が、自己主
張が強くなり変人ではないかと感じ
ていた私も、場所が変われば普通だ



1994年5月、FDS主催ウーン少年合唱団と共に。オーストラリア大使館にて



1994年2月、自宅での会の集まりに田中編集長が参加



2000年6月、この年4月に新居に引越す。戦い済んで、一休み。そろそろ老境？（とし坊がない!!）



愛するぬいぐるみたち

と認識する契機となった。帰国後、通信教育に身を入れるようになり、成績優秀の賞をもらって卒業した時はすでに入学後九年が経っていた。

勉強中に隣の小学校の騒音に悩まされ、校長先生に要望したり、文章も書けるようになったので新聞に投稿したりしているうちに「拡声器騒音を考える会」の創立メンバーとなり、運動推進のために何人かの著名人に会ったりもした。このころ、区の教養講座に講師で来られたわいふの田中編集長と知り合い、会の機関誌「アメニティー」に寄稿や対談で協力していただき、私もわいふの会員となった。

帰国後もしばらくの間ドイツ語の勉強を続けていた関係で、FDS II ドイツ語婦人会（婦人会とはいささか時代がかっているが）に所属し、日本文化の紹介など国際交流に参加している。

子供には恵まれなかったが「とし坊」はじめ多数のファンタジーチャ

Gestalt Therapy ゲシュタルト・セラピー

ゲシュタルト・セラピー専門家養成講座

ゲシュタルト・セラピーは言語だけに依存せず非言語的な手がかりを重視します。水泳を理論だけで教えるのは無理なように若干の基本的な原則について語った後エクササイズを体験したり、過去や幼児体験を分析せずに「今ここ」でエンプティ・チェアの方法を活用し再現して体験するというやり方をします。色々な実験を自発的に実行することで行動変化を体験することが出来ます。

当研究所の専門家養成コースは、ゲシュタルト理論と指導技術を拾得し、加えてセクシャリティーを学び、人間の深層に複雑に絡み合った問題解決に対するきめ細かい手助けが出来る高度なセラピストを目指します。

- ◆就学期間 基礎課程2年+専門課程2年
- ◆開講時期 春期4月・秋期9月
- ◆資格 20歳以上
- ◆合 宿 年2回 春・秋

○アルカンシエル研修館(2001年9月開校)にて合宿養成講座

ゲシュタルト・セラピー ベーシック講座

人は90%以上、無意識の中に生活しています。無意識の行動パターンがその人の性格なのです。私たちは自分自身を100%理解し見ることが出来ないために自分はどんな性格かわからないでいます。「自分を知りたい。自由に表現したい。人間関係を豊かにしたい。愛されたい。尊敬されたい。」と秘かに願っているのならゲシュタルトセラピー「どのような自分なのに気付く」初歩的なワークショップを体験して下さい。そこには数々の楽しいエクササイズが用意されていますので、自然に自分のありのままの感情や、反応、常にしている表現の仕方や癖に気づき、生活上でのコミュニケーションの取り方、話し方として自分自身に責任を持つ能力が高められるからです。

- ◆就学期間 3ヵ月・短期集中講座
- ◆開講時期 春期4月・秋期9月・冬期1月
- ◆1日ワークショップ 第3日曜日 AM10:30~PM5:00

○アルカンシエル研修館(2001年9月開校)にて合宿養成講座

Aroma Therapy アロマセラピー

アロマテラピスト養成講座 / トリートメント専門講座

解剖生理学、メディカルハーブ、フィットセラピー、コンサルテーション、心理療法、リンパドレナージュ、フェイシャルマッサージなど美容と心理、健康をトータル的に学ぶ講座です。

- ◆就学期間 6ヵ月
- ◆開講時期 春期5月・秋期11月
- ◆修了証書発行 / インターン・派遣制度有り。

リフレクソロジスト養成講座

心と身体を癒すコミュニケーション型マッサージを提案。足・脚だけでなくトータルケアを目指し、心身のバランスや普段の食生活から個人にあったアドバイスのできる専門科を養成します。プロとして活躍できるよう心身のケアから接客マナーまで現場感覚で学びます。

- ◆就学期間 6ヵ月
- ◆開講時期 春期4月・秋期10月
- ◆修了証書発行 / インターン・派遣制度有り。

呼吸法講座

深い呼吸は、心理的攻撃を受けた後の体にブロックされている心理問題の解決を促し、体の代謝を高め、健康を取り戻します。 ●毎月1回



ゲシュタルト療法
無料体験日
毎月第2水曜日 PM 7:00~9:00



東京ヒューマニクス研究所

J R大塚駅南口より徒歩2分

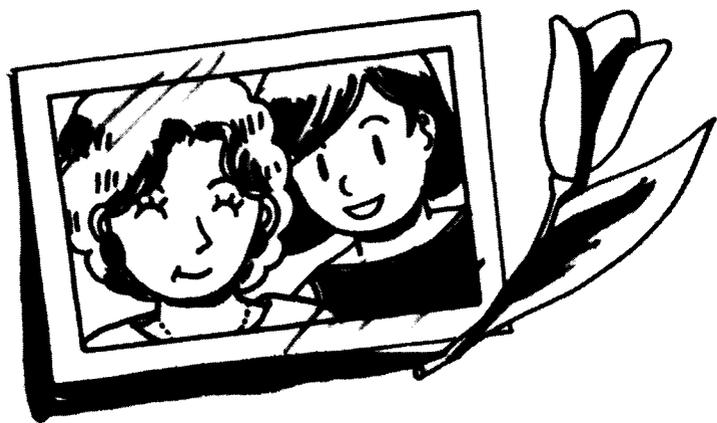
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-34-6 MOAビル402

TEL 03-3986-2420 FAX 03-3986-2422

<http://www.thl.co.jp>

特 集

忘れ得ぬ友



アメリカンママ友

アメリカ リトルロック市 伊藤琴子

一九九四年二月、コンドミニウムを購入し、引越してきてまもないある日の昼下がり、ドアをノックする人がいた。「誰かしら？」そう思つてドアを開けた。

「最近ここに引越してきたのはあんたかね？」

二重扉の外側のガラスのドア越しに、小さな黒のプードル犬を連れたい目の白人で高齢者の女性が立っていた。

「イエス」と私は答えた。

「私は六番に住むベティ。このコンドミニウム住人会の役員をしているから何かあつたら言つてちょうだい」

彼女は微笑みながら言った。私とベ

ティの初対面の日だった。

ベティは二年前に勤めていた病院を定年退職し、細々と年金生活を送つていた。私と同じ型、面積のコンドミニウムに犬と二人暮らし。私よりいくつか年上の一人娘、エレンは隣に住んでいるが、彼女は独身でベティには孫がない。

遠くの親戚より近くの他人とはよく言つたもので、ベティは私の面倒をよく見てくれるようになった。ここに移つてきた当時も今もそうなんだけど、私は仕事で目一杯忙しい。ベティは毎日のんきなリタイアリーの生活で、起きるのも寝るのも自由気ままである。サインの必要な速達などは彼女が私の

かわりに受け取つてサインをしてくれたし、コンドミニウムの維持費もチェック（小切手）を渡せば彼女が会計士のところにもつていつてくれた。

ここでは三か月に一度、コンドミニウムの十四軒全部が一齐にイクスターミネーターという害虫駆除業者を呼んで家中薬をスプレーする（シユワちゃんことアーノルドシユワルツネガーは「ターミネーター」、ごきぶりを殺す人はイクスターミネーター）。南部は非常に暑く、それも蒸し暑いので、夏などは特にごきぶりがすくすくと育ち、缶入りのスプレー剤でシユツ、では済まんのだ。夜の駐車場や道に数匹が列をなしていたりして、それも超特大のが！日本の義妹ならその場で失神ものである。このスプレーする日が私の学会やら旅行などと重なる時、ベティは業者と私のコンドミニウムに来て、鍵を開けてくれていた。

一人暮らしは気楽でいいが、なにかと不便なことも多い。ベティは、「私はキンコのアメリカンママよ」と言っ

て、こまごまと面倒を見てくれた。私は彼女の親切がとても有り難かったし、またベティはベティで、「人に必要とされる必要性」を私が与えることでいきいきしていたように思う。

「マザーはね、あなたが日本から国際電話してきて、『メリークリスマス』って言ったんだって、親戚の人にとっても嬉しそうに話していたわ。あなたはいいお友達って、私も喜んでいいのよ」とは娘エレンの弁。

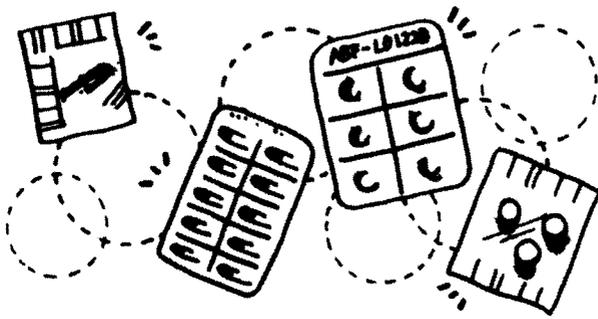
毎月決まった額しか入ってこない年金生活者はなかなか快く贅沢ができない。ベティは高血圧や関節炎を患っていて、十種類以上の薬を服用していた。アメリカの薬代はとても高く、家のローンの返済分と同じくらいのお金が毎月かかっていた。薬を飲むと胃が荒れる。それを防ぐためにまた他の薬を飲むという悪循環のようなことを繰り返していた。

「見て、これは血圧、これは血液を薄めるため、これは……云々」と、ベティは薬の内容を私に説明しながらプ

ラスチック製の薬入れをキッチンのカウンタートに並べた。

「まるで薬のデパートね」

「そうよ、お金もばかにならないのだ



わ。最近は何にどんどん価格が上がつとるしね」、そう言つてベティは薬入れの中から一錠を取り出して飲んだ。

私にいろいろしてくれるお札というわけでもなかったけれど、私は月に二、二回ベティを夕食に誘つた。アメリカ人は客寄せにクーポンをよく使うのだけれど、日本のようにこのクーポンを持つ参の方は何円引きというかたちでなく、2 for 1、つまり、一個分の値段で二個あげますよ、というものが多い。ライオンズクラブに属する友人のケイから買ったクーポンブックにはたくさんのレストランのクーポンがあり、私はベティをいろいろなお店に連れて行き、お代は私が払うことにしていた。クーポンを使えばどんな高いレストランでも、お金はそう気にならない。

私とお夕食の日、ベティはいつも以上のオシャレをしていた。アメリカの高齢者、特に女性は年がたっていても美しい人が多い（勿論、一部を除いてね）。閉経したら女でなくなるような風潮がなきにしもあらずの日本と違つ

て、アメリカの女性はいくつになっても自分の性、女であることの意識が日本人より高いような気がする。

おばあちゃんと思われる人がまっ赤やピンク、夏などは短パンのいでたちである。ベティはピンクや薄いブルー、パステル系の色をよく着ていた。

六時ごろに出ようという日は、三時半ごろ私が大学から帰ってくると、ベティは髪の毛にカーラーを巻いていたし、行く時には、ほお紅、口紅だけでなくアイシャドウとマスカラまでしていた。あのサ、別に女二人でデートってわけじゃないんだからサ、と、私は思ったが、綺麗な人と一緒にいるというのは気分のいいことであるのも確かだ。そして、お店でもレストランでも従業員の扱い方が違うのである。

軽く夕食という日にはセルフサービスのカフェテリアによく行った。私が最初に並びベティにナプキンで包んであるユートンシルズ（ナイフ、フォーク、スプーン）を取り、お盆にのせ、「アフター ユー（お先にどうぞ）」と、

言うと、あなたはよく気がつくとはめてくれた。日本じゃ敬老といって目上の人を敬うのが習慣なのよね、と言ったら、「アメリカも是非見習いたい」と言っていた。

ベティは私の父と同じ昭和二年生まれなので、私とは親子ほど歳が離れている。彼女はアメリカ、アーカンソアの田舎に生まれ、私は戦後の日本に生まれた。お互いの育った環境も文化も、人生経験も全く違う。夕食をしながらまたたまにはお茶を飲みながら語ってくれる彼女の話はおもしろかった。

大恐慌が続くアメリカで人々は食べるものがなくて困っていた。ベティの父親の畑の野菜が毎夜何者かに盗まれるので、ある夜のこと見張っていたら犯人が地元の名士だった。お腹がすくということは人を見境のない人間にする。

隣の家に若い人たちが引越してきた。ベティの夫は垣根ごしに若い女と話をするようになり、それが浮気へとつながり、三行半をつきつけた。離婚

後ベティは今のコンドミニウムを買い、二十年以上一人暮らしをしていた。「まったくね、あんたも男には気をつけないかんよ。話してるだけだからなんて、裏で何やつとるかしれんわ。あの浮気野郎、数年前に亡くなったけど」ベティは怒ったものの言い方をしていただけで、ずい分傷ついたんだらうなと察しはついた。

ベティは歳をとるにつれて体のあちこちが痛いと言うようになってきたので、私はひまと体力のある時はマッサークリームを使って頭のてっぺんから足の先までマッサージをしてあげた。忙しい時は、手とか足だけだったが、暖かい人の手に触られるというのは癒しの一種なんだそうだ。私は月に何度かマッサージに通うが、こちらは日本のもとは違い、とても柔らかなアプローチである。アロマセラピーのいい匂いのするキャンドル、落ち着いた和らぐ音楽の流れる中、クリームやオイルを使い全身マッサージをする。「おおおお、極楽じゃ」と私はい

つも思うのだが、極楽は金もかかる。だいたい一分間一ドルの計算なので、ベティのような年金生活者はほんとうにたまにしか行けない。私は彼女のお誕

二〇〇〇年になってベティの体はほとんどん悪くなり、入退院を繰り返すようになっていた。一度は呼吸困難になり、私は救急車でつき添った。アメリカで乗る救急車は大学院時

彼女は、「この病院で働く医師、看護士、パラメディック、みんなハンサムだよ」と言った。「今度あんたにもいい人紹介しようかね」とベティは笑った。さっきまで呼吸困難だったのに。

一説に老人が入退院を繰り返すのは死が近いということだという。特に一年とかの短い間に数回入退院というのはそう思って間違いないらしい。ベティは食事の時に手が震えていたけれど、私はそれが自分の気のせいだと思っていたし、あれだけ薬を飲んでいいるのだからその副作用かとも思った。

お見舞いに行くとベティが「痛い、痛い」と言うのがわかっていたので、私は病院にマツサージウムを持参して、体をよくもんであげた。彼女はそれを楽しみにしていた。

ある日のこと、若い看護婦が病室に来て、

「とても素敵な方ね、お嬢さん？」とベティに聞いた。ベティはすかさず「イエス」と言い、「私はね、彼女のア



生日や母の日などマツサージウムのギフト券を贈ってあげたし、リビングルームで体をもんであげた。ベティはお礼にとケーキを焼いてもってきてくれたりした。

ク（救急救命士）とベティと私三人で病院に乗りつけた。少し落ち着いたところで、「あのね、あのパラメディックのお兄さんハンサムだったねー」と、ベティに言ったら、

メリカンママ」と、つけ加えた。人種を超えた養子が珍しくないアメリカのことだ。母娘に間違えられたのだった。

ベティは一進一退の状態を続けていたが、私は彼女はよくなって、エレンが言うように市内の老人施設で完全看護の介護を受ける、と思っていた。人種偏見をもたず、みんなに優しくするベティの命を神が奪うとは思えなかった。こんないい友人に死は不条理である。

ある日、私はベティをエレンと一緒に訪ねた。ベッドに横たわった彼女の腕は注射の跡が紫色に変色していて腫れており痛々しかった。足も以前よりはましになっていたけれど、腫れてむくんでいた。私はベティの体をマッサージしてあげたが、その体の感触が死ぬ数日前の伯母の体とよく似ていたのだ、なんだか悲しかった。

「サンキュー。アンド アイラヴユー」
そう言ってベティは上半身を起こして私を抱擁した。私たちは別れを告げ

た。

エレンと私は病室を出て、廊下を歩いた。

「ねえ、マザーはきつとよくなるわよね」

そう念を押し、私に同意を求めるエレンに私はただ「わからない」と、正直に答えることしかできなかった。人は死ぬ前に少しもちかえし、家族の人や友人が「もう大丈夫」と思った矢先にご臨終になる、と、聞いたことがあった。私の祖母は亡くなる時に、みんなに「ありがとう」と言って、涙を流したという。ベティが言った「サンキュー」って、訳せば「ありがとう」ってことじゃないの？

私はエレンに現実を見つめてほしかつた。なぐさめの希望など与えたくなかった。だから「わからない」と言ったのだ。

数日後、同じコンドミニウムに住むバーバラより電話があり、ベティがその日の午後息をひきとったと知った。とめどもなく涙が流れ、私は嗚咽した。

葬儀が終わってからも夜になると、いろいろなことが思い出され毎晩泣いた。ちょうど衣替えのころで、化粧箱からベティのくれた衣類が顔を出すたびに、私のことを本当にかわいがってくれていたんだと思つて泣けた。この世にいらなくなって寂しくて泣けた。

私にとつてとても身近で仲良くしていた友人が亡くなるのは初めてのことであった。だからベティの死はとてもショックだった。生きていればまたこの世のどこかで会うことができる。電話で声を聞くこともできるし、写真を見ることがもできる。でも、あの世に行っちゃしばらくは、多分ずいぶん長い間は会えませんのじゃ。「天国で待ってる」と言つてたけど。

いつになったら止まるのだろう。そう心配した涙も止まり、悲しくはあつてもうつになることも終わり、私にまたフツツの日々が戻ってきた。ベティはこの世という三次元にはもういないけれど、私の心の中で忘れ得ぬ友人として生き続けていくのだ。

友情は太平洋を越えて

福島県安達郡

桜井淳子（69歳）

友情の長さを時間という尺度で計れば、民子と私の友情は半世紀を越え、深さは太平洋の最も深い場所にもたとえられる。

昭和十九年四月、私は都立目黒第一実践女学校に入学した。太平洋戦争は末期状態に追い込まれ、物資は欠乏し、戦局は日に日に悪化していく時だった。学徒出陣、学童疎開実施、学徒動員令、女子挺身隊勤労令公布など、小学生や青少年たちの肩にも暗雲が重く漂っていた。

私はもんぺ姿に防空頭巾と救急袋をあやにかけて入学式に臨んだ。東京の人口は疎開で激減し、女学生の姿も少

なかった。たった二クラスで新入生は編成されていた。私のクラスに一人の背の高い美少女がいた。それが民子だった。

ある日、理由は忘れたが、民子の家へ遊びに行った。私の家から徒歩で三十分ほどだったろうか。その家の本棚に、緑色に装丁された分厚い講談全集が並んでいた。私の心は躍った。その本が読みたくて民子と仲良しになった。『本気違い』といわれた私は活字を見ていれば幸せだった。私の民子への友情の動機は単純で、本が読みたかったからだ。一冊を読み切ると次のを借りた。

一年が過ぎ東京は米軍の空襲を受

け、焼け野原になっていた。めげず人々は焼け跡にバラックを建てて生活した。そして、終戦を迎え、世の中は一変した。

ラジオから英語の歌やジャズ音楽が流れ、若い人々に愛好された。民子と私は英語を学ぶ楽しさを知った。敵国語と禁止されていた英語は、それまでの抑圧されていた学生には新鮮な教科に思えた。

民子は、まだ小学生にもなっていなかったころ、彼女の叔父（彼女の母の弟）が家庭教師から英語を習っているのを庭で聞きながら、英語圏の未知の世界に憧れていたという。

二人は英語を学び、それで身を立てようと約束した。卒業すると、私は教師の勧めで英文タイプ教習所に進み、英文タイプピストとなり法務省に就職した。

その時、民子は彼女の母の反対で英文タイプの教習所に行けなかった。だが、民子はいきなり、当時日本に進駐していた米軍将校のマックナット家に

メイドとして就職した。それは彼女なりの勉強方法で、直接に英会話を身につけるためだった。彼女の誠実さと努力は実を結び、英会話を身につけ、タイプを独力でマスターすると、タイピストになった。

やがて二人は、米空軍の通信施設で働いた。その時、日本航空で戦後初めてのスチュワーデスを募集、小柄な私は体型が条件に満たないので応募しなかったが、民子は応募した。そして、選抜試験は千人から始まり、最後は二十四人になった。民子は最終選考まで進んだが最後は不合格だった。その時選ばれた一期生は、一般的に言われる「良家の子女」で有名人や裕福な家の娘たち。彼女は幼い時に父を亡くしていた。両親がいなかったのが不合格の理由だったのだろうか。当時は片親だと一流企業や銀行などでは採用されなかった。

その後、民子は昼間働き、夜はドレスメーカー女学院で洋裁技術を身につけた。そして、その合間には華道の師

範の免状を取得し、日本人形製作の勉強もした。

府中空軍基地の輸送部隊へ民子と私は転勤した。民子は管理事務所の秘書、私は輸送将校の秘書。電話の応対、書類作成、事務の処理などだった。

そこで民子は同僚のヘイマー軍曹と恋に落ちた。美人の日本娘とユーモアにあふれ、機知に富んだハンサムなアメリカ青年、当然の成り行きだったろう。

だが、実を結ぶには険しい道のりとな家族との葛藤が待っていた。学生時代からの親友である私に民子の兄から手紙が来た。それは、愛する妹の幸せを願う兄の切々たる真情で、民子の結婚に反対する内容だった。

当時、日本でもアメリカでも国際結婚への偏見は凄まじかった。軍人相手の特殊な職業女性が戦争花嫁としてアメリカへ渡り、語学の素養も一般教養もなく、アメリカ社会のひんしゆくを買っていたことも否めない事実だった。民子の兄は、民子が国際結婚をし

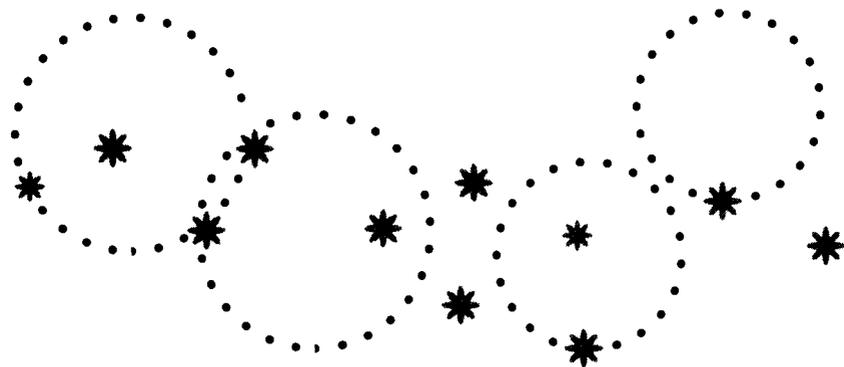
アメリカへ行ったら、それらの女性と同等に扱われるだろうことを憂慮して、私からも彼女の結婚に反対するようにとの依頼だった。私は民子と彼女の兄のはざままで苦悩した。

しかし、すべての難問を解決したのは民子とヘイマー氏の愛と、それを支えたマックナット夫妻だった。日本で結婚式を挙げるとヘイマー氏は任務でアメリカに帰国した。民子はパスポートとビザの発行に時間がかかったので、夫のもとへたった一人で太平洋を渡った。昭和三十四年の春だった。

民子は何度か里帰りをした。彼女は幼い息子を連れ、私も幼かった娘を連れて、学生時代に歩いた目黒の権乃助坂を散策した。

また民子は彼女の夫と、結婚二十五周年記念に彼女の実家を訪ねた。親族たちと観光旅行をした。日時をずらして、私も夫と共にヘイマー氏、民子と四人で京都を旅した。

民子は私をアメリカへ、再度招待してくれた。最初は二十余年前、民子が



ニューメキシコ州のアルバカーキーに住んでいた時。民子は当時GEに技術者として勤務しており、新しく職場にきた従業員へ技術を指導していた。民子の夫、ヘイマー氏は現地のパークレイ銀行の支店長をしていた。彼は、軍務に就いていた時に勉強をして会計士の資格を得た。一人息子は独立し、裕福な生活だった。彼女は中流家庭というが、当時の日本人の生活と比較すると、上流家庭に匹敵する家と庭、二台の乗用車、モーターボート、モーターホーム（キッチン、トイレ、シャワー付きのゆったりした内部の車）を所有し、その車でグランドキャニオン、ラスベガス、南西部の砂漠地帯を旅した。

一方、私は女性の生き方を模索しながら、結婚し、子供を育て、仕事を求めて生きてきた。バブルの絶頂期に家は自宅だったが、借地だったために地主の地上げに合い、裁判ごとに追い込まれ、暴力団の介入や、種々雑多な苦難を背負った。それらを乗り越えて、老後をのんびり暮らそうと豊かな自然

に包まれた福島の中通りに住居を移した。福島に越して来てから、夫の病気の連続、姑の有料老人ホーム入居など、気の休まる時もなく、一時うつ状態に陥った。民子との文通は続いていたが、精神的に参っていた時、私は手紙を書かなかつた。心配した民子の手紙に、うつ状態を告げると、人生論（英文）の本を送ってきた。そして、アメリカへ遊びに来ないかと誘ってくれた。

昨年五月、二度目のアメリカ旅行（一か月間）、民子の住んでいるテキサス州の西部の町、サン・アンジェロへと旅立った。

彼女の家は広い芝生に囲まれた瀟洒な作りで、日本人の尺度からは豪邸に属する。暑い場所なので、各部屋の天井から吊された照明器具の上に大きなプロペラがついている。

民子もヘイマー氏も現役を退き、悠々自適の年金生活を享受している。

二人はテキサスの名所旧跡へ案内してくれた。その上、民子は私の見たいと望んだ老人施設へも快く同行した。

コネチカット州在住のマックナット夫人の家へも航路国内線を乗り継ぎ訪問したし、オクラホマの老人ホームに入居している、友人ウオーレス夫人をヘイマー氏の運転で訪ねた。

その間にも、民子と私は寝る間も惜しんで話し合った。四十余年の間、母国語を使用しなかった民子だが、最初はごちなかつた日本語にも拍車がかかり、忘れかけていた語彙も取り戻し、思い出話に花を咲かせた。

明朗活発、社交性に富み、人を大切に思う民子の性格が、現在の人間関係や生活環境を築き上げたのだろう。

アメリカへ渡り、一番悲しくつらかったのは、市民権を得た時だったという。

民子がアメリカへ渡って三年が経った時、市民権取得の申し込みをした。

「夫が、市民権を取得する試験の参考書を持ってきた。一か月ぐらいで試験があるだろうと思っていたが、申し込んで一週間ぐらいして電話があり、三日後に試験が施行されると言った。参考書を丸暗記し、合格した。」

二か月後に、アメリカ市民になったセレモニーが開かれた。「星条旗よ永遠なれ」の曲を聴きながら、流れる涙



最優秀賞を得た民子の作品

を禁じ得なかった。それは、市民権を得た喜びより、日本国籍を捨てなければならぬという悲しみだった」

民子はその時の心情を大きな目に涙を浮かべて語ってくれた。そして、「私はアメリカ人。子供もいる、孫もいる。ここが私の終焉の地」

戦後、たった一人で渡って来たアメ

リカ。人前で愚痴をこぼしたことも涙を流したこともなかった民子。だが、私はその目に初めて涙のきらめきを見た。

彼女は多才の持ち主である。彼女の裁縫の技術は、地域のコンテストで製作ドレス部門の最優秀賞を毎年獲得している。人形製作コンテストでも賞を連続さらっている。絵は油絵の風景画、東洋のしぶい水墨画も描く。

地域での人間関係もすばらしく、教会で、ゴルフ場で、スーパでも友人や知人に声をかけられ、愛され信頼されている。

国際結婚に成功し、アメリカ社会に融合した民子を私は友人として誇りに思う。

現在、太平洋をはさんで、民子と私はEメールで友情をあたためている。

これからの人生を豊かに美しく過ごそう。私のかけがえのない友、民子と共に……。

(写真提供・筆者)

(え・イシノフミ)

草ちからの力・藁の家



仙台市泉区 馬場紹美 (29歳)

この本は「ストロー・ペイル・ハウス」というタイプの家を紹介しながら、私たちに「草」の底力を教えてくれる楽しい本だ。

地球上の様々な民族が草を利用し、草の力に守られて今日まで生きているのだから、何を今さらと思う向きもあるかもしれない。

小松義夫 福岡正信
馬場紹美 宮崎 清 著
大岩剛一 安藤邦廣

INAX出版
定価一五〇〇円＋税
二〇〇〇年六月二日出版

しかし日本の中だけを見ても昔に比べたら、草や藁の利用率はかなり低くなっている。

ある意味、忘れられていた存在の藁をもっと見直し、利用してゆこうということを、この本では訴えている。

そもそもストロー・ペイル・ハウスとは一体どんなものなのか。まずストローは藁。ペイルは家畜のエサの牧草をサイロに積むために、ブロック状に固めたもののである。エサではな

く家づくり用いるので、麦藁でも稲藁でもいい訳である。そのストローペイルをレンガ積み必要領で積んでゆき家にしたものなのだ。さらに壁は藁を混ぜた泥を何層か塗り、漆喰で仕上げ。左官的作業が重要な家造りなのだ。ストロー・ペイル・ハウスの利点はすごい。断熱性、吸湿性、遮音性も

ちろんのこと、オーストラリアでは耐震性、耐久性（百年くらいはもつらしい）、難燃性、防虫性にもお墨付きがでたとか。しかも材料のペイルは安価で、毎年収穫されるから安定供給され、木材の使用部分も少なく、セルフビルドが可能である。仮に家を壊したとしても、地に還るものしか使用していないためとても環境にやさしい家なのだ。

日本では法律の関係上、欧米のものをそのまま取り入れることは難しいらしいが、日本にだって昔からの土壁の技術があるのだから普及するのにそう時間はかからないだろう。

森林伐採が世界中で問題になる中、ストロー・ペイル・ハウスの存在は私たちに小さな希望を与えてくれる。

(エ・馬場紹美)

読んでよかった



エッセイスト・クラブ

小さな家族

熊本県八代郡

砂原富美子（44歳）

雪がいなくなつてから、次男は雪の子供のジュニアを可愛がった。雪にくらべると、ワンパクな雄猫は、次男が抱くとするりと逃げ出してしまふ。雪のように芸をしないし、外に出ては、近所の雄猫とケンカばかりして帰ってくる。

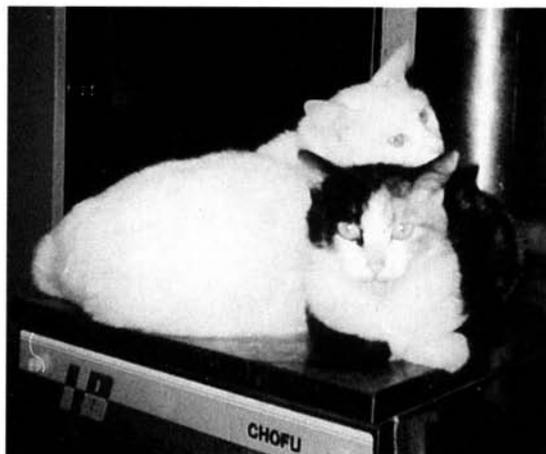
「雪は、まだ見つからないの」

時々思い出したように次男は聞く。

「うん、雪はどっかで元気にしてるよきつと」

そう言いながら、もしかすると病気になる猫は死ぬ時は姿を消してしまう話を聞いたことがある。病気があったのかな。多量の白い抜け毛が残っていたことが気にかかっていた。

その後、近所の人からの連絡で、雪を見たという情報が入った。一人暮らしの老女の家で元気にしている



ジュニアとノラ猫のラブショット

という。

次男と一緒に見に行つたが、老女の膝の上で眠っている雪をみつめるとも優しい視線に、雪はもうこの家族になつたのだと思つた。寂しい一人暮らしに迷い込んだ猫の存在が癒やしになる場合だつてあるのだ。「ジュニアがいるから、雪はあげるよ」

次男はそう言ったが、少し寂しそうだった。

私は雪が生きていてくれて安堵した。次男が子猫を拾ってきた時から、無事に育つのか心配だった。もし

死んだりしたら、初めて出逢う死という問題に次男は悩むだろう。次男はまだ身内の死を経験したことがない。葬儀を経験している私でさえ悲しくて胸がつぶれるほど、涙流したことがある。だから雪が生きていたことが嬉しかった。

ジュニアは雪よりも体が大きくなった。食欲もあって逃げ足も早い。次男と遊ぶよりは外へ出るほうが好きみたいだ。ケンカも強くなった。そして恋人？ 恋猫もできたようだ。

ノラ猫の彼女は、こっそりとやってくる。鳴き声を聞くと、ジュニアは耳をピンと立てソワソワしている。戸を開けるとすごい早さで外へまっしぐら。お腹がペコペコになるまで帰ってこない毎日だ。きつと元気がいっぱい外を走りまわっているのだろう。

「ジュニアは、まるで犬みたいだね」と言って笑ったことがある。猫でよかったね、犬ならクサリが必要かもしれない。写真のフィルムを現像に出すために最後の一枚を撮影した。めずらしく二匹とも、仲良くポーズを決めてくれた。いつもなら私を見ると、逃げ出すノラ猫の彼女もカメラ視線になっている。ジュニアの子供が誕生するかもしれないね、そう次男と話したことがある。

梅雨も近づいたころ、ジュニアの姿が見えなくなつた。時々いなくなるし、また遊びに行ったのだろうと

思っていた。二日目の朝ノラ猫はやってきた。ジュニアの姿を探している。一緒ではないことに胸さわぎがした。

「白い猫が落ちとるよ」

夫が近所の人の知らせで走って行くと、道路の端の溝の底に沈んでいる白い猫を発見した。死後硬直で凍りついた猫の体と半分つぶれた顔面が痛々しかった。交通事故にあつたのだ。ジュニアが飛び出したのかも、しれない。

次男は朝の部活の練習で、今は学校にいる。ジュニアの死の報告は、きつとショックだろうと思う。人とくらべると猫の命は短い。十年は生きてほしかったのに、わずか一年でこの世を去るなんて。でもその一年がジュニアにとつて幸福な日々だったとも思える。

夫が埋葬をした。寂しくなるなあとぼつりと言った。次男が雪を拾ってきてから二年余り猫と暮らした日々を思い出す。高校受験の長男の心をなごまし、雪の出産で命の尊さを学んだ次男。気がつけば子供達はずいぶん成長したのだと思う。そして死という現実も彼らは彼らなりに受けとめるだろう。初めて動物と暮らしたその命にふれ、人も同じ生命であることを知り優しい心を持つ。

小さな家族は我が家から消えた。たくさんプレゼントを残して。

(写真提供・筆者)

スミヨツさん

大阪市城東区 布施幸子

神功皇后の御代に建てられたという住吉大社は、摂津一の宮として崇められてきた。社殿は住吉造りと呼ばれる国宝になっている。

が、スミヨツさんと親しまれるこのお宮のシンボルは、なんととっても太鼓橋であろう。境内の入口にあり、もとは神様専用だったのが、やがて万人が渡れる橋となり、渡ればすなわちお祓いになるという便利なありがたさで人気を博している。

いまは海岸から七キロも遠ざかってしまったが、昔は住之江とよばれ海沿いにあった。清之江とも書かれ、清らかな海水がひたひたと太鼓橋の足元を洗っていたといわれる。

住吉明神は、イザナギノミコトの息子さんで、父神が日向の小戸でみそぎをされたときに誕生された。だからお祓いにはもってこいの神である。また、鎮座ましますとき「海上の舟を守ってやる」と約束されたため「航海の神」としても名高い。

ふつう神様とは、影も形もないようだが、住吉明神は現人神で、上品な翁の姿らしい。帝と和歌のやりと

りをされたことから、歌の神でもあり、芸事も好き、農業にもすぐれたスーパースター神として古典にも載っている。

源氏物語にも、須磨で嵐にあった光源氏が、夢に現れた父帝のすすめで住吉明神に祈り、これまた住吉フアンへの明石入道に助けられた話が描かれている。都へ戻った光源氏のお礼詣のようすも描かれていて、つまりは作者紫式部のなみなみならぬ住吉敬神が察しられる。

それに対して、土佐日記に書かれているのは住吉批判である。土佐日記は紀貫之が土佐国司の任期を終えて、京都へ戻るまでの航海日記である。

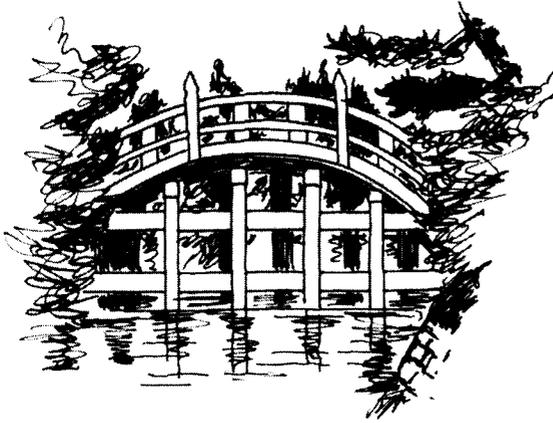
承平四年（九三四）十二月二十一日から翌年二月十六日までの記録だから、当時の旅の鈍さが思いやられる。「きょうは貫之さんの船がどこその岸に着くそうじゃきに」などと、知りあいが陸から追いかけてきて再度の名ごりを惜しんだり、「ほんの少しじゃけど」と食物を差し入れてくれたりするのも当時ならばこそ嬉しさだ。しばし船をとめて沿岸の風景を愛でることも今の旅では不可能だ。だがおおかたは不自由に耐え、病気の不安を抱え、空もよを気づかい、海賊を警戒しながらのむつかしい長旅だった。

それだけに、京まであと少しという住之江まで近づいたときは、ひとしお嬉しかったことだろう。ところ

が、なぜか急に天気がくずれ、すさまじい暴風雨になった。船は木っ葉みじんになりそうで貫之らは生きた心地がしない。

「スミヨッさんのご機嫌がわるいのじゃ。こんな時はお供えにかざる。おらもそうじゃ」

船頭がどなるので、急いで御幣を捧げたが、なんの変わりもない。「御幣なんぞ何になる。金目のもんを早う、早う！」船頭の言葉に、命には代えられぬと鏡を



差しあげることにした。

そのころの鏡は一財産、しかも奉納したそれは二度と手に入らぬ宝物だったようだが、それにしても「ああ、目玉だって二つあるのに一つきりの鏡をなあ」と眼よりも大事そうな書き方をしている。

ところで、鏡を投げこんだたん、海面は鏡のごとくしずまり、風もやんだというから現金ではないか。そこで贈り主は一首、

ちはやぶる神の心を荒るる海に

鏡を入れてかつ見つるかな

わかつたぞ、神の本心が。荒れる海に鏡を入れたら見えたきた。何が航海の神だ。人の弱みにつけこんで駄賃をせしめる船頭とおなじではないか、と毒づいている。

スミヨッさんも金次第。いえ神様、私はそうは思いません。三十余年も前に京都から大阪へ移り住んで以来、お詣りは一度きり。おさいせんは十円ぼっち。だが曲がりなりに短歌や川柳ができるようになったし、手芸もやり始めた。不満は言い出せばきりないものの路頭に迷わず暮らしている。

神様は、貫之の鏡のような宝など、持っていない私をお見通しの上、守って下さってるに違いない。でも、できたらもつとご利益が欲しおすのやけど、と厚かましい神だのみをしている。

書道

千葉県船橋市 寺田真佐

書道教室に通い始めて二年近くになる。月三回、自宅から二、三分のところである。メンバーは主婦六名、どうやら私が最年長らしい。

先生は、飾り気のないあっさりした女性で、よい時は思い切り褒め、よくない時は遠慮なく「いまいちね」と言ってくれるのが、心地よい。

入門のころは、結婚式などの芳名記帳を、毛筆ですらすらとかっこよく書いてみたいという、軽いのりだった。はじめてみると、これが面白い。太い筆に墨をたっぷりつけて、真白な半紙の上に「朝日」だの「大地」だのと書いていくのは快感である。

休むことなく通い続けている日、回りを見て、「あれ、みんな上手だなあ。私の字はなんて下手なの。六人中一番下手だ！」

と、突然気がついた。どの人も、いつの間にか、見違えるようにすつきりしたい字を書いている。私のだけが、いまだにボテボテとしたバランスの悪い、垢抜けない字である。

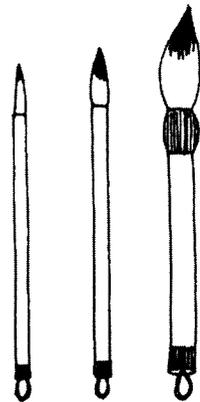
「えっ、ひょっとして私は書道のセンスがない人間か

もしれない」

これは重大発見である。

私は、趣味といえば「読書」の活字中毒人間である。本なくしては生きられない。文字も大好き。読めもしない昔の漢字や平仮名を眺めては、美しい、いいなど憧れている。こんな私なのだから、習いさえすれば字は人並みにうまく書ける、いいセンスがあるはずと、ひとりで勝手にうぬぼれていたらしい。それがこのありさま。なんだかおかしくなって気が抜けた。

しかし立ち直りの早いのが私の長所。これでいいや。名前だけはどうにかきれいに書けるようになったし、この年齢になってひと様と競ってどうなる。教室で一番でこの悪い生徒でいるのも面白い体験だ。下手な自分を丸ごと楽しんでしまえと、居直った。



というわけで、おけいこは楽しく続けている。まだまだ先は長い。才能はいつどこで花開くか分からない。万一、花開かない時、それはそれでしかたがない。いさぎよくあきらめよう。

（編集部注・この方の投稿は達筆の実に美しいペン字でした）

さくらんぼ

山形県山形市 加藤智恵子（70歳）

さくらんぼの季節になると私は落ち着かなくなる。

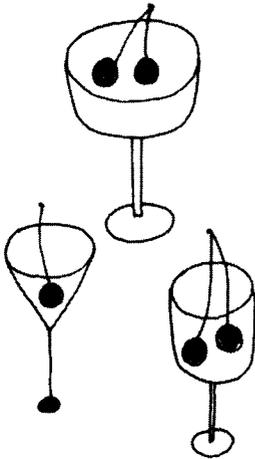
さくらんぼはあまりに高価なので買って食べたことがほとんどないし、産地では買って食べる物ではないと思ひこんでいる人が多い。毎年数人の友人などから戴くが、豊作でもないときも少なく、果たして口に入るかどうか心配になる。

私はさくらんぼが大好きである。どうしてそんなに私をとりこにするのか不思議である。果物にはそれぞれ適量の水分、甘味、酸味、香り、口触りなどがあってそれぞれの果物の特徴をかし出している。さくらんぼには、そのほかに、姿のかわいらしさがあって目鼻をつけてみたくなったり、食べるのに一瞬戸惑うこ

とすらある。さらに加えて私をとりこにするのは郷愁と一緒に食べるかららしい。

まだ小学生のころ（五十余年の昔）六月になると親戚からさくらんぼが送られてきた。六月は私の誕生日、私への祝いの品と勝手に思い込んでいた。

当時はさくらんぼは珍しく、送られてくるのも少なくて一人分のわけ前は少なかった。分けられたのを糸で結び兄弟姉妹それぞれの場所にぶら下げたりして大切に食べた。少し黄みを帯び、かわいらしい紅の小玉を口に含むと甘酸っぱい汁がプシュッとほじける。五十余年の歳月を経た今も毎年初めて口にする時の感慨は変わらない。激しい戦時下や終戦後、その時の食べ物を思い出すとき、貧しい物ばかりであるがその中で唯一、さくらんぼは私の心を豊かにしてくれるのである。



ところでさくらんぼを昔は「桜桃（おうとう）」と言った。「おうとう」の語感は、甘酸っぱい郷愁を呼びおこす。実の割れたものだったり、大小不揃いだったり、甘くなかったりで、今なら到底商品価値のないような物でも、私たちにはとても貴重な「さとう」よりもおいしい菓子であったのである。

いつのころからか桜桃を「さくらんぼ」と呼ぶようになった。さくらんぼは、鳥虫害を防ぐために木の回りにネットを張ったり、実の熟するころの大敵である雨を凌ぐビニールの屋根をかけたり、木の下には反射シートを敷いて実を赤くする工夫もする。それらの付属品の代金は莫大であるという。赤いダイヤの所以もうなずける。一方、人工授粉だ、摘果だ、摘葉だ……何だかんだと手間ヒマをかける。そして、これほど天候に左右される果物もない。判断のミスで一夜にして全滅もあったと聞いたこともある。作るほうも食べるほうも天候に一喜一憂するのである。

木の枝にたわわに実る赤い実は、農民のすばらしい芸術品である。産地に住む私共はその労苦を知っているから文句は言えない。だから買って食べるのではなく、実割れして商品価値のなくなったもの（本当は実割れは熟した証拠だから一番おいしい）を戴いて食べるものだと思っているのである。

そして今、アメリカ産の輸入ものが加わった。私は

それを「チェリー」と言っている。一度だけ三粒ほど食した。赤黒く、大粒で、甘さだけが口に残った。

三様の「おうとう」「さくらんぼ」「チェリー」の呼び名は時代の変遷そのものを象徴し、その時代に生きた人々の思いそのものである。

今年もその季節がきた。私の気をそぞろにしてしまう郷愁のさくらんぼの季節である。

刺繍、その続き

神奈川県座間市 青島典子（46歳）

四十代になって人生の後半に差しかかったせいか、「今、何してるの？」とよく尋ねられます。これがちょっとプレッシャーで相手を見て返事を変えています。喜んで「刺繍です」と言えることはあまりありませんね。

三十ぐらい年上の女性に会った時、その人から「もう目が疲れるから」と刺繍の本とデンマーク製の高価な麻布を頂きました。で、お札の意味を込めてその人が紅茶好きとわかるとポットカバーを作って贈りました。頂いた麻布の一部を使って、その人の趣味でもある機織りと糸紡ぎの様子をポットカバーの両面に刺繍

しました。

しばらくしてから「我が家のポットには大き過ぎ、小さくしたから」と連絡があり、私の作った保温用のタオル地の中袋が「そちらで使って下さい」と返ってきました。「保温用にはベビー用品売り場でタオル地に綿レースを被せた布を買ってきて使ったから。これ残り布」と言って、私が知らなかった可愛らしくて、しかも洗濯に耐える布をもらいました。

それまでに二十個以上のポットカバーを作ったけれど、中袋は悩みでした。タオルで作るのは今一つ素敵じゃないのに、この赤ちゃんの肌掛け用の布の素敵なこと。思いがけずいい情報をもたらって、得した気分でした。

高校の家庭科の教師をしている姉からは、「以前こぎん刺繡を教えた時の残り」と言って、山のように糸と布をもらいました。考えれば今は男女共修なので、刺繡を教える機会はほほえないでしょうね。

フランス刺繡ならわかるけど、こぎん刺繡とはまた珍しいと思っていたら、中に一人面白がって帯に挑戦した女子生徒がいて、さすがによかったと言ってました。帯の仕立てはさぞ高くついたことでしょうが、フランス刺繡ではこうはいかなかったでしょうね。

姉から、近所の亡くなったお年寄りの刺繡の続きを刺してくれと連絡があり、迷った末、自分の勉強のため、他人のものを縫わないと上手くならないよと知り合いから言われていたこともあって引き受けました。ところが今そのせいで、えらく悩んでいます。

それは牡丹の花の刺繡ですが、図案から色選びまで全部自作で、額装する予定のものでした。遺族が額よりは衝立のほうが使えるからと経師屋さんへ持って行くと、「衝立にするなら葉っぱを花同様に刺し埋めたほうがいいですよ」と言われ、迷っていたものでした。

他人の作品の続きを刺すのがこんなに難しいとは思ってもみませんでした。刺し方がお手本通りの一糸乱れぬ規則正しい針目ではなく、ラフなのです。牡丹の花のムクムクムクと開いていく生命力溢れる様が見事で、これを真似て続きを刺すのは……できない。

手持ちの本だけでは足りず、古本屋に走って参考に



なりそうな本を買い込みました。牡丹というアレンジされることのない花なのでよく似た図案はあるのです。が、出来上がり寸法が違うため同じ刺し方では針目が長くなり過ぎて無理、違う図案でも使えそうな刺し方はないかといういろいろ捜しました。

とうとう手に負えなくて手芸教室を捜しました。高くて遠い所には行けないと迷っていたら、市の小学校空き教室利用事業の刺繍教室が見つかりました。これも税金の還元だと喜んで出かけて、すっかり打ちのめされてしまいました。先生に「この葉の部分は最初から刺し埋めるつもりではなかったから、針目の向きが不揃いで、全部糸を抜いたほうが早いし綺麗に仕上がります」とあっさり断言されてしまいました。

まさか遺品なのに糸を抜くのはね……友人には「帰省した時にお姉さんに返したと思ってた」と何とも言えない顔をされてしまう始末です。

思い出すのはある刺繍展で、白い手袋を添えて触れられるようにして、アフガニスタンの幕のような作品が展示してあったこと。完成までに三代の女性の手が必要だったので——と考えていたら、「大勢の女性で縫ったかもよ」と言う人もいました。名人と呼ばれるお年寄りの針も、一応できるという水準の針も混じってこれだけの作品にするんだとため息が出ました。

依頼者からは「何年かかってもかまいません」とい

う有り難いお言葉が届いて、一応できるという水準の私は本当、悩んでいます。

天草から来たびわの木

長野県小県郡 花岡京子(52歳)

毎年初夏のころ、熊本県天草に住む松本とみよさんからびわを送っていた。五年前、初めてびわを送ってもらった。その時のびわのよい香りとオレンジ色の美しかったことに魅せられ、びわを食べた後に種を鉢にまいてみることにした。

信州は寒冷地なので、暖地のびわの木はあまり見ることがない。ましてや実を付けたなどは、聞いたことがない。それなのに、種をまいてしまった。その鉢を庭の大きな木の根元に置き、夏が過ぎ秋になった。しかし、私は鉢のことをすっかり忘れていた。

十月のある日、木の根元が緑々しているのに気が付いた。一体何だろうと近くへ行ってみると、鉢からたくさんのびわの芽が出ているではないか。

私は思わず、

「わあー、芽が出ていたんだー」

と一人で感動していた。



びわの木は三センチから五センチの丈になっていた。それから一本ずつ鉢へ植え替えた。十月の秋晴れの下で、全部で十五鉢を作った。これから信州は寒い冬へ向かう。こんなに小さなびわの木が、初めて迎える冬を越すことができるか心配だった。しかし、どの鉢も元気に春を迎えることができた。十五鉢は、春から秋までは、庭でのびのびと過ごしていた。時々やってくる友人知人は、庭に並んだびわの木を見て、

「これは何の木なの？」

と聞く。

「びわの木だよ。それも天草からのびわの木」

と言うと、決まって、

「まあー、すごい」

と言う。そして帰りには、彼女達の手にはびわの鉢があった。

最後に我が家には二鉢が残った。そのびわの木が五年経った。丈は一メートルとなり、茎の太さは二・三センチになった。

二鉢の内、大きいほうを今年玄関の脇へ植えた。寒い風が比較的当たりにくい所だから、きつと大きく育ってくれるであろう。今年の冬が越せさえすれば安心できるのだが。もう一本は、まだ鉢の中にある。もう少し大きくなったら土に下ろしてやろうと思っている。今年玄関脇に植えたびわの木から、新しいみどりの葉がたくさん出てきた。しっかりと根付いたのがわかる。信州からはるか遠い南国情緒漂う天草から来たびわの木よ、ここの寒さに耐え、たくましく育ってくれ。我が家からあちこちへ行ったびわの木も大きくなってくれよ。びわの木を見るにつけ、遠くに住む松本さんを想うばかりだ。

(写真提供・筆者)
(え・荒田ゆり子)

テレビカメラに 追われたわが家

熊本県天草郡 松本とみよ

『親の目子の目』という家庭教育番組に、私達家族が出ることになった。何でなんだと驚かれる向きもあろうかと思うが、今年のテーマが親子のコミュニケーションで、私の作っている家族新聞がそれにピッタリあてはまるとディレクターが言うのだ。

熊本放送から、東京での企画会議にかけてもいいですか？ もし企画が通った場合協力してもらえますかと聞かれた時、全国放送の場合ボツになることのほうが多いので、深く考えもせず「いやあ、別にかまいませんよ」と軽いのでOKした。私が特派員をしているテレビ局のズームイン朝の企画など、一〇あげても三つも通ればよいほうとディレクターが言っていた。私も何回か提案して採用されたことなど一度もない。

それなのに、企画が通りましたからよろしくと言って来たではないか。さあ大変なことになった。

「ご家族は協力してもらえますかね」
「ええ、今までも別に嫌がりはしま

せんでしたし、いいと思いますけど」とは言ったものの本当に協力してくれるだろうか。

私はこの時点では事態を楽観していい。ところが、これが大問題だったのだ。

息子達が初めてテレビに出たのは中三と小四の時。家族新聞を出版したのがきっかけであった。テレビカメラの前でも全く緊張することもなく、冗談さえ出る余裕だったのでさすが現代っ子は違うと思ったものだ。「新聞なんて別になんとも思っていない、どうでもいい」としらけた感想しか言わないのでこっちは冷や汗が出た。

あれから三年。長男高三、二男中一の思春期となった。あの時のビデオを再び見て驚いた。二男がまるで蛹から脱皮したかの如く全く別の人間に変身している。気づかなかったが、比べてびっくりした。それは心の中にも言えること。もはや私がどうにでもできる子供ではなくなったということに、やがて気づかされるはめになる。

はたしてテレビのことを切り出すと、「なんで俺達の許可をとる前にOKしたんだ。俺は嫌だからね」と二男。意志の強そうな顔。こいつは手強い。「だって、あんた達、前はけっこう楽しそうだったじゃない」「もう、俺達はテレビなんかアキアキしちゃったんだよ!!」「学校なんかカメラがついてくるなんて絶対願ひ下げだからな」「そんなこと言わずにお願い。もう断れないのよ」「知るか」

一方、夫のほうはこれまた息子以上の難関である。以前夫はすごく扱いやすい人で何をしても怒らなかつた。ところが、男の更年期か知らないが最近やたら気難しいのである。いつ機嫌が悪くなるかわからないので冷や冷やなのである。夫は船員だが、乗船が近づくとイライラしはじめるので腫れ物にさわるようにしているのだ。そんな時にテレビカメラが来たらどーなる。ああ、考えただけでどうにかなりそう。

今、乗船中なので恐る恐るケータイにメールしてお伺いをたてると、しぶ

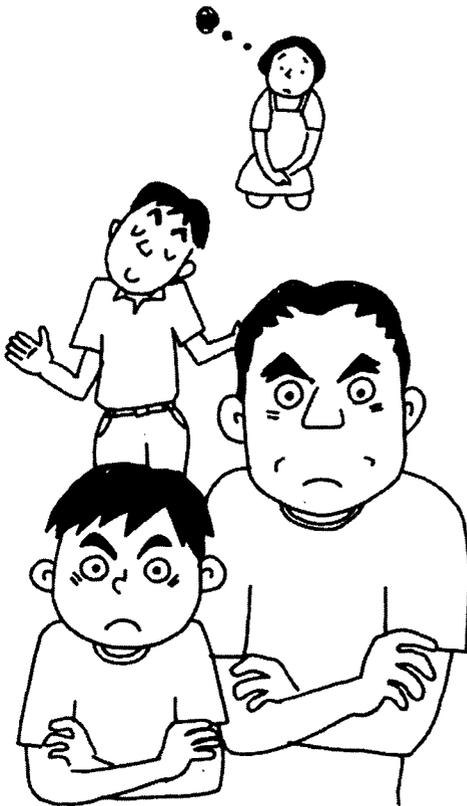
しぶしようがないという感じ。もう二度とテレビはゴメンだと言っていた時期もあったが、最近では逃げられないんだと達観した様子。

つくづく見通しが甘かつたと思うところがもう一つあった。それは撮影に要する期間。今まではせいぜい三分の放送だったので撮影は一日でことたりた。だが、今度は三〇分番組なので半

年間の長期取材。時々カメラが、家庭、職場、学校におじゃまして、その時々様子を撮影するといふのである。

一日なら我慢しようが、半年なんてとんでもないとまたまた家族の大ひんしゆくを買ってしまった。

今さらもう断れない。なんとか協力してもらおうしかない。なんとかなるさ」とたかをくくっていたのだが、なんと



もできない事態がポツ発。

撮影の始まったのが三月であった。ちやうど二男の小学校卒業を間近に控えたある日のこと。何かイベントがないかと聞かれたので卒業パーティーで子供が親に感謝の手紙を読むと伝えた。これはまさにテーマにうってつけの行事なので撮らせてもらいたいという。「学校もOKなので明日のパーティーにおじゃまします」とのこと。

しかし、学校から帰った二男の顔色が変わっている。「先生がテレビが来ると言ったけど、どういうことなの！断つてよ」。今まで見たこともないくらい怒っている。テレビ局が来ればせっかくの思い出が違うものになってしまふ。思い出作りに専念したい。自分にとって大切にしたいものなのにカメラなんかじゃまされてたまるかとまくしたて、最後には泣き出してしまった。仰せごもつともという感じ。私は自分が恥ずかしくなり、テレビよりも思い出のほうが大それたディレクターのケータイに電話して断ったのであつ

た。

ディレクターは快く承知してくれたのだが、二男はこの撮影に反対だったのかと聞いてきた。まさかここまで強硬に反対するとは思っていいなかつた。やはり思春期なのか。もし二男の協力がえられなければ企画そのものが成り立たないし困った、と弱気になる私に企画が通った以上やめることは考えていない。二男を説得に家に来てみるとのこと。つくづく引き受けたことを後悔した。

卒業パーティーはとても温かいよいパーティーとなった。料理も企画も進行も全て六年生。先生や親が招待されたのだ。感謝の手紙とお昼寝大好きな私のために手ぬいの枕をプレゼントしてくれた。とても満足そうな二男の横顔を私は見知らぬ人のように眺めていた。

お隣の教頭先生にテレビ騒動の一件をわびると「いやあ、感動しました」とおっしゃって下さって私のほうはその一言に感動した。

二男はディレクターが説得に来た時

は、ちよつとてれてニヤニヤしていた。家庭はしやうがないけど学校は嫌だというので、ディレクターが小さなビデオカメラで目だたぬように撮ることになつた。

高三の兄のほうは、仮面ライダーウガのサインもらえるなら何だつてやるよという。高三にもなつて仮面ライダーだよ。男には少年の部分があると言えばかっこいいが、三歳のころと趣味が全く変わっていないではないか。私しや恥ずかしいよ。

さて、二男の中学入学式の朝。今日はカメラが来ることになっている。遠くから目だたぬように撮ることでOKした二男だったが、カメラが大人しくしているわけがないではないか。式場内を所狭しと動き回るカメラクルー。洪い顔の二男、冷や汗の私。

式の後で小学校に行つて先生に制服を見せるんだという子供達。何しろ一学年が十七人だった彼等の結束は堅い。これから家での撮影も残っているのにとため息吐きつつ付いて行く。も

ちろんカメラも来た。

教室に入って行った子供達がなかなか帰って来ない。時計をみながらイライラしていると下級生が描いてくれたという似顔絵をもらって来た。「おばちゃん、千明君の絵は晃君そっくりだよ」と子供達がさわぐのでどれどれと見てみるとナルホド。千明を書いた絵が兄そっくりに描けているではないか。全く違う兄弟なのに見る人が見ると似ているのかも。絵にさわろうとしたら持っていた缶コーヒーがかたむいて絵にかかってしまった。「アラアラ、ゴメン」とふくところもカメラはとらえていたらしい。

夫が乗船する前に休暇中の家庭生活を撮りたいと指定してあった日の翌日に急に乗船することになったからさあ、大変。普通ならゆっくりしておきたい日にカメラが来たのである。夫に申し訳ないが、もう心で目をつぶるしかない。

夕食のシーンを撮りたいというので、いつものように夫婦でギョーザ作



● テレビカメラに追われたわが家

りをするところから。事情を話して、テレビカメラは早めに帰ってもらおうようにたのんでいたのに、その日に限って二男がなかなか帰らない。帰らないことには撮影できない。

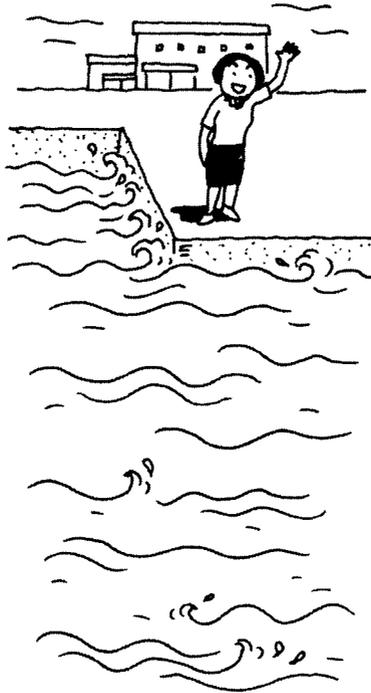
さあ、やっと帰って来て夕食。「あゝ。腹へった。食わせる食わせる」と二男。カメラがいよいよとおかまいなし。しゃべるわ、食うわ。これが思春期です、カメラ嫌ですなんて子の態度かよ。わからんなあ。

テレビ局は、別れる朝のシーンも撮りたいので翌朝、高速船マリンビュー乗船の様子を撮りに港で待っていると、言って帰った。

カメラが帰ると妙に気疲れしちゃってすわりこんでしまった。夫はそのままこたつで寝入ってしまったのでふとんをかける。一度寝たのを起こすとすぐ不機嫌になるのではおっつけておくしかない。夫の服や持ち物を荷造りして、すぐに発てるように準備万端整えて私も眠りについた。

朝五時に夫を起こす。発つ朝にこた

つで起きてすごく不機嫌。そりゃあそ
うだろう。すまないことだ。「もうテ
レビなんか二度とゴメンだからな!!」。
いや、しかし、テレビが来たから救わ
れた部分もある。もし、来なかったら
発つまでの時間をイラついてすらすら



テレビカメラがいるんだぞ。子供がい
たほうが絵になるんだけどなあとい
職業意識が先に立つ私。港に着くとす
でにカメラは待っていた。

「お前はもう帰れ!」と夫。「何いっ
てんの、カメラが来てるのよ」「知る

に私はいたたまれなかったはずだ。テ
レビで気が紛れて悲しむひまもなく
まじだった。

六時半、熊本行のマリンビューに乗
るために港まで送って行く。子供達は
見送りに来るなど夫。しかし、港には

か!」と夫は険悪な表情だ。どうしよ
うと思ったが知らんふりして車を駐車
場に止めると待合室に入った。夫が買
ったキップに領収書が必要なのだが、
自販機しかなくてとまどう夫に、やり
方を教えてやって恩に着せる。ホラ私

がいたほうがいいでしょう。

マリンビューに入る夫に「体に気を
つけて」と声をかけて手を振った。カ
メラも夫と共に中へ入って行ったが、
後ろ向きに下がりながら撮っていて入
口でこけたので笑う。マリンビューは
岸壁をゆるゆると離れて行く。船の別
れは嫌だ。やたら時間がかかるからと
また夫は考えていることだろう。岸壁
の私をカメラは船内からとらえ続けて
いるに違いない。こんな調子で後四か
月どうなるんだろうとため息。

ぶつくさ言っていた夫も、熊本港に
待っていて駅まで送ってくれたディレ
クターの奥さんがたいへんな美人であ
ったとご機嫌であった。男ってなんて
単純なんだ。

というわけで九月三日放送(東京と
熊本以外は同じ週の別の日)の『親の
目子の目』をどうぞごらん下さい。
「ハハア、このシーンの裏はこうだっ
たんだな」と思いながら。

(え・小沢恵子)

乳がん検診顛末記

大阪府茨木市 三好敬子 (47歳)

婦人科検診に、引っかかってしまった。

四十歳過ぎてから、会社で何となく義務感で受けていた、二年に一回の検診。十年以上前、千葉敦子さんの本を読まくり、それなりに関心は持っていたのに、危うい年代になってから、月に一度の触診すらしていなかった。

一月十二日、結核予防会の医師の触診……何も言われず。レントゲン車のような大型車の中での、子宮頸部の細胞採取と内診……何もなし。三番めの、同様の車でのエコー。右側は、今までのように、サッと撫でただけで終わったのに、左側は何度も何度も同じ場所を往復し、静止画像も撮っている様子。

首を伸ばして、ディスプレイを見てみたが、素人には何もわからない。

十日ほどして、健康管理所の保健婦さんから電話があった。

「要精密検査、と来ています」
「へえ、やっぱり」という思いが強く、その時はそれほどショックでもなかった。会社の病院での検査だったら、

時間中に行けるし、健康管理所で予約してくれる、という。金曜の午後のみとのことで、出張の予定の翌週をはずし、翌々週、お願いする。

二月九日午後、NTT西日本大阪病院へ。この十年ほど、お見舞いで行くことはあっても、自分自身の受診はなかった。受付でカルテを作ってもらう間に、問診票に書き込む。職員の人が、丁寧に、外科まで連れて行ってくれたので、ちよつと驚いた（病院も民間会社になったんだ！）。

しばらく待って、診察。

「自分で触診してますか？」

「いえ……」

「あ！ わかりませんねえ」

検診の時の様子を説明し、問診票の中味……身内のがん……について、聞かれる。祖父は肝臓がんで亡くなった。叔父が蝶形骨洞腫瘍、と。血縁に、婦人科系のがんはない、と強調したい気分。

X線撮影。マンモグラフィとは、

帰宅して本を読んで知った。経験者から、痛いとは聞いていた。ひょうきんな技師の方で、

「おっぱいはさんで撮りますから、痛いかもしれせん」

「いや、はさむほどないです」

「いえ、いえ……」

片側ずつ、上下からはさむのと、斜めと、二枚ずつ撮るそうだ。

「失礼します。ちよつと、さわらしてももらいますよ……痛かったら、言ってください」

「痛い！」

と、即座に叫んだが、顔色を見ていて、まだいける、という感じで、ギリギリ締め付けられる。四回繰り返し、終わり。

フィルムを持って、再び外科へ。先生に指差されると、なるほど、左に何やら写っている（ようにも見える）。再び触診とエコー。左乳首上より少し外側に、何かあるようだ。注射針で細胞をとって検査するという。

「ちよつと、チクツとしますよ」

確かに普通の注射と同じように、針を刺される時チクツとしたが、その前に痛いレントゲン撮影をしているので、全然どうってことない痛みだった。結果が出るのが、二月十九日か二十日だそう。

「心配するな、と言っても無理でしょうが、もしがんだとしても、まだごく初期だから、大丈夫ですよ」と言われ、二十日を予約して帰る。

インターネット、YAHOOで『乳がん』を検索してみる。結構あった。あけぼの会の存在は、前から知っていた。キャンサーネットジャパンというサイトを見たら、ハルステッド法で手術した人の写真が出ていた。乳房のない片胸を見て、涙が出てきた。

仕事をしていたりするとそれほどでもないのに、何もない時間に、漠然と不安になる。十二月から職場の組織が変わり、ひどく忙しくなり、仕事に追われる状況が続いていた。今までになく、残業の時間数がふえ……。朝方、夢を見ると、仕事のことか、病院のこ



と。目が覚めて、また、気が重くなる。

二月二十日。予約の時刻に行く。

「悪いモノは出てませんでした」

「エッ？ うわ、ありがとうございます
ます！」

「もう一回、採らしてくれる？」

「ハ、ハイ」

今度は、エコーで見ながら、針を刺

し、その写っている塊のところから細胞をとるために、針でグリグリ探る感じ。マンモグラフィの痛みの後ではないので、これは痛かった。ウーン、と息をこらえる。

この注射針での細胞採取だけでは、正確でないかもしれないので、切除して検査する、とのことで、三月七日に外来オペを予約する。その時に書いて

持ってくるように、と同意書を渡される。「左胸乳房乳腺腫瘍摘出術」とあった。

手術に向けての検査。採血・採尿と耳たぶにかみそりで傷をつけて血の固まる時間を測るもの。ストップウォッチを持った検査技師が測ってくれる。えーっ、手術ってそんなに大変なの？とちよっとめげる。その夜は、二か月ほど逢っていないかった、前の職場の人たち呼び出して、ビアホールで閉店まで飲んでしまった。

健康管理所に報告の電話をする。担当の管理医は、まだ若い女性で、電話のむこうで、医学書を繰りながら、何とかして慰めなければ、という焦りの空気が伝わってくる。

「大丈夫ですよ。今の段階なら、全部取ったりはしないから……」

手術の前日、帰宅すると、ミズクレヨンハウスのブッククラブから、今月の本が届いていた。うち一冊は「がん患者学」。ちよっと、開いてみる気に

はならなかった。

三月七日、昼食抜きで病院へ。血圧と体温を測り、エコー。切る部位に、マジックでシルシをつけられる。前回の二十日の注射針で採った細胞の検査結果は、五段階の一を正常とすると二くらいだと言われる。現物を取ってみるしかないかな、と。

トイレをすませ、看護婦さんに手術室のフロアーに連れて行ってもらう。折り畳み両開きのドア……廊下の壁の下方にあるくぼんだところに、足を差し込むと開く。中に入って、また、足を差し入れ閉める。ロッカーで、下着一枚になり、手術着に着替える。化粧を落とし、両手を洗い、使い捨ての帽子とマスクをつける。鏡の前で、マジックのシルシを見てみる。

「えっ、こんなに切るの？」
自分で勝手に、検査のために、五ミリ角ほど切るだけだと、思いこんでいたのだ。

手術室の看護婦さんが迎えに来られ

る。廊下から、ドアのないオープンな感じの手術室。左片肌脱ぎになって、手術台に横になる。幅が狭い。主治医とサポートの医師とで、手を置く台を取りつけてくださる。右手には血圧計のベルトをつけ、手はゆるく縛られる。足首のは、心電図だったのだろうか。緑色の布がお腹から下へ広げられ、台につけられた棒にも布がかけられ、自分で胸のあたりを見ることはできなくなった。左胸から脇の近くまで、広範囲に消毒される。ふと天井のほうを見ると、手術用の何個ものライトの間、カメラを取り付ける部分か「ニコン」と書かれたスペースがあって、そこにわたしの『患部』が写っている。

看護婦さんが先生に、
「20・20？」
とか尋ねている。

「いや、機械によつて違うから、使い始めてみないとわからない」
と答えておられる。何の機械だろう、と思う。

主治医が左脇に立ち、もうひとりの

先生は右側。手術台が上げられる。

局所麻酔の注射。はじめのチクツだけで、あとは感じない。ずっと写っているのを見ていた。あ、メスで切られた。その後は、おそらく、ずっとレーザーメス。あれは、機械の出力が何かだったのだろう。メスのスイッチが入っていると、ウィーンと音がする。何か少しこげくさい匂いがする。直接胸元を見ると、煙が出ている感じ。

「痛かったら言ってくださいね」

と言われ、

「痛いです」

と言うと、すぐに麻酔を追加してくださる。ふと、三森さんのことを思い出した。ラマーズ法で有名な助産婦さんだ。三森さんの助産院で私は三男を産んだのである。杏林大学病院に見舞ったとき、

「この看護婦さん、やさしいの。痛いとなースコールしたら、すぐにここ(背中)の管)に痛み止めの薬、入れてくれるの」

と、言っておられた。がん末期の痛み



だったんだろうな、と。

なれないマスクをしているので、息苦しいような気がする。右側の医師の、左肘がわたしの顎をグイグイ押ししている感じ。お腹のあたりには、置いてある器具の重みを感じる。のどが渴く。暑い。

「暑いです！」

と言うと、

「ああ、僕も暑い。室温下げて！」

と言ってくださる。

左胸にあいている穴に、ガーゼを押し込んで、血をぬぐっている様子が写っている。あ、ホラー映画みたい！映画の題名は何だったかな？といういろいろ考えてみるが、『エイリアン』しか思いつかない。違う、違う。胸に手をつつこんで、心臓をわしづかみにして、取り出すの。

「あ、乳腺にぶつかった」

とか、

「深いなあ」

という、主治医のつぶやきが聞こえる。

何やら塊を取り出したあと、縫い始

められたらしい。でも、それからが、長かった。じつと見つめていても、あまりわからない。足先は冷たいのに、脇の下には汗をかいている。

隣の部屋でしていた耳鼻科の手術が終わったらしく、ドヤドヤと開け放しの廊下に人の出て来る気配。医師だろうか、

「〇〇に行って、△△食おう！」

という男性の声。そうだ、スタッフにとって、手術というのは、全く日常のことなんだ、と思う。

時々、痛みを感じ、麻酔を追加してもらいつつ、わたしにとっては、かなりの時間の後、

「今から皮膚を縫いますよ。もう、ちよつとですよ」

と声をかけてくれる。できるだけ、抜糸のいらぬ糸で縫う、と術前に聞いていた。

やつと最後の一针が終わり、助手の先生に、

「五分間押さえて！」

といわれ、手のひらを当て、体重かけ

て、押さえてくださる。

「時計が止まってる」

と言われ、あ、何時何分に始まったのか、見ておくのを忘れた、と思う。

消毒薬の余分を拭いて、大きくガーゼを当て、乾くのを待って、十センチ幅ぐらいの大きな粘着帯で胸半分から脇にかけて、押さえる。

「ホルマリンですか？」

と看護婦さんが聞き、

「その前に、この人に見せてあげな
あかん」

と、摘出した塊を顔のほうに近づけて
くださる。梅干しの小さめのを二個並
べたぐらい、男性の親指の先ぐらいの
大きさか。

「うわ、砂肝みたい。当分、食べら
れませんか」

「あー、見せんほうがよかったか
な？」

「いえ、見たかったんです」

砂肝というより、むしろ、牛スジ肉
の白く固いスジの部分のように見え
た。固さを知るために、さわらせても

らえばよかった、と後から思った。プ
ルンプルンなのか、ブツンという感じ
なのか。

手術台の上で、助け起こしてもらい、
自分でサンダル履いて、ヨタヨタとロ
ツカーへ歩く。小一時間かかったよう
だ。もう、次の人が、待っておられた
様子。外科医って、ホントに大変な仕
事だ、と思う。一時間立ちづめで、神
経も張りつめっぱなしなだけでもしん
どいだろうに、八時間や十時間、なん
て手術、どうするんだろ、つて思う。

ロツカー室で、いすにへたりこんで
しまう。思いのほかの、ヘビーな体験
だった。こわごわ、鏡に写してみるが、
大きなガーゼと絆創膏で、何も見えな
い。ノロノロと着替え、外来へ。三十
分後に出血状態を見る、とのこと。地
下の食堂は閉まっています、売店におに
ぎりとお茶を買う。が、あまり、食欲
ない。

出血は全くなく、翌朝の外来の指示
を受け、家族や職場に電話を入れ、産
科のナースステーションへ。二十二年

前に、長男を取り上げていただいた時
からのつきあいの助産婦の奥野さんに
逢いに行く。ここ四・五年、お目にか
かっていたなかった。この三月末で定年
退職し、大阪を離れられる、と聞いて
いたので、ぜひ逢いたかったのだ。ほ
ぼ一回り年上のこの方に、授乳中、子
育て中、何度助けていただいたか……
あの時の、オツパイだ。

抗生物質・痛み止め等の薬をもらっ
ていた。その夜は、さすがにビールを
飲む気には、なれなかった。

痛まずに寝たが、浅い眠りだったよ
うに思う。翌朝病院に行く前、三男が、
洗面台で髪を洗ってくれた。タオルで
胸を庇いつつ……。ちよつと腫れてい
る気がする。

消毒して、ガーゼをいくぶん小ぶり
なものに取り換えてもらい、絆創膏の
粘着物をとって拭いてもらうだけで終
わった。入浴以外は、普通の生活をし
てもいい、と言われたが、午後出勤す
る気力はなく、職場に電話して帰宅。
ひたすら眠る。まさか局所麻酔が残っ

てはいまいが、一時間のなれない凝視と緊張と、この三か月の日々の疲れと、鎮痛剤とで、眠り続ける。

翌日も、同じ状況で、身体もだるく、起きられない。結局、そのまま休んで、ひたすら眠る。

三月十日ごろから、薬のせいとか、顔がむくむ。首にじんましんも出てきたので、ロキソニンを飲むのをやめる。

三月十二日、外来へ。ガーゼがはずれる。

「傷口、きれいですよ」

主治医ではない、若い先生なので、質問もできない。検査結果を聞くために、十九日午後を予約する。

その日、やっと四日ぶりに出勤。周囲の人たちが、気遣ってくれる。

家に帰って、鏡に写してみたら、センチ強ほどの傷口だった。

頭痛がとれなくなってくる。こめかみのあたりに、圧迫痛。重い。パファリンのんだり、タイガーバームをすりこんだりするが、とれない。お風呂にゆつくり浸かり、早めに布団に入り、

眠って、朝目覚めても、

「あれ、まだ痛い」

病院に電話で相談し、十六日、外科の外来へ。主治医はこの日も診察日ではなく、別の医師に症状を説明すると、

「それは、内科だ」と。

「先生、こんにちは！ あのー、結果、出てるでしょうか？」

「あ、三好さん、大丈夫でしたヨ！」

カルテをさがしてきてくださったって、

「そう、そう、大丈夫。良性でした。取った時、固かったからねー、ちょっと」



電話連絡してもらったが、午前中の受付は終了で、しかも、満杯だから、

と午後にもわされる。また一日、休まねばならない。

廊下を歩いている主治医を見つけ、追いかけて、

と心配やったんやけど……。よかったね！ こんな紙でいいかな？」

と、手近な紙の切れっぱしに「乳腺線維腺腫」と書いてくださった。

「ありがとうございます！ ありがとうございます！ ありがとうございます！」

で、十九日の予約は取り消してもらい、またあちこちに電話。

産科が上がって、奥野さんにも喜んでほしい、しばらく話す。

かなりの時間待って、血液検査もすませ、その結果を持って、内科で診てもらった。

「数値は全く正常です」

そう、一月三十日の一般検診だけでなく、三月一日の献血の検査結果だつて、何ひとつ悪いところはなかったのだから……。最近の状況を説明すると、若い医師は、うしろにまわって肩を押しさへ、

「肩の凝りのせいか、眼精疲労からくるものか、最近の心労からくるものか……」

と、筋肉をほぐす薬を処方してくださいました。

二、三日後には、いつの間にか、鬱陶しい継続する頭重感も消えていた。「がん患者学」の本も、切羽詰まった思いでなく、読める。風邪なのかアレルギー性鼻炎なのか、鼻水・涙といっ

た、不快な症状が、何か置きみやげのように出てきてしまったが……。

心配してくれていた家族・友人、みんな、

「よかったね」

「おめでとー！」

と言ってくれる。いまや、がんの発症率は三人にひとり、なんて言うのに、やつぱり、真剣にこわかったんだ、この二か月。意識下で怯えていたのだ、と思う。今まで、他人のこと、心配していたようで、ホントのとき、わかっ

てなかったんだな、と思う。

また、今まで、手術と名のつくものを体験したことがなかったの、身体にメスを入れるということ、簡単に考えすぎていたのかもしれない。意識も無意識も、表面も奥も、トータルで、わたし。そんなことを、あらためて、考えてもみた。

何ともない、とわかったこの春。また、ひとつの山を越えて、スタートだ！

(え・實輪絵衣子)

お友達に「わいふ」をおすすめください

新しい定期購読者をご紹介くださつた方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださるごとに誌代プラス送料とも一号延長。

「わいふ」年間分をプレゼントにお使いください

●御結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申し込みいただければ、新読者に、送り主のお名前とプレゼントのおしらせを同封の上、一年分、計六回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介の場合と同様に、お一人につき一号分延長させていただきます。

●また十冊以上ご購入くだされば割引がございます。

ハッピーワークください

東京都分寺市 吹野あゆ子（28歳）

よくB型は「ながら」族だと言われる。一つのことにとどまっているのが苦手な飽きやすい。

私もまさにその血液型の影響を受けたのか、子供を産んですぐに育児だけの生活に物足りなさを覚えてしまった。それ以前は出版社で編集の仕事に携わっていたが、妊娠を機に退職。続けようと思えば続けられたが、幼少時は子供との時間をたくさん持ちたいと考えていたこともあり、専業主婦の道を選んだ。子供は可愛い、目の中に入れても痛くないとは真実の言葉なのだ……目の前の我が子に夢中になりながらも、どこかで虚しさを覚えた私は育児の傍らさまざまなことに足をつ突っ込んでいた。けれども心の奥底には子供時代からの夢がふつつつと沸き起こっているのを自分でも感じていた。

物書きになりたい、書くことで食っていきいたい！
情熱が爆発しそうになって、いてもたってもいられ

なくなつたちようどそんな折に、友人から、

「文学ページの記事を一年間担当してみない？」

と声をかけられる。驚いた。信じれば、願いは叶うというのは本当なのかもしれないと心底感じた。

編集経験はもちろんあった。文章を書くことも得意だったが、果たしてお金をもらって他人に見てもらえるような文章を書けるのかどうか自信はなかった。けれど、子供がいても自宅で作業OKという甘い誘惑につられて見切り発車で仕事を始める。好きなことだ、なんとかなると高をくくっていたのである。

それから生活は一変。ペーパーシッターに預ければいいものを昼間は子供と過ごしたくて執筆の時間はもっぱら夜中になった。睡眠不足のいらいらは積もり積もって、昼間の活動にも支障をきたし、子供を公園にも連れていかれない日々が続く。おまけに夜更かしの母親の影響で子供も宵つ張りになり、精神衛生上もよろしくない。子供が寝なければ仕事ができないのに夜中の一時二時まで寝ない子供に手を上げそうになったこともしばしばだった。

締め切りは月に一回。それほど大量のページをこなしているわけではなかったが、初めてのことであったから無我夢中だった。一月のうち、三分の一の時間を仕事に費やせばよかったのに、ほとんど毎日仕事のこと気に気をとられてしまった。そのせいか家事は当然手抜

きになり、子供と真剣に向き合うことが億劫になってきた。パソコンに向かっている私の横で遊んでほしいとせがむ娘の顔を見ては胸を痛め、それでも自分の夢だからと必死に文章を書き続けた。主人も一心不乱の私に何も言えないようだった。

仕事を始めて半年以上が過ぎようとしたころ、最初に比べれば要領がよくなったのか、仕事のことですべての生活が追われることはなくなった。仕事に集中する時期とそうでない時期の区別がつけられ、子供ともちゃんと遊べるようになった。子供の精神状態が不安であっただけに、仕事と家庭の配分をつけられるようになったのは喜ばしいことだった。

ただし、仕事をしているとつらいことにも遭遇する。主婦同士だと言いたいこともぬるま湯の中で流してしまふことが多いが、ビジネスともなると激しく批判さ

れる。担当編集者の意見に素直に耳を貸せずに、小さい子供がいるから……と喉の奥で言葉をのみ込んだことも何度もある。いつのまにか、子供がいること、母親であることが言い訳という鎧になっていたのだと痛感して空恐ろしくなる。

せっかく結婚して主人の扶養を受けているのだから、控除されたい。そのための操作をするために取引先に相談したら、「バイトではないのだから」といかに「主婦はこれだから」とため息混じりの反応を受ける。主婦なら賢くお金を稼ぎたいはずだと反発しながらもプロ意識の低い自分を知ってうちのめされる。

娘も二歳を過ぎて、言葉も増えてきた。私がパソコンに向かっていると興味津々で寄って来る。以前の私だったら「だめ」の一点張りで娘を突き放していただろう。だけど、今は違う。「ママ、お仕事しているか



ら、これは大切なんだよ」真剣な目で訴えると伝わるようにこくりと娘は頷く。分かってくれているのかもしれない。

自分なりの色のついた文章を書きたい、そしてそれが主人や娘を幸せにできる内容だととてもいい。まだまだ家庭や仕事のバランス、仕事内容の向上など課題は山積みだけれど、これからがますます楽しみである。苦勞してでも自分のやりたいことに向かっているパワーをずっと持っていたいと思う。

十五年勤めた会社を辞めた

東京都 田口恵子（37歳）

今年の二月、十五年勤めた会社を辞めた。大学を卒業してすぐ、総合職第一期生として就職した会社である。いちおう名の知れた一部上場の企業だ。二度の育児休暇をとり、あと数年で管理職になる予定だった。辞めた理由は、直接的に言えば、収入以外すべての点で、理想的な仕事に転職できたからである。週に三日、やりたかった仕事をする。待遇はパートである。

入社したときから、ずっと辞めることを考えつづけてきた。まわりのおじさんのように売上シェアの上下



に一喜一憂できなかった。朝から番まで、飲み会を含めた会社の人たちとつきあわなければならぬ生活は性に合わなかった。なんだかわからないけれど、自分がやりたいことはこの会社にはないような気がしていた。出世して、そこそこ偉くなっても、そのことに価値があるとは思えなかった。

結婚して、子供が生まれた。育児休暇をとれる会社で、辞めるのもつたいなかったので、仕事を続けた。子供を持って働く、別の意味で居心地が悪くなった。保育園のお迎えのため、残業をしない働き方に文句を言われた。残業をする必要がなくても、である。飲み会への出席の悪さを同情された。私は、嬉しかったのに。それでも、辞めなかったのは、消費者の感謝の言葉が聞けるなどの、楽しいこともあったから。それから、会社を辞めた自分が、本当に通用するか自信がなかったから。そこそこ楽しくやっていけることは、辞めるリスクを考えるとより楽だった。

今度の職場に採用が決まったときも、本当に辞めることが正しいか、かなり悩んだ。夫はそこそこの稼ぎがあるので、生活にはまったく困らないが、自分の財産はこれ以上増えない。肩書きのない自分は、ふつうのおばさんになっちゃうんだろうか。「フルタイムで働くのが偉い」みたいな、今の社会の流れに逆行するのもこわかった。

でも、実際辞めてみて正解だった、と今は言える。新しい仕事は楽しいし、充実している。仕事のない日は、からだを鍛えたり、その仕事の専門性をもっと活かすための勉強もできる。子供とのふれあいも増え、幼い時期しか味わえない蜜月を満喫している。日曜日の夜も、憂鬱になつたりしない。稼ぎが減ったからと言って、夫との関係も変わっていない。相変わらず週末には、家事を一手に引き受けてくれている。何をあんなにこだわっていたのだろう、と不思議だ。

私も含めて、雇用機会均等法以降の人は、制度も整っている、なんとなくもつたいなくて働き続けている人も多いように思う。大切なのは、世論の流れや、日々の情性に流されず、自分のしたい生活はどんなものかを考えることなのか、と思う。フルタイムで働くことに意義を感じる人はどんなことがあっても働き続けるべきだ。専業主婦が楽しい人は、専業主婦でずっといたっていいではないか。

「エラソウなこと言って、子供が巣立って暇になって、年金も少なくなる。きつと遠い将来後悔するよ」という先輩方もいるかもしれない。でも、ミヒヤエルエンデの「モモ」ではないけれど、いつかくるであろう「本当の生活」のために、今を犠牲にする必要はない。今を「本当の生活」にするべきなのではないだろうか。

パソコンのおかげ

東京都世田谷区 後藤 晶 (42歳)

半年ほど前にパソコンに一人で取り組み始めたいきさつは、本誌二八七号に載せてもらった。そのとき「パソコン検定」の勉強をすると結んだのだが、実はいまだに受けていない。
 というのもその直後、ひよんなことから近所の事務所にパートで勤務し始めたのだ。実践的にパソコンの習得をすることになり、つい検定のこととは後回しになっている。



この仕事には、パソコンに触れていなければ決して就くことはできなかっただろう。たまたま夫から「ある程度の会社勤務の経験があり(つまり社会人としての常識がある人)、事務能力もあり(いちおう元銀行員の私)、パソコンも少しできればなお可」という求人情報を得て、思い切って事務所に自分から電話してみたのだ。

先方はそれとなく伝手を辿って私についての情報を集めたらしく、面接の連絡が来た。時給っていくくらいかなあ、とのこのこ出かけていくと、かなりごちゃごちゃした事務所だった。

相手は私の夫の知人で、なぜか非常に銀行員の夫を信頼しているらしく、めでたく私は採用になった。しかも、家庭の負担にならない程度で学校の行事なども考慮し、週三日くらい手伝えばよいと言う。事務部門を整える計画なので助言してくれとか、どんどん改革したいとか、時給七五〇円の主婦にそんなに任せるとは、夫の威光のおかげか。

結婚後は、在宅で通信添削、半年ほど博覧会でコンパニオンなど、夫の転勤とともにその場その場であれこれ地味に小遣い稼ぎをしてきた。しかし社宅にいて小中学生の子どもがいると、家にいる生活からはパートといえどもなかなか外へは出にくい。二か月に一度とはいえ、社宅のごみネット当番のことを考えると気



が重くなる。でも今回は近所だし、下の子はもう高学年だし、社宅内では私は年長のお局だし、家族も大賛成だし、と条件がそろい、私は出て行くことにした。

仕事は掃除から始まって、社内の片付け、電話の取り次ぎ、少しのパソコン入力、お金の勘定など。電話の切り替えやファックスやコピーの操作もノート片手に教えてもらい、忙しそうな社員の方たちの横ではじめは居場所がない感じもしたが、慣れれば自主的に仕事を見つけて動けるようになった。かなり会社や業界の内側のことを見聞きできる場所にいるので、立ち入ったことには口をはさまないようにしている。若い社員の人たちに案外親切にもらって、ふっと緊張が解けたときに、電話で聞き漏らしたり勝手な判断をしてみましたという、ミスをする。その都度、初心を

保とうと自戒する。

規定の仕事に加えて、データの大量の入力や突発的な用事も頼まれる。パソコンって使いながら覚えていくものだなあと、誰にも言われたことを実感する。また、以前なら外注していたであろう印刷や事務処理も、今はほとんど自前でできてしまうことに驚く。そして、誰もがパソコンを使いこなしていることも目の当たりにして、今までの私には再就職の資格はなかったかも、と認めざるをえない。

しかし、仕事というのは他人と関わる部分も多く、主婦や母親をしていた時間に関わらないものも無駄ではなかった。いつやめても生活に困らないとはいえず、まじめな性格の私は、夜な夜なマナー本やパソコン本を開いている。少しの給料でもいたただくとなれば責任を果たしたい。そして自分に確かに向上したい。

職住近接はいい。昼休みは家で残り物を食べ、布団を取り込んだりもできる。時給の高い仕事と通勤時間や休暇の条件込みで比べると、トントンかなと思う。

遠ざかっていた実社会に出るよい機会になっていく。人間関係やパソコンの実地訓練としては、やはり給料が介在するのがよい。責任感ほど心身を鍛えるものはないだろう。

キャリアアップもめざす私。お楽しみに。

(え・西宮さき)

家族の スケッチ

父のスケッチ

千葉県船橋市 祥 まゆ美

父が急死して半年になる。お骨になった父はまだ私の家にいる。納骨する場所は申請許可されているのだが、なかなか手ばなせない。

昨年十二月、父の内妻さんからめずらしく早朝電話がかかってきた。あいにく前夜に二歳の娘が高熱を出し、おたふくカゼにかかっていて、医者へ行くこうとしていたところだ。

「お父さんが、死んだのよ」
私は聞きかえした。

「えっ？ どうして」

「糖尿病で今朝、急に倒れて、もう死んでたのよ、とにかく早く来て」

その年は父と電話で一度話したきりだった。後で内妻さんに聞いたところ、ずっと入院を繰り返していたそう。私に絶対知らせるなど、固く口止めしていたらしい。

夫を呼び出して事情を話し、帰宅してもらった。娘を医者へ連れて行くほうがその時私にとって一番大切だった。もう父は死んでしまった。心の中で繰り返そう言いつづけていた。

父と、いや、なきがらと会えたのは検死を終えた警察の霊安所だった。家での急死ということで、一応調べたらしい。

父の顔はぱっくりと口をあけて、まるで、何かにおどろいているようだった。入れ歯をはずした口の中は暗く見えた。まだ六十六歳なのに、老人のようにやつれ果てていた。

長年の糖尿病との闘いで、精も根もつき果てたのだろう。私は哀しみでもない、無感情なまま父を見つめていた。

「私は籍も入っていないし、葬式も出せないから、娘のあんたが引き取ってよね」

内妻さんからそう言われたのは、そのすぐ後、警察の待ち合室室であった。十年以上も同居した人の言葉が、薄情すぎるとふんがいった。

怒りと哀しみとで口がきけなくなつた。だまって私ほうなずいた。

調べてみると、父はあちこちに数百万の借金があり、私が相続放棄をしないと、大変なトラブルになるらしいと分かつてきた。内妻さんには父の死亡保険金が入るが、私には一銭も残しておらず、いそいでその手続きに走り回つた。

ようやく我に返つた気分になれたのは年末ごろだつた。その間、身内は父の妹と私だけという淋しい葬儀をやり、父は骨になつてしまつた。

父が焼かれてゆく時、自分でも止められぬほど号泣した。理性というカラが、はじけ飛んでしまつたように泣きじゃくり続けた。

うす茶色に焼け上がった父は、立派な骨に変わつて横たわつていた。もう私は冷静になつて、つくづくとガイコツの父を見つめていた。係員が骨つばに父の骨をつぶしながら押し込んでゆくのを、見ていて、もつとていねいに入れてよと、不快だつた。父は痛くも

かゆくもないのに……。人は死ぬとき、一円玉一つ、自分の指一本さえ持つてゆけない。父は死ぬことで「生」を教えてくれ「死」を見せてくれた。

父はタクシー運転手を四十年以上勤めてきた。その間、無事故無違反だつたそうである。一滴も酒を飲めぬ体質と、サービス精神旺盛な性格がその仕事に向いていたのでらう。しかし、糖尿病にとつて、運動不足、過食とストレスのあるこの仕事は、命とりだつた。まだ六十代半ばの父の体は、もう八十年代くらいに弱つていたと思う。父は精

一杯がんばつて生きたのだ。

私が亡くなつた知らせを聞いて父のところへ行くとき、駅からタクシーに乗つたのだが、偶然、それは父の勤める会社だつた。何だか父が、運転してくれているように思えて、涙が出た。

もう二度と父に会えない。しかし父の命の一部は私に生き続けている。それを大切に、自分の人生を生きてゆこうと思う。

待てば……

埼玉県さいたま市 麦穂

友人から株分けしていただいたスズラン、うちのプランターから芽を出すこと三年目にしてやっと花を付けてくれた。葉っぱばかり元気に伸ばしていたスミレもやっと白い花を咲かせてくれた、嬉しい。

息子が家庭で口を利かなくなり一年、姿さえ見せようとしなくなり一



● 家族のスケッチ

月半。ここまで来てしまおうと彼との間を修復しようにもなす術さえ見当たらない。何を思つてのことか高校へは行かなくなり、今はせつせとスーパールのバイトに精を出している様子。

学校へ行かなくなったこともバイト先でのことも、毎身体調を崩すこの季節であることも、そして将来のことも心配は尽きない。

時々必要事項だけをぶっきらぼうに言いに現れる息子は眉間に皺を寄せ「話しかけるな」と言う顔付き、きつと私が彼に嫌な思いをさせ、気がつかないままそれを繰り返し、彼の心を閉ざしてしまつたのだらうと思つと、親として人としての劣等感に苛まれる。今では自分の落ち込みが激しく息子の心配どころではなくなつてしまつた。そのことにふと気付きまた親としての未熟さに、もひとつ深いところへ突き落とされた。

息子との関係の中で私の存在価値を見出せなくなつてる今、どう自分を支えたらいいのか分からずズルズル過ご

している日々。ここから、この場所から逃げることはかり考えている今日のごろ。あんなに仲良くしていた息子の友人の母たち、彼女たちに会うと眩しくて目を潰されそう、心が潰れそうで怖くて買物にも出られない、電話さえ取れない。うつ病を患い始めたのだろうか。



二八九号の「わいふ」、十河さんの息子さんは一人暮らしを始めたら変わったという、浅川さんのお嬢さんの心のつまづきは十年かかって回復に向かつているという。

四十歳くらいで人生終わつてもいい

と思つてらした寺田さんは、六十二歳にして「生きるつて悪くない」と思ひ出された。すっかり臆病になつてしまつた私はどんな助言をもらつても身動きがとれない。そんな私にも待つていれば光が再び射す日が訪れるのだろうか。

自分の若いころを振り返る。親の心配よそれに突つ走つていた日々、一年……いや二年はあつただらうか。そう、親の心配をよそれに。少なくとも自分が親に心配掛けた分はじつと待つてみよう。今は心身共に動けないのだしそうするしかないのだ。

私の結婚は成功か

千葉県船橋市 三枝きよみ (64歳)

以前、和田副編集長が「夫の定年は結婚生活決算期」と書かれていたのを読みなおし、自分のことを少し考えてみた。結論的にはいろいろあつたが、これでよかつたのだとしみじみ思つて



いる時がある。何と言われようと辛抱しなければならなかった形態があったからこそと、思える時もあるが……振り返るとあまりにもくだらない会話に憤慨しこれは別れるべきだ、それ以外にはないと考えた時もあった。

二人で中華料理店をしてたころ、何かのきっかけで「半人前のくせに一人前の口をきくな」と言われた時のことだ。絶対許せないと思った。女だから半人前と言うのか、私の仕事に対して半人前と言うのか訳は聞かなかつた

が、こんなにまで言われては別れるべきだそれ以外にはない。私のほうから「別れよう」と口にした。「ああ、それでもいいさ」と相手も答える。暖簾をしまい店を閉める。一人で部屋に入り悔しさを寝ころんで考える。財産といつても、この家だけだ。半分にしたら二千万くらいだろう。

子供は一人ずつでこれから先は何の仕事で生活をするか、二人で稼いでどうにか子育てしているのに……子供が可哀想だ、子供は絶対不幸にしたくない。夫も子供には優しい。子供が結婚するまでは辛抱するか。

私さえ何を言われようと我慢すれば納まる。二時間ばかり頭を冷やし店へ行き「さっきの話だけどやっぱり別れようと言うのは撤回するわ」と一言。「分かったらそれでいい、早く暖簾を出せ」。それで喧嘩は終わるのだが、後味は悪い。

そんな細かい言い合いが何度かあったが、そのころを考える時、若かったな、いろんなことがあったなと懐かし

んでいる自分がいるから不思議だ。

夫は現在六十五歳だが、自分で運送業をしている。私もパートで仕事に行っているが、私の勤めが夕刻終わると、遠距離の仕事のとき以外は必ず迎えに来る、別に頼んだ訳でもないのに……会社勤めに勤めてる友人も「今日は来てないね、一緒に帰ろう」と言ってくれるが、そんな時車が入って来る。「あー間に合った、横浜まで行ったが道路が混んでいてね」「無理しなくてもいいよ。歩いて帰るよ」と言ってもやはり嬉しい。

若い時言い合ってたことも、文句を言ってたことも、あの時はあの時、今がよければそれでいいではないか、このごろになって優しくなった夫、それに有り難いと思いつながら今を生きる。これから先、どのくらい生きられるのか分らないが、夫がどのように思っているのかも聞いたことはないが、私は今になって、私の結婚はこれでよかったのだ。まずまず成功の部類かなと思える。

日曜日の大喧嘩

京都府宇治市 匿名(40歳)

朝から頭がガンガンしていた。でも旦那は仕事で洗濯、洗い物、私しかする人間がない。頭痛薬を飲み、一つ一つ片付けていった。九歳の娘は早くから起きてテレビを見ていたが、土曜日に塾の帰りが午後十一時前だった息子は、まだ寝かせておいた。今日も日曜特訓で午前十一時には出て行く。本人が希望するからやらせているとはいえ、まだ六年生の子供にここまでやらせて何か間違っているような気がいつもしている。

息子も八時半には起きてきた。まだ眠そうな顔をしていたが、朝ご飯を食べるとしっかりした顔つきになった。息子にご飯を食べさせて安心したのかまた頭痛がひどくなった。「お母さんは頭が痛いから」と言って二階の布団に横になった。

買物に行くのが辛い。日曜朝の特価品だけは買っておきたい。娘はまだ頼りないので息子しか頼む人がいない。

広告を見ながら買うものを言ううと娘がメモ用紙に書いてくれた。定価百七十円が半額のパンとか、一パック九十八円の卵とか、本当の特価品ばかりだ。でもちゃっかり者の娘は、

「私バナナが欲しい!」
と言って(確かに特価品になっていたが)バナナまで書いていた。

九時半になったので息子にメモを渡して買物を頼んだ。普段から協力的な子で私はとて頼りにしているし、助かっている。

「お金が余ったらあんたが特訓に持っていく好きな物買っていいよ……」

「OK! 行ってくるわ」
快く引き受けてくれた。その時とても嬉しそうな顔をした。

お金は千円渡したがひよっと足りなかったらと思ってあと二百円持たせた。だって特価品ばかりだもの。充分足りると思ったのだが、後で考えると

このアバウトさがまずかった。息子が何が欲しいか聞いてきちんと計算してお金を持たせてやればよかった!

(いやらしい言い訳だが頭が痛くてそれどころではなかったんだなあ)

日曜特訓は十二時から六時までなので早めに昼ご飯を食べて行く。途中の休憩用にいつもパンとかちよつとしたお菓子を持たしていた。しかしその日息子が欲しかったのは……その時わかっていたら……確認していたら……。

なかなか息子が帰ってこない。嫌な胸騒ぎがしてきた。池田小の惨劇の日後だ。

「何かあったんやろか。やっぱり私が行けばよかった」

不安の嵐が胸に広がっていく。二階の窓からずつと下を見ていた。

やっと息子が帰って来るのが見えた。しかし様子がおかしい。

「どうしたんだろう」と思いながらカギを開けた。

身体全体から不機嫌のオーラを大放出した息子が立っていた。

「お金が足りなくてウイダーインゼリー買えなかったわ!」

いきなり大声で怒鳴った。こっちは寝耳に水だ。

もともとクリムパンぐらいなら買えるだろうと思ってお金を持たせているし、いきなり怒鳴られてもどうしていいやらと思っただが精一杯優しい声でここまで折れた。辛抱した。

「それは悪かったなあ。お金渡すし今からもう一度買ってきたらどうや」

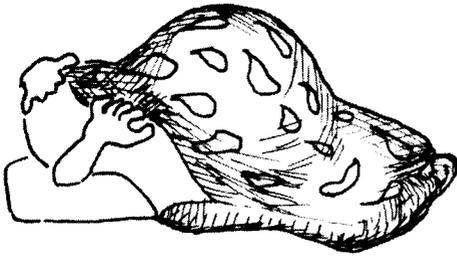
「いらんわ!!」

吐き捨てるように怒鳴って買ってきた荷物を置き、すごい勢いで二階に上がって行き、私が寝ていた部屋に入り込んで引き戸を家が揺れるほどの勢いで閉めた。

怒りが心から込み上げてきた。ここまで怒るのは何年ぶりやろう。息子に負けない勢いで二階まで駆け上がり戸を一気に開けた。

「頭が痛いからおまえに頼んだんや。元気なら自分で行くわ。辛抱して洗濯して洗い物もして、ご飯も作ってやっ

たやろう。それを一人で切れて怒って! ウイダーインゼリーが買えなかったら行けないのなら塾なんか行くな! やめてしまえ」怒鳴りつけるとびっくりしたような顔をして部屋から出ていった。布団の中で泣けて仕方がなかった。育て方を間違ったと思った。恐る恐るという感じで戸が開いて息子が言った。



「さっきはごめんさい」泣きながら答えた。

「どうしてこんな思いやりのない子になったんや」謝ってきた奴にとどめをさした。

「私はあるが大嫌ーい」や戸がすっとしまつて出ていった。

ひどいことを言ってしまった。後悔が胸に重くのしかかる。

息子にしたってわざわざ買物に行つたのにどうして母親に怒鳴られなくてはならないのかと思っているだろう。つぶれやすい食パン三個に、割れたら叱られる卵、重いバナナ、辛抱して買ってきてくれたのに。私はどうすればよかったのだろう。なんでこんなに息子との関係が悪化したんだろう。ただただ泣いていると娘が横に入つてきた。

「ぜい肉もんでいいよ」いきなり歌った。

「ぶーこ、ぶーこ、バビブベぶーこ、ぜい肉いっぱい太い足だよ。バビブベぶーこ」

太めの陽気で明るい娘が、一生懸命私を笑わそうとしている。

「ママには泣いた顔は似合わないの。笑っている顔が一番いい」そう言いながら頭を撫でる。

この間も息子と喧嘩をして口を聞かなくなり、間に娘を入れて通訳させた。

一番の犠牲者は娘だ。早く仲直りしてやらないと……。

こんな状態で特訓に行っても全然勉強にならないだろうな。それどころかもし息子に何かあったら私は一生後悔するだろう。「大嫌い」のままで行かせてはいけない。

思いはあつてもこつちから折れるきつかけが見つからない。布団でもんもんとしていると十時半に戸がまた開いた。「あの、お母さん、すみませんが何か食べる物はないでしょうか」

「戸棚に『どん兵衛』があつたよ」

「あつどもうありがとうございます」

息子にここまで気を使わせている。

私は大馬鹿野郎だ。

しばらくして一階におり、こそこそ

と『どん兵衛』を食べている息子に電車を渡した。息子は私が火のように怒っているで自分の小遣いで行くつもりだったらしい。

「こつちもごめんな」

謝った。

「お茶詰めとくよ。バナナ持つて行くか？」

「行く。行く」

息子も大馬鹿野郎だ。妹のバナナを買わなければ自分の好きなゼリーを買えたのに……。

「私は本当はあんたが大好きや。気を付けて行きや」

抱き締めて笑って送り出した。

いつの間にか頭痛は直っていた。

母との旅

東京都武蔵村山市 大沢陽子(62歳)

六月十三日、母と鎌倉を歩いた。鎌倉駅から八幡様への道は両側にいろん

なお店が軒を連ねていて楽しかった。八幡様の石段は高かったから、下で押んだ。それから近代美術館の別館へ行った。

塀の外はざわざわと人が溢れているのに、内側は森閑としていた。庭にはさまざまの彫刻があつた。館内ではゴヤの版画展を開催していた。私だけが中に入った。私はかけ足で「気まぐれ」や「戦争の惨禍」を見た。どれも暗かった。ひとりが入つてよかったと思つた。

三十年ほど前に、上野の美術館でゴヤの絵を見たことがある。ホセファ・バイユーやドーニャ・ホアキーナなどの肖像画、バルコニーのマハ、瀬戸物売り、凧揚げ、そして何より裸のマハに感動した。すごい画家だと思った。「戦争の惨禍」もていねいに見た。題名と絵を対比して、そう、ほんとうにそうと思いつつ見た。今日は上の空で見たから、心に響かなかつた。絵はゆつくりと見るものだと思つた。

母はベンチに座り、陽の当たる庭を

見ていた。母はたいがい美術館には入らない。上村松園などの美しい絵のときしか入らない。「外は人通りが多いのに、ここは静かで気持ちがいいね」と言った。庭で写真を撮った。母は写真が好きだ。父が亡くなってから母とは一年に二回くらい、あちこち歩いている。そのたびに私は写真を撮る。母は、私と一緒に写るのが好きで、通る人にシャッターを押して下さいとお願

いする。私は写るのが好きではないので、それは一度くらいのことにしてもらう。母は部屋に旅の写真をいつも飾っている。写真があると、その旅を思い出してまた楽しめる、と言っている。行くところは、箱根や伊豆や日光など近いところ。一泊でなかったのは、奈良・京都の旅と、妹夫婦が案内してくれた十和田湖の旅。

あじさいの季節だから、あじさい寺に行こうと母を誘った。あそこは前に行ったけど花はそう多くはなかった。それより早く旅館に行つて、お茶を飲みたいと母は言う。駅前に戻つて、夕

クシーに五分ほど乗り、ハートピア鎌倉という簡保の旅館に行った。そこは小さくて普通の家のように見えた。客室は全部で十二部屋。お風呂もあまり大きくない。

ゆつくりとお茶を飲んで、それから庭へ出た。あじさいと竹の庭だった。あじさいの花の盛りだった。

よくこんなにきれいに咲いている



ね。いいときに来たね。と母は感動して眺めていた。ここでも母の写真を撮った。十枚くらい。私のも撮つてくれると言うので、二、三枚撮つても良かった。庭には母と私しかいなかった。

夕食前にお風呂に行った。その帰りにもロビーのガラス戸越しに、つくづくと庭を見て、「ここから見る眺めもきれいだから、あんたも見なおいで」と新聞を読んでいた私に言う。母、きれいなものが好きだ。

料理は思いがけないほどおいしかった。三つ葉と卵の清汁は熱く、三つ葉の香りが高かった。小さな鉄鍋で焼くかたまりの牛肉は熱くて、噛むとおいしさが口に広がった。「おいしくてきれいで、こんなに心のこもった料理はめつたにない」と母は喜んだ。母はおいしいものを食べるのが好きだ。お風呂に入るのも好きだ。一泊の時は、着いた日に二回、帰る日の朝もう一回入る。母の旅の目的はおいしいものとお風呂とそこへいくまでの景色。多くを望まない。

母は先月の末に肺がんと言われた。七月の半ばに入院する。入院して心臓などあちこち検査して、手術できるといふ結論がでたら手術を受ける。

母は八十三歳。七十歳以上は手術はしないほうがいいと聞いている。肺がんは早期に発見されるのは、10パーセントほどしかないとも。

私は、手術はしたくないと思う。そのほうが母のこれからの人生は元気な時間が長いと思う。それで先生の話も聞く時に私も付いて行つた。元気なので、このまま過ごしたいと言つたために。母も、痛い思いはしたくないと思つている。でも、先生は手術をしたほうがいいと言ふ。体力のあるうちに、と。がんセンターのその先生は、外科が専門だ。手術しないで、元気な間このまま過ごして、苦しくなつてから苦しくないようにしていただきたいと言つたために付いてきたのに、その旨少ししか言えなかつた。「いやー、体力があるんだから手術したほうがいいですよ」と先生。先生がそうおっしゃるんなら、

と母は言う。かくて七月の半ば入院と決まつた。

母は横浜で一人住まい。入院中は私に貯金通帳を預けたいと言ふ。母は長女の私を頼りにしている。

七十歳を過ぎたら、何にもしないほうがいいって聞いているけど、と私が言つても、痛い思いはしたくないけど、先生が手術したほうがいいとおっしゃるからには、そうしなければならぬと母は思つている。病氣のことを一番よく知つているのは先生だから、一番ふさわしい治療を選んでくださるはずだと。

近藤誠の「患者よ、がんと闘うな」とか「ぼくがうけたいがん治療」という本の要旨を十数枚ずつコピーして持つてきたけど、覚悟を決めている母の心を乱したくなくて渡せない。

母は本当に若く見える。私より背中がシャンと伸びている。今も踊りを習つているせいかもしれない。踊りだけでなく、母は童謡を歌う会にも、かるた(百人一首)をとる会にも参加して

いる。桜のころ何度か行つた伊豆高原のホテルでは、私と何時間も卓球に興じてあきなかつた。

手術に耐えられる体力があるから、すすめてもらえるんだと母は思つている。それまでを、毎日楽しく過ごそうとしていく。「またどこかに行こう、もう一度ここでもいいよ」と母は言う。心のこもつた夕食がおいしかったし、母の家からとても近い。一時間ほどで行ける。運賃も、駅前からのタクシー代を除けば、大船から鎌倉までの電車賃、百五十円しかかからない。

いろんな資料を母に渡して、がんについてよくよく考えてもらいたいと思ふけど、先生を信頼している母の気持ちを乱したくない。手術すれば、また何年か元気に暮らせるんだと思つている母の側にいて、そうであればいいと私も夢を見る。

だけど寝ている母の顔は小さかつた。起きている時の生き生きとした表情はなく、小さくしぼんで見えた。手術をしてもしなくても、苦しくな

る時はいつか来る。手術をすれば足腰が弱くなる。頭も明晰でなくなるかも知れない。今の元氣な期間を、できるだけ長くとは願う。

やっぱり、近藤誠の本の要旨を見てもらおう。私は、持って行ったコピーを旅館を出る前に母に渡した。苦しみの少ない人生をおくってほしいから。でも心が痛む。せつかく覚悟を決めて、手術したほうがいいんだと思っている母の氣持ちを乱すことになる。

夕方電話をしたら、こわいね、読まないほうがよかった。まだ一枚くらいしか読んでいないけど、と母は言った。「ごめんね。だけど元氣なまま何年も生きている人がいる。手術をしても、それから何年も元氣でいる人もいる。心配しないでね。どっちにしてもちゃんと面倒みるから。心配しないで。今日はもう読まないで」と話した。

やっぱり、知らないほうが心が静かなのだ。私は悪いことをしてしまったかも知れない。近藤誠の考えを理解したとしても、母は、先生のすすめを断

れる人ではない。

少したって、また電話した。「写真よく撮れていた。明日の朝早く出すからね。あさって着くから」と。「そう、よく撮れていた。やっぱり。ちゃんとした服を着て化粧して撮るといいんだよ」なんて言う。母は常々、私に化粧したほうがいいよと言っている。化粧もせず、ズボンをはき、目深に帽子などをかぶっている私より、母のほうがずっときれいに撮れている。これをまた、いくつもある額に入れて、母は楽しむのだ。心が沈んでも、写真を見て、次の旅のことを考えて元氣でいてくれると思う。「今月の末にまたどこかに行こう。今度は日本平のほう」と写真を送る時、一言書き添えた。

あとで駅の近くに錦木清方美術館のあることが分かった。この美術館や人形美術館、骨董品、宝飾品、草木染めなど、きれいなものを一緒にゆつくりと見ればよかった。今度出かける時は、前もって案内書を読んで、母の好みそなうなところを見つけておこう。これか

らはいつもそうしよう。ひとつでも多くきれいなところを見るために。あと何回、母と出かけることができるだろう。

母は入院の準備をすすめている。先生を信頼している。母がきめているんだから、その思いを大事にして、その結果についてはひきうけていこうと思う。

もしも母が手術をしたくないと言ったら、私が先生に話し、自宅療養に耐えられなくなったら、自宅に一番近いホスピスを探す。

ありがとう

横浜市旭区 隅田美幸（42歳）

夕飯の後片付けをすませ、やれやれと腰かける。

「今日は、母の日だっていうのに……」

ため息をつく。中一の歩は、野球の練習で一日不在。小五の友朗はといえ



ば、サッカー仲間と遊びに午前も午後も出かけてしまった。夕方に、夫と小二の娘と連れ立って買い物に出かけた時、

「母の日だから、花でも買う？」

と言う夫に、私は首をふった。夫に買ってもらったって仕方ない。

「じゃあ、一日お休み券でも子供たちにもらったら？」

ふんふんと聞き流しながら、

「そりゃあいいアイデアだけど、私から催促するわけにいかないじゃないかい」

心の中でぶつぶつ言う。

去年は……と思い出してみる。四年

生の友朗が学校で書いたカードをくれた。

「いつも働いてくれてありがとう。ぼくは働いているお母さんしか見たことがありません。たまには休んでください。育ててくれてありがとう」

たった一枚の紙切れだったが、じーんときた。高学年、ましてや中学生ともなれば、学校でカードや手紙を書くこともないのだろう。二年生の娘くらい何かくれてもよさそうだが。普段しよっちゅうお手紙をくれるのに、今日に限ってないなんて。

「おかあさん」

子供部屋から友朗の声。

「なあに？」

という私の声に、一瞬ためらった後、

「ありがとう」

大きな声が聞こえてきた。

「今日は母の日だ」と朝から私が何度も口にしていたのを気にしてくれたのだ。

フフフフツ。

歩が横から言う。

「野球の監督がね、今日ちゃんとお母さんにお礼を言いなさいって。いつもユニフォームを洗濯してくれたら、お弁当を作ってくれるからだって」

あーそう、それだけ？ それで肝心なお礼の言葉はないの？ 中一ともなると、面と向かって恥ずかしいのかな。気持ちにはわかるから、ま、いいか。

近ごろの歩ときたら、中学生になったというのにあまり勉強しないで注意したが、聞いているのか聞いていないのか知らんぷり。しつこく言う「だから今やってるってば」と怒る。なんで私が怒られなきゃならないんだ。今まではこんなことなかったのに。そのうち「うるせえなあ、くそばあ」なんて言ってみろ。はりたおしてやる。気負ってみても、なんとも心細い。だから「監督がね」の言葉だけで、私は充分嬉しいのだ。

ニヤニヤ。

さあ、日記をつけて本でも読むか。和室でちゃぶ台に向かう。歯を磨き終わった歩が、背を向けている私にいつ

ものように言う。

「おやすみ」

「はいはい」

しばらく間があいて、

「お母さん、ありがとう」

私はどきっとする。何か言わなきゃと思うが気恥ずかしい。背を向けたままあわてて、

「はいはい……」

今日は最高の母の日だ。ありがとう。

私は心の中でささやいた。

ひとつ屋根の下で眠る

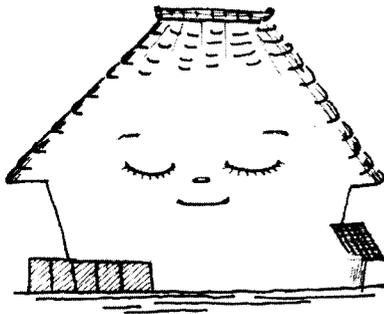
奈良県奈良市 田中慶子

東京で暮らす次女が帰省した。日頃はいない家族が一人増えるとしんどいものだと、我ながら自分の薄情さに呆れながら、夜床に就く。

体は疲れているのにこの心の安らかさは何だろうと、私はふとんの中で考えた。そうだ、今夜は次女が帰って来

て、家族四人全員揃って同じ家で眠っているからだど気がついた。そして同じ思いは以前にも覚えがあった。母を我が家に泊めた時だった。

八年前、脳梗塞で倒れ、痴呆になった実母を我が家へ引き取った。在宅介護を経て後、私は悩んだ末に母を特養ホームに入所させた。理屈はどうあれ、私には母に申し訳ないという気持ちがあった。そして週の半分は母を我が家に外泊させることを自分に課した。



● 家族のスケッチ

しかし母をホームに迎えに行く時の私は嬉しいだけの気持ちではない。むしろそれから数日の母の世話にうんざりする気持ちと、そうは言っても母を私の手元に置く安堵感とが相半ばしていた。送って行く時も同様で、母が私の家族と離れて過ごす不憫さに辛くなるのと、母から解放される嬉しさとが背中合わせだった。それでも母を連れて帰った夜はベッドに入ると、同じ家の中で母が眠っていると思うと不思議な安らぎを覚えた。その母も逝って四年半になる。

これから先、私は同じ屋根の下で誰と眠ることになるのだろう。いずれ娘達が出、次いで夫との永久の別れがあり、私はひとりになるかもしれない。遂にはホームで大勢の人達と一緒に眠ることになるような気もする。

先のことはともかく、とりあえずは家族揃ってひとつ屋根の下で眠るしあわせをかみしめながら、この夜は床に就いた。

(え・橋本美智子)

冬の旅

千葉県松戸市 矢嶋美代

今年は大陽活動の十一年周期でオーロラの当たり年という。神秘的な現象を是非ともこの目で見てみたいと願う私、そしてこれまた天文好きの夫とアラスカオーロラツアーに参加した。オーロラは、はるか上空に出現するため雲があると見えない、つまりオーロラの出現と天候の条件が一致しないと見ることはできない。わずか一週間の滞在でそのうちオーロラ観測は四日しかチャンスがなく、はるばるアラスカまで賭けをしに行くようなものだ。

四年前に夏のアラスカを訪ねたが、とてつもなく大きな自然と、一步入ると花に覆われた町並みが旅人を優しく迎えてくれたことを覚えていいる。今度は、たとえオーロラを見られなくてもいい、冬のアラスカを満喫してこよう。こんな気持ちで旅立った。

アラスカは遠い北国というイメージがあるが実際はハワイより近い。だが日本からの直行便はなくアメリカ本土へ飛びそこから国内線を使ってアラスカへ行くのである。内陸のフェアバン

クスまで
正味十三
時間かか
る。成田
空港には
一週間で
共にする
ツアーの
友がなん
と三十四
名集まっ
た。オー
ロラブー
ムでこの
盛況ぶり

だ。私たちがのように中年の夫婦連れが大半を占めていた。

鮮やかなオーロラを見るには町の明かりの届かない暗い場所へ行く必要がある。フェアバンクスからさらに北東へ約百キロ、バスに揺られた。どんどん人里を離れ雪の中に吸い込まれるように走り、たどり着いた雪道の終点にチエナ温泉リゾートがある。ここまで来



ユーコン川のほとり
後ろは凍りついたユーコン川

アラスカ

るとさすがに人工の明かりはなく寒く
て暗い。天然の沸き湯のそばにいくつ
ものロッジがある。暖房の効いた部屋
で待機し、オーロラが出現したら外へ

出て見物

ができる

というも

のだ。昼

間は温泉

で温まる

ことがで

きるし、

また、犬

ゾリや遊

覧飛行な

ど多くの

アクティ

ビティを

用意して

いる。チ

エナ温泉

は大自然

の中の点

のような

リゾートである。

さて一日目の夜、恨めしい厚い雲を

睨みながらロッジを出たり入ったりす

ること五時間。オーロラハンティング

は、思い入れの強さと忍耐力がモノを

言う。諦めてさっさと寝てしまったあ

と、めくるめく満天のオーロラショー

が繰り上げられるということはよくあ

るそうで、「翌朝悔しがっても後の祭

りですよ」と添乗員のお言葉。だが今

夜は星ひとつ出でてこない。明け方四時

や五時に出ることもあるそうだが、三

時にとうとうダウンとなった。振り返

ると出発の朝から三十時間も寝ていな

いことになる。頭の芯が痛い、ベッド

にもぐり込むとそのまま深い眠りに落

ちた。二人が目覚めたのは朝の十時、

といつてもあたりはまだ薄暗い、仲間

にオーロラの出現を恐る恐る聞いてみ

ると、ゆうべは一晚中出なかつたとい

うことで、ほっと胸をなでおろした。

午前十一時になるとようやく太陽が

姿を現した。雲ひとつない快晴だ。気

温はマイナス二十四度、東京育ちの私

にとつて憧れのダイヤモンドダストが出現した。青い空にキラキラと乱舞している、思わずビデオカメラを回した。あちこちを二時間も歩き回っただろうが、ふと気が付くと太陽が昇って来ないではないか、夕日のように低い位置で横に這っている。時々山の陰になりながら寂しげな光を放っている。

二日目の夜がきた。昼間の快晴が続き星がたくさん出ている。北斗七星のなんと大きなこと、北極星が頭の真上にあるのも感慨深い。

「今日はあるかも知れないぞ」期待に胸が膨らむ、行き交うツアーメイトは誰もうれしそうな顔つきになってきた。夜九時になると皆そわそわしだす。今夜は近くの小高い丘にある観測小屋でオーロラを待とうという事になり、雪を踏みしめながら懐中電灯を頼りに一歩一歩丘を登った。なにしろ防寒着についてはスキーウェアごときでは十分でないと旅行会社に諭され、現地で全員がレンタルすることになっていた。キルティングされた分厚いズ

ボンとフード付きの上着は目の覚めるような青、それをセーターやズボンの上に着る、靴は登山靴のようにごつい。サイズはS、M、Lで皆どうにか収まったようだ。こんなに厚着をしたのは初めてのこと、とたんに動作が緩慢になる。それにいったん着てしまうと誰だか分からない。お互いに顔を覗き込んで安心して笑った。何はともあれ現地のはやはり暖かい。だが、一斉に同じものを身に付けて団体行動をしていると米人客の目には奇異に映るらしく、冷ややかに笑っているようだった。大挙してオーロラなどを観にやってくるのは、どうも日本人だけのようだ。見渡しても日本人観光客ばかりが目につく。

丘の上の見晴らしのよいところに五十〜六十人を収容できる小屋があり、オーロラの出やすい北側の壁がガラス張りになっている。中は灯りを消して暖房を効かせている。午前零時を過ぎるとあちこちから集まってきた人たちが小屋は満員になった。ガラス越しに

北の空を見つめること数時間、いつ出てくるのか分からない、一晚中出ないかも知れない、だのに暗い中でいい大人たちが話もせず、大まじめな顔で静まり返って一方向を見ているのだから、考えると滑稽である。

その時だった。中年の男性が叫んだ。「出た！ 出た出た出たぞ！ あそこだ！」ほとんど絶叫に近かった。もちろんそれを笑う人は一人もない。

それは突然生き物のように現れた、光の帯が踊るように横に揺らめいたかと思うとすぐ消えた。ほんの一瞬間のことだった。今度はすぐに白い縦の線が現れ、それが右へゆらゆらと波打ちながら輪を作るような形で途中で止まった。これはやっぱりオーロラだ、皆、先を争って外へ出た。この目でしっかりと見たいから、私もいつの間にか外へ出ていた。夜空にはつきりと揺らめいていた。ネオンサインとは違う、飛行機雲とも違う、これがオーロラだ。アラスカのクリアーな空に崇高な光を放っている。感動の涙が出るかなと思



オーロラの撮影に成功

ったそのときふわっと消えてそれきりになった。三脚を構えていた夫は数回シャッターを切った。出たり消えたりした時間は全部で五、六分だったろうか、午前一時を過ぎたころのあつという間の出来事だった。トイレなど行っていたら見られなかっただろう。よかった、よかった。

「オーロラを見てくるからね」と家族や友達に触れ回って出てきた手前「出なかつたらどうしよう」と不安がよぎっていた。だが、この思いは私だけではなかつたようだ。「これで安心、見たよって言えるわ」と喜びの声が暗闇の中から聞こえてきた。いずこも事情は同じだったようだ。

このオーロラが旅の救いの神となった。そのあと二日間の夜は曇りと雪で全く見えなかつたのだから、つまり一勝三敗の成績に終わった。

聞くとオーロラのとりこになったあの主婦は昨年も同じツアーに参加したが一度も見られずに泣く泣く帰国したとか、いや、三回もアラスカに来てい

るのに一度も見られない人もいるという話も出てきた。「全天を駆け巡るオーロラだった」とは言えないけれどあらためて幸運をかみしめた。

ところで昼間は何をしていたかというと、夜中の活動で疲れ、夜が明けると十時ごろまで寝ているので時間を持て余すことはなかつた。

オブションで犬ゾリに乗ってみようかということになった。マッキンリー山に消えた冒険家植村直巳氏が犬ゾリに乗った写真はよく知られているが、まさかこの私が犬ゾリに乗ろうとは！だから旅は面白い。

現地の人のお話を聞いて驚いた。今どき犬ゾリなんて観光用の見世物でしかないと思っていた私の認識は覆された。この雪の世界での交通手段は飛行機とスノーモービルと犬ゾリの三つに集約されるようだ。とにかくこのあたりは道がほとんどないのだから、一番頼りになるのがなんと犬ゾリだそう。飛行機やスノーモービルなど文明の利器は故障もする。マイナス四十度

もの雪の中をスノーモービルで道に迷ったり故障したりしたら凍え死ぬしかないというのである。犬は百キロ走っても元氣だし、道に迷うこともないぞうだ。犬ゾリで学校に通う小学生や通勤する人にとって、これは確実な交通手段となっているということだ。

観光用のコースだが早速乗ってみることにした。ハスキー犬十二頭がドッグマッシャー（犬ゾリの御者）の指揮によって木製のソリを猛烈なスピードで走らせる。

アウトドアのイベントに参加しようとするとリゾート側から必ず免責の書類にサインを求められる。万が一事故が起きてもその損害、または傷害（死亡も含む）に対してすべてのリスクと責任を引き受けることに任意同意するという誓約書である。いかに米国が訴訟の国であるかが分かる。責任範囲をできるだけ絞り込み自己防衛をしているのだろう。

ロッジから歩いて五分のところは犬ゾリの出発点がある。夫と私の二人を

乗せたソリはマッシャーの「レッツゴー」の声と同時に飛び出した。犬たちは早く走りたくてうずうずしていたようだ。雪の原や林の中をくぐり抜け九キロを猛スピードで走る。マッシャーが右、左と大声で指示を出す。自然の中を走るのだから道が急に曲がっていたり木の間をぶつかりそうになることもある。だがそこは犬だ、おかまいなしにどんどん走る。ヒヤヒヤドキドキしながらソリにしがみついていた私だった。夫は悠然と犬のうしろからビデオを撮っていた。面白いのはドッグマッシャーが大声で指示したあと必ず「ゲツドボーイ」と誉めてあげることだ。嬉しいのかハスキー犬はますますスピードを上げて走るのである。三十分はあつという間に過ぎた。これは侮れない交通手段だと納得した。

しかし、アラスカの日々の暮らし、冬の本当の厳しさを知り得たわけでは



犬ゾリ

ない。一観光客の目で垣間見たに過ぎない。だからこそロマンとして思い出しの箱にしまっておきたい。

ラストフロンティア「アラスカ」。
この地球のくれた贈り物に酔いしれた旅だった。

（写真提供・筆者）

私の意見

あなたの意見

投票します

女性議員

投票しません

女性議員に期待します

岡山県 安田敏子（68歳）

この間、市議会議員のSさんに会いに行きました。Sさんは主婦で、塾の

先生でしたが、昨年の市議選（定数二十九）で、市民の草の根運動をバックに立候補し見事上位当選した女性議員です。

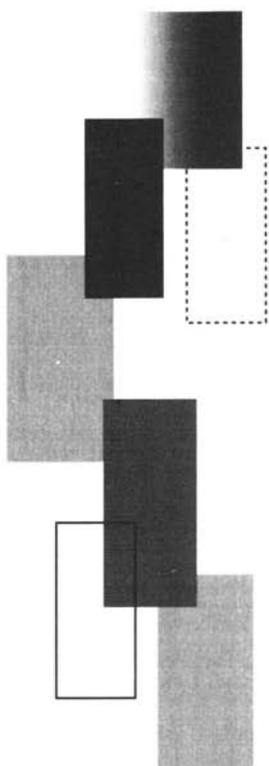
そのSさんに、子どもを自立させた後、残った親世代の老後問題についてどう思うかを問いました。「わいふ」前号の座談会で取り上げている問題でもありました。

「私がとりかかろうとしている仕事とおおいに関係があります。市の東部に広い家の提供者があるので、NPOを使ってグループハウスを作る予定を立てています」
と彼女は答えました。それも必要だけ

れど、取りあえずは老いて一人になったときの事故の際、それをうまく処理してくれる何らかのシステム作りなど、具体的なものを期待しているのですと頼みました。

三年ほど前、男性議員にもこの話をしたことがあります。私も属していた教職員組合出身の議員で、退職後も彼を応援していました。そのときは数人で面会を申し入れたのですが、日程が取れず、忙しそうなので、やむを得ず電話で趣旨を伝えました。彼は一応話を聞いてはくれましたが、以後なんの動きもみられませんでした。男性にはわかりにくい話なのではと感じたの

● 私の意見・あなたの意見



で、彼をあきらめたのです。

Sさんの場合は初対面なのにすぐ会ってくれるというので、友人とふたりで訪れました。支援者たちの署名入りパッチワークが飾られた清潔な事務所で、たつぷり二時間、私たちの話に真剣に耳を傾けてくれました。

Sさんには女性として共感できる手応えがありました（彼女ひとりでは何もしないかもしれない。けれどなんらかの努力はあるだろう。何よりも、ひとつの足がかりができた）。そんな感触を抱きながら、私たちは事務所を辞しました。

話は変わりますが、政府のハンセン病訴訟の控訴断念が伝えられました。私は自民党には同調しない主義ですが、これに関しては小泉首相に激励のメールを送りました。

小泉内閣は相変わらず高い支持率を得ていますが、田中真紀子外相の人氣に支えられていることも確かでしょう。

彼女は今、外務官僚はもとより自民

党内からもパッシングを受けています。私の知る限り彼女の発言は一つも間違っていないと思います。彼女への攻撃のしつこさから、その底には女性へのいじめが流れているようにさえ感じます。国会での党首討論で社民党の土井たか子さんが田中発言をとりあげ、「田中大臣の発言に同意するところは多い。さすがは女性だと思う」と彼女を持ち上げた裏には同性の活躍の後押しさえ感じたものです。今後、中央、地方を問わず女性議員がどんどん進出してくれることを心から期待しています。

女性議員に投票しませんが

横浜市都筑区 ゴル（37歳）

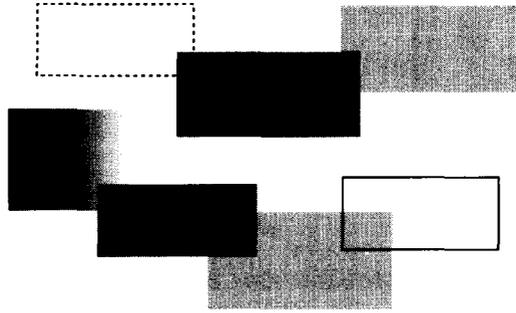
自分の中で、男性候補と女性候補が同列に並んだら、今回は女性で行こう、という選択をすると思います。女性というだけで、一つにまともなる強みが

女性にはあると思うのです。一人では小さな力でも、まともると大きくなるのが、人の力。だったら女性議員の数を増やすだけでも意味はあると思います。

いまやブームというか、ファッションというか、かなりの関心を集めている政治ですが、個人的には政治というものがよく理解できないでいます。女性だから投票する、というのではあまりにも安直です。本来は性別ではなく、何をやろうとしているかにこそ関心をもつべきですよ。けれど、それがちつとも見えてこない演説が多いと思いませんか。そんななかで、女性候補者の言っていることは、具体的に身近なことが多く、素直に耳に入ってくるのです。PTAも、地域の自治会も、九パーセントが女性です。育児とか介護、教育、環境問題などについて、その現場を熟知した人が口にするならば、共感するものがあります。

以前、新聞に年輩の男性からの投書で「政治の世界に女性が増えたら、世

の中がもっと優しくなるのでは」というものがありました。男性側から、こういう意見が出ることはうれしかった



のですが、優しさとは何でしょう。自分に対しては厳しくする、それが他者にとっての優しさと言えるのだと思います。自らを犠牲にしても、最終責任

のとれる人だったら、男性でも女性でも政治にどんどん参加して欲しいです。

女性にはそれまで培ってきた、地の利・ネットワークの利があります。「落ちてなんぼのもの」と言える立場にある女性も多いのでは。立候補のしやすさ、任期満了に伴う引き際の潔さでは女性のほうが一つ上をいつている気がします。かえてそうやって新陳代謝がよくなれば、悪しき癒着の構造も崩れることでしょう。

世の中、男勝りの女性もいれば、男性オバタリアンもいるし、事なかれの官僚的な人は男女を問いません。けれど女性によっては「何、夢みたいなこと言ってるのよ」というロマンを語る男性のそれを、理念と呼ぶならば、女性にはとうてい持ち得ない、そんな大それたことを言ってるける男性も捨てがたいです。政治家の年齢も気になります。もう少し、老若男女のバランスのとれた議員構成になって欲しいものです、しまししょう。

専門の生命保険コンサルタントを派遣いたします。

(東京都内・近郊のみ)

お一人ではチョット心細い、
でも何人かいれば心強いあなた…
お友達・職場の仲間などどなたでも結構です。
3、4人でも何人でも
あなたのお宅に、あなたの職場に、お集まりください。
生命保険の専門家が皆さんの疑問にお応えいたします。



くわしくは「わいふ」あて 電話で資料請求してください
わいふ指定代理店 東京海上火災保険株式会社 東京海上あんしん生命保険㈱

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771

FREE TALK

フリートーク

「痴呆の話」を 頼まれて

川崎市中原区 和田美代子

「和田さん、ヘルパー会の人々に痴呆の話をしてくれない？」

と、介護保険導入の前までホームヘルパーをやっていた私は、『ヘルパー会のつどい』のリーダーに頼まれた。この会は新米のヘルパーや、ヘルパー体験者が集まって、いろいろ起こる（起こってしまった）問題について話し合うつどいである。今一番話題に出るのが痴呆の人への対応だ。なぜ私に？と尋ねたら、

「和田さんは長いことお姑さんの世話をされ、尊い体験をなさったから」とのことだ。

ちなみに、私が姑と共に過ごした昭和の終わりごろは、まだ今のようにはヘルパー制度が充実していなくて、その必要が叫ばれ出した時だった。毎日の

ように起こる思わぬ事件を相談する所もなく、悩んだ結果とにかくノートに記録することで心を落ち着かせていた。これを、投稿誌『わいふ』に送ったところ、私と同じように介護に苦勞している数人の投稿をまとめて一冊の本『私を襲った老人問題』として発行してくれた。この本を、会のリーダーが読んでくれたのだった。

そういえば、今年は六月に姑の十三回忌がやってくる。痴呆症状のひどかった姑をお見送りして早や十二年の年月がたち、現在では、当時学生だった息子たちも社会人となり、夫と二人で静かな日々を送らせてもらっている。

毎日毎日目まぐるしく動き回り、ちよつと目を離すとすぐどこかへ出かけてしまう姑と過ごしていたころは、こんなおだやかな落ち着いた時間が持てるなんて夢にも思わなかった。と言うより、その大変さが永遠に続くような錯覚に陥っていた。

静かな日々は有り難いのだが、最近折にふれ姑と同じようなことを言っ

いたり、やってしまっている自分に、はつとすることがある。

「おばあちゃんは、こんな気持ちだったんだ」

あのころの私は、全力投球で姑のお相手をしていたつもりだったのに、この期に及んでそれが必ずしも姑のためになっていなかったことに、気がついてたりしているのだ。

そんなわけで、姑とのあの生活は今になってみると、これからの自分の老いや、世話される側の気持ちを考え、た介護が見えてきたりして、反面教師としての根をおろしてくれている。いまさら、みんなの前で姑様の痴呆の状況を話すなんて、何だかおこがましい気がする。こういう立場にいる私が、老人介護最前線の人たちに、どうやって話をしたらいいのだ！と、自問自答を繰り返す。

ここで考えついた結論は、自分も含めて高齢社会に向かっている今、正しいと思ってやってきたこれまでのことの、必ずしもよくなかった部分もまじ

えて率直に、そのまましゃべろうということだった。

まず姑のことについて簡単に説明し、今のようには、『脳血管型』『アルツハイマー型』と痴呆にもいろいろ型があるなどの知識も余りなかった私の戸惑い状況を話す。

次に、なぜ私がヘルパーの資格を夢中でとったのか、これは、少々ざんげっぽくて恥ずかしいが、少しでも姑から離れる時間が欲しかったこと。だからと言って姑をほっておいて遊び、ショッピングに出かける心境にはなれない。そこで、大義名分が成り立つヘル



パー研修を受けることにしたのだと正直に言うことにしよう。

三か月間週三回、朝九時から夕方四時の研修と、九日間の老人ホームでの実習というきびしい期間、家で待つ姑がどういうことになっていたか、思い出すと涙が出てくる。

何しろ、朝食をすませたばかりと言うのに、用意しておいた昼食もおやつも、私が出かける時、

「行つてきます。ここにお昼を……」
と言おうとしたらもうばくばくとお召し上がりなのである。

「やっぱり無理だ、研修は」と、くじけそうになった。その時、「トータルとして昼、おやつを食べべているんだ、その日だけ割り切つて続けろ、頑張れ！」

と、夫はげましてくれた。この意見は、親しいの一人息子である夫としては、どんなにか辛い選択だったと思う。こんな思いをして得たヘルパー一級の資格、おかげで最近までホームヘルパーの仕事をやれて、現在活動真最中

の人たちともお話できて本当にしあわせなことである。

介護保険が始まって一年たった今、これからの私としては、あらゆる方向にアンテナを張って、新しい制度を学び、見極め、それらと上手につき合いつながりながら高齢社会へお仲間入りしようと思っている。

そのためにも、この会に参加していることは、活動第一線の人たちの生の声を聞くことができて、たいへん勉強になる。

これくらいでなくちゃ

愛知県豊橋市 藤池弘子

単身赴任の夫が別のアパートに移つて間もなくのこと。ドアを開けると内側のチェーンが音を立てて引つ張られていた。「どなたですか」と、若い女性が出てきた。夫は間違いに気付き、



すみませんと、階段を上ったそうだが。ここまでは普通のお話。しかし、鍵がいけなかった。まもなく夫の部屋に警察官がやってきた。

「怪しい人には見えなかったが、簡単にドアが開いたので驚いたようだ。あなたの磁気カード（キー）で本当に開くかどうか、試してみたい」

ドアは開かなかった。女性も安心し、夫は警察官に名刺を渡し、一件落着となった。

電話の夫は言う。

「ほんと、おかしいんだよね。確かに開いたんだから。でも、ちよつと感覚が違ったみたいな気はするんだ」

「しつかり閉まっていなかったんじゃないの」

「そうかもなあ」

言ってみたものの、夫は納得していない。

「しかし、すぐに警察っていうのもすごいね。だけど、仕方ないか……」

若い女性として、今回の通報は正解かもしれない。同じアパートの住人ど

うしだから、信用できるという保証はない。都会での独り暮らし、そのくらい用心したほうがいい。

私の仕方ないか発言に、夫も同感のようだった。うちの娘も用心深い娘に育って欲しい。気持ちが一致していた。

なんだか嫌な感じ

埼玉県さいたま市 新井純子

先日、ある女性を国会へ送ろうという内容の封書が届いた。送ってきた所は、「〇〇さんを国会へ送ろう全国ネット・東京」とあった。内容を読むと、「東京勝手連」が、楽しく、元気にがんばっているから、一緒に応援をしてくれる人を募集しているというお知らせ、ニュースレター、パンフレットだった。

その少し前に、文京区で区議会議員をしている友人からも、立候補をするこの女性のパンフレットをいただいた

り、「応援してね」というメッセージが入っているものが届いた。

また、大阪に住む友人からも、同一候補者の応援を頼む、という内容のEメールが届いた。

信頼する友人たちが応援しているのならば、とその女性候補者を心に留めていたし、他の人にも、チャンスがあったら話そう、とは思っていた。

ただ、東京勝手連からのものは、やっていることも、内容もいいのだが、いったい勝手連の、誰からこの便りがきたのだろうか、と気になってしょうがない。相手が分からないから、あのセールズ電話と同じような印象を受けて、気持ちが悪い。

住所をみると、文京区本郷だ。文京区の友人の選挙運動に手伝いに行った時に、出会った人たちに、名刺を渡ししているから、そのうちの誰かが、出したのだろうか。あるいは勝手連に住所を知らせたのだろうか。

それとも、埼玉県の政治ネットの学習会に参加したときの名簿からだろう



か。いろんなことが頭に浮かんでくる。
どうでもいいんだけど、いったい誰だ。

以前、ある区議会議員選に出馬する、

わいふ会員の応援のために、田中編集長が会員の名簿を、その方に教えたことがあった。その時は、パンフレットを送りつけられた人から異議申し立てがあったり、座談会も開かれたりして、話題になった。

でも、その時のパンフレットには、わいふ編集長からの紹介、という但し書きがあったのではないか？（もし違っていたら、ごめんなさい）今回のそれには何もない。

市民の運動で政治を変えることは必要だし、今までのようなやり方の選挙は嫌だし、あちこちで、勝手連の活躍は見聞きしているから認めるところはあったのだが、今回のこれは、嫌な感じだ。

なんだか、「自分たちはいいことをやっているんだから、少しルールに反している、えい、誰にでも出しちゃえ、数の論理だ」、と言われているようで、腰が引けた。今までの選挙運動とどこが違うのだろう、と疑問に思った。

今こそ、多くの力を集めなければなら

ない時だというのもよく分かっているが、個人の名前がない、私と繋がっている人が誰か分からない団体からのものは、気持ちが悪い。

これって、屁理屈なのだろうか？へそ曲がりなのだろうか？ 小さいことに目くじらをたてすぎるのだろうか？ もっと大きな気持ちが必要なのだろうか？ そうしなければ、日本は変わらないのだろうか？

日本を変えるために、一人一人が大切にされる社会を目指して、新しい発想の選挙を行おうとしているのではなかったのか？

私の住所を知っている、勝手連の誰かが、友人二人のように、名前を記してくれていたら、ただ、すれ違っただけの人であっても、こんなに気持ちにはならなかった。

また、今回は特に、同一候補者のお願いを三人からされて、比較してしまつたからなのかも知れない。

どんなにすばらしい運動でも、責任の所在がはつきりしないのは、怖い。

親子でテレビ出演

川崎市多摩区 鈴木貴子

NHK教育「すくすくネットワーク」に二歳の息子と一緒に出演することになった。この番組はお母さん向けの育児情報番組で、小児科医、児童心理学者などの専門家がテーマに沿ってわかりやすく講義をする。それに対してゲストの三組の親子がそれぞれ「うちの子の場合はこうなんです」といったようなコメントを述べたりする。

出演することを私と夫の両親には連絡したが、近所のママ友達、昔の友人などには言わなかった。なんとなく恥ずかしいとか照れくさい気持ちがあったからだ。それなら最初から出なければよさそうなものだが、応募は番組のホームページに必要事項を入力して送信するだけで、はがきを書くより簡単だったので気軽に応募してしまったのである。本当に出られるとは思っ

ていなかったというのもあるが、息子のよい記念になればという感じだった。自分だけだったら今さらテレビに出たいとは思わない。

しかし、いざテレビ出演となるとひとつ心配なことがあった。息子は大変な人見知りなのである。0歳のころからいろいろな場所に出かけてみたりと努力はしてきたので、今では以前のよ



うに私の後ろに隠れたままというのはなくなつた。おそらくテレビに出ることがどんなことかわからないので、あがるということはないにしろ、たくさんのカメラやスタッフに囲まれてずっと泣き通しだったら……。私は少々不安だった。しかし考えても仕方がない。

収録の日がやってきた。NHKの受付でスタッフと他の出演者の親子と顔合わせをし、控え室で進行の打ち合わせをする。今回のテーマは「子供の遊びについて」。私たちに台本は渡されない。前もって聞かれる質問を覚えてもらい、答え方を練習する。「鈴木さん、ところで困っていることがおありだそうですね」「はい、公園でお友達とうまく遊べないのです」といった具合に。私の出番は二回あった。「そうですね、そんな感じでしょうか」とOKが出た。息子はというと机の下に隠れて遊んでいた。ごきげんなようどおりあえずはつとした。

ところがリハーサルが始まったとたん、息子が私につきまとはって離れなく

なった。

司会者の前におもちゃなどを置いてあるスペースがあり、他の子はそこで機嫌よく遊びその姿が映されたりする。息子もそこに行きたいのだが一人では行けないため、私の手を引っ張ってしきりに「あっちあっち」とわめいている。

「お母さん移動してもかまわないですよ。行ってお子さん置いて戻ってを繰り返してください」そう指示されたが、カメラは次々に切り替わりどこを撮っているのかよくわからない。司会者に「かぶって」しまったらとも思うし自分の出番も気になる。「カメラワークはこちらで調整しますからご心配なく」。むしろプロなのでうまく構成するのだろうか、なにせこちらは素人なので息子に泣かれても困る、自分の出番には定位置に戻らなければと気がでない。

でも本番では息子も慣れてきていたようで、一人で前に行ったので私も移動しないですんだ。ところが他の子と

おもちゃの取り合いになり泣き出してしまったのである。テーマがテーマだったので司会者に「そうですね、こうやって学んでいるんですよ」ということでフォローしてもらったが、息子はわあわあ泣きわめいていてみなさんに大変申し訳なかった。

後日放送されたのだが終わらないうちに家の電話がじゃんじゃん鳴り始め、「観てたよー」「びっくりした。どうして教えてくれなかったのー」と何人も友達から電話があった。だまっていたも観ている人はいるとは思っていたが予想以上だった。中でも十五年会っていない小学校時代の友人がわざわざ大阪から電話してくれたのには驚いた。「よく私だとわかったね」「それわかるわ。お母さんそっくりなってるやん」これには少々ショックだったが、意外な旧友と話せたのは予想外の喜びだった。

親子でテレビ出演なんてなかなかできない体験だし、息子のいい記念になったと思う親ばかな私なのである。

子どもたちはあなたとの出会いを待っています！

数学教育研究会は、1969年に設立された学習塾です。

私たちは、設立以来「水道方式」と「量」の系統に基づいた算数・数学教育、科学的・体系的な国語・英語教育の研究を重ねてきました。

私たちの教材で子どもたちを教えてみませんか。

新しい先生の学習や教育の場を設けるとともに、相談の窓口も充実させ、安心して子どもたちを教えていただける体制を整えています。

数学教育研究会の教材で、ぜひ、子どもたちを教えて下さい。

子どもたちはあなたとの出会いを待っています。

数学顧問：藤林浩(前数学教育協議会委員長・明治大学名誉教授)

国語顧問：鈴木康之(大東文化大学教授【言語学】)

本部：〒160-0022東京都新宿区新宿4-1-23-7F

http://www.leton.co.jp toiwase@leton.co.jp



0120-420-531

数学教育研究会

森下洋子さん家の 燃えないゴミ

東京都練馬区 井上暁子（41歳）

二八七号の林夏子様の投稿中にある、吉成真由美さんの文中の言葉「家庭の中で、夫、妻、子供全部が一度に輝くことは不可能だ」に大いに感じるところがあり、二八八号に「経済的自立に迷う」という文章を載せていた。その後、二八九号で林様と鴨川典子様から、この文章は吉成さんの著書「カラフルライフ」に出ていると教えていただき、（ありがとうございました）この本も読んでみた。二八八号に書いた時と同様に、主婦という立場を、いささかの自信と誇りを持って見直すことはできたが、どんなに本を読んでも、「これが私の生きる道！」とすばつと割り切って、顔を上げ胸を張って歩いていく、という気持ちにはなれない。やはり、経済的に夫に依存し

ていることで、どこかいじめてしまう。でもフルタイムで働いている友人たちは逆に、家事をおろそかにしていることで、多かれ少なかれ、主婦としての



自分には自信を持っていないようだ。二九〇号の『私もひとこと』のコーナーでも、石井しのお様が「気になる言葉」として悩む気持ちを書いていらした。

さて、話は変わって、森下洋子さん家の燃えないゴミのことだが――

先日、NHKの「にんげんドキュメント」で、五十二歳の現在も第一線のプリマとして踊り続ける森下さんの毎日が紹介された。

森下さんの毎日、それはただ「踊ること」だけだった。一日も休むことなく稽古――、稽古を続けるために休養をとり、合間に若手のレッスンをみる。それはとても苛酷な毎日に見えるのだが、森下さんはインタビュアーに対して、少女のように晴れやかな笑顔で、「つらそうに見える？ でも私にはこれが普通なの。ごく淡々とした毎日なのよ」と答える。たしかにそうなのだろう。私たちが呼吸をするように、森下さんは踊る。私たちが息を止めるのと死んでしまうように、踊ることをや

めたら、森下さんは死んでしまうのでは、そんなふうにさえ思える。森下さんを天才というのなら、それはバレエの技術に対してではなく、こういう人生を選んだことに対してだろう。いや、森下さんは、こういう人生を選んだのではなく、踊るのをやめると死んでしまう運命に生まれてきた『稀人』なのだ。

そんな森下さんは、きつと、絶対、家事など一切しないに違いない。朝食と昼食は、ほんの少ししか食べない。夕食は、バレエ団の食堂でおかずをもらって帰る。

森下さんは、そのおかずを（その日は筑前煮だった）、スーパーパーのお惣菜売り場で使われているペラペラのプラスチックのフードバックに入れていた。しかし、なぜか中にラップまで敷いていた。

もうだめ。番組の後半、「ロミオとジュリエット」のジュリエットを踊る森下さんを観ながら、私は森下さん家の燃えないゴミの袋に入った、たくさ

んのフードバックとラップのことばかり思っていた。

江國香織さんがある文章の中で、「眠るとか窓をあけるとか、お風呂に入るとか窓をあけるとかお茶をのむとか、顔を洗うとか階段に腰かけるとか散歩をするとか、日々のこまごましましたことが、私は非常に好き」と書いている。江國さんはそれを、「あえて探しに行かなくても降ってくる日々の喜び」と言っている。

私もそう。朝ごはんを作って、洗濯して、布団を干して、掃除をして、子ども達が帰ってきて、洗濯を取り込んで、夕ごはんを作って、お風呂に入っで、お日様の匂いのする布団で眠る。この一つ一つに喜びがまつまっている（もちろん、もう嫌!と思う日もあるけど）。この積み重ねこそが人生だと思ふ。

もしも私に、天から（大げさかしら）課せられた大きな仕事があったとしても、それを成し遂げるために、燃えないゴミの袋がフードバックで一杯にな

るような暮らしをしなくてはならないなら、私は仕事を捨てて、日々の暮らしを振る。それが、『天から子どもが輝くために自分は受け皿になる』ということなら、私は、『受け皿役でラッキー!!』である。『受け皿』という言葉に、『身を引く』とか『犠牲になる』という含みを感じる方もいらつしやるのかもしれないが、『日々のこまごましたこと』が大好きな私は、少しもそんなふうには思わない。むしろ、私が『日々のこまごま』ができるよう、夫が経済的支えという受け皿になってくれているのでは、と思え、私のいじけ心もそこから来る。踊ることをやめた森下さんが死んでしまうかもしれないなら、私から『日々のこまごま』を取りあげたら、私は死んでしまうかも、とテレビを観ながら思った。

ジュリエットを踊る森下さんが輝いていたように、今日も私は『日々のこまごま』をこなしながら輝いている。心の中の『いじけ』に迷い、悩みながらだけ――。

なぜこんなに 知らないの？

東京都 野本美希子

退職大学教員である私は、知人の先生に頼まれて、ときどき大学の臨時講師を勤めることがあります。この四、五年その機会がなかったのですが、つい先日、東京近郊にある伝統ある女子大学から補講をたのまれて、肝をつぶして帰ってきました。

学生たちの顔つきや態度に驚いたのではないのです。割合行儀はいいし、ところどころ机につつぶして寝ている子もいるのは気になりません。四十人ばかりのクラスでしたが、うしろのほうでこそそそ私語している学生もいるけれど、邪魔になるほどではありませんから、ま、それもいいとしましょう。びっくりしたのは、こちらから質問したときもどつてきた答です。

私は講義にいくときは、できるだけ

学生たちにいるんな質問を投げかけるようにしています。だつてしゃべるだけではつまらないのですもの。何かを吸収しなければ出かけていく価値がないじゃないですか。

で、この日は何かの話をきっかけに、「マルクスって、知ってますか」と聞いてみました。この人が何をやった人か知っているかしら？ よく知らなくても、名前だけでも聞いたことのあるという人、どうか手を挙げてください。手を挙げた子は三人だけでした。

え、マルクス知らないの？ たくさんの国を巻き込む共産主義の原動力になったあの人、よくもあしくも二十世紀を動かしたあの巨人を知らないの？

一番前にすわっている子に聞いてみました。

「でも中学や高校の教科書にこの人のこと、出ていると思うんだけどさ、どうしてみんなこんなに知らないのかしらねえ」

その子はためらいもなく答えたものです。

「かんけないから」

この大学は最低のランクではありません。そして学生たちは四年生でした。あれから周囲の主婦たちにも聞きまくっていますが、少なくとも私の周囲の若い主婦にも、マルクスの名を知らない人はいませんでした。いったい、いまの学生たちの頭のなかは、どうなっているのでしょうか。

Mさんからの メッセージ

東京都台東区 高梨陽子(58歳)

二〇〇一年二月八日、高校時代の男子クラスメイトのMさんが亡くなられた。五十八歳でお迎えが来るにはまだ早すぎると、悔しさと悲しみでいっぱいになった。

死因は脾臓がんであり、昨年十一月中旬ごろに判明したときには、余命三か月の宣告を受けたという。この病

気は、恐ろしいことに判ったときには、
だいたい手遅れの状態が多いようであ
る。一年前に小学校時代のクラスメイ
トが同じように亡くなられた。

Mさんとは昨年の中旬に、磐梯
山紅葉狩りの一泊二日のミニクラス会
で一緒したのであった。そのときは、
一か月ほど前に胆石の手術をしたと言
って、お腹を出して傷口を披露してい
た。体調はよかったらしく、日本酒を
グイグイと飲んでいたので、傍で見
て心配になつたくらいだった。

Mさんはこれまでのクラス会には、
仕事の都合で欠席が多かったが、こ
からは声がかかれば参加すると、元
気に言っていた。

体調が回復したら、畑作業をしなが
らのんびりと暮らすことにして、余
生を大いに楽しむつもりだと、張りき
っていたのであった。

このミニクラス会の参加メンバー
が、十二月五日にMさんのご実家で、
忘年会を兼ねて蕎麦打ちパーティをす
る約束をしていた。Mさんがお母さま

のためにご実家を新築されたが、完成
を待たずにお亡くなりになられたとの
こと。ときどきMさんが風通しのため
に泊まることがあるという。

ところが、十一月中旬ごろにMさん
から電話があり、「体調を崩して、入
院しているので蕎麦打ちパーティは中

ため、まだ入院中です。年末には退院
できる予定になっています」とおつし
やるのであった。

蕎麦打ちパーティを一緒にすること
になつていたメンバーに声をかけて、
お見舞いに何うことにした。Mさんの
体調が落ち着かれたところを見計らい、



Mie.

止にしてほしい」との連絡であった。
そのときは軽く受け止めていたので、
すぐに退院されるだろうと思ってい
た。

十二月初めごろに、退院されたころ
と思つて、Mさんのご自宅へ電話をし
た。奥さまが「黄痘の症状が出ている

十二月二十二日に出かけることに決ま
った。

そのときのMさんは、ベッドから身
体を起こしてお話しすることができ
た。黄痘の症状はみられたが、声に張
りがあり「蕎麦打ちパーティができな
くなって悪かった」と言つて残念がっ

ていた。「退院されたら快気祝いを兼ねて、蕎麦打ちパーティをしようネ」と約束をして病院を後にした。

年末近くにMさんの奥さまに電話をして容態を伺うと、「お正月には自宅へ帰りたいと本人が希望するので、お医者さまが考慮してくださっている」とのことであった。

二〇〇一年を迎え、一月十三日にMさんの奥さまから電話があり、お正月の三日日は一時帰宅の許可が出て、家族揃って新年を迎えたとのこと。実はMさんが脾臓がんで余命が一月月ぐらゐと、医師から宣告されていることを涙ながらにおっしゃる。

胆石の手術をした時点では、脾臓がんとは判明していなかったそうだが、本人にもがんの告知をしているとのこと。ご本人のMさんはもちろんのこと、ご家族の方々のご心痛を思うと、お慰めの言葉がなかった。

もう一度、お見舞いにお伺いしたい旨を伝えると、「どうぞ、会ってください」との言葉をいただいた。病院が

実家の近くのので、里帰りの折りにお伺いすることにした。

一月二十五日に病院へ伺うと、一月の間にすっかり体力が衰弱した様子だった。ベッドに身体を横たえて、声にも力がなく、時折タンがからんで苦しそうな状態になっていた。会話をするには、Mさんの口元に耳を近づけないと聞き取れないほどであった。

体力は衰退しても、意識はしっかりしている。Mさんとの会話はできた。奥さまとMさんのお姉さまが付き添っていらしたので、ご一緒にお話しをした。

Mさんは「俺たちの身体は、もう無理の利かない年ごろになっているんだから、変だと思ったら早めに医者に診てもらわないとダメだぞ」と、一生懸命に言うのであった。この言葉はMさん自身の無念さと反省の弁であったと思われ、クラスメイトへの最期のメッセージと受け止めた。

奥様のお話では、この一か月間は週単位で症状が悪化の一途をたどって

るとのこと。その日の夕方には、個室に移動することになり、およそ二週間後の二月八日に永眠されたのだった。

ミニクラス会で楽しく過ごしてから、四か月足らずで永遠のお別れをするとは、夢にも思っていなかったの。信じられない気持ちであった。生命の儚さを感じた次第である。

高校時代の三年間は、担任の先生も替わらなかつたが、組替えもなかつたので仲間意識も強く、楽しいクラスだった。学級委員は「総務」と言われていたが、Mさんは成績優秀で人望もあり、「総務」を務められて我がC組のリーダーであった。

Mさんからの「健康には充分に気をつけること、小さな変調も見逃さないように」というメッセージは、必ずクラス会の折りにみんなにしっかりと伝えることを心に誓った。

Mさんのご冥福を祈る日々である。

合掌

(え・佐藤瑠江子)

座談会 私も言いたい

泥棒体験を語る



出席者 川久保郁実 野田めぐみ S・R

司会 和田好子 編集部 田中喜美子

現代泥棒事情

司会 今回は泥棒体験というテーマなんですけれども、最近は犯罪の質も変わってきて物騒ですよ。今日は皆さんの体験を語っていただいて、読者の方々のお役に立てばいいと思っています。まずSさんから。

S うちは母が生きていたころずっと家において、留守になるという状態がなかったのですが、母が亡くなってからは人の気配のない、深閑とした一軒家ということで狙われたのだと思います。家族が皆出かけてまして、私も十時から三時まで出かけて帰ってきましたら、一階も二階もすごいことになっていて……。

司会 ちらかっていったんでしょ。あらゆるものがほうりだしてあるような。

S 本当にすごかったんです。どこにベッドがあるのかもわからないくらいに。

司会 飛行機の墜落現場みたいになるってよく聞く。

S そんなかんじです。ガラスは割られてるし。



野田めぐみさん

司会 ガラスを割ってそこから入ったんですか。

S そうだと思います。すぐに一一〇番を
して警察の方がみえて、足型をとったり、
指紋をとったりして、これは複数の犯行だ
ねと言われました。

司会 一人じゃないんだ。

S うちで調べている最中にも連絡が入っ
て、近くでもう一軒被害があったというこ
とでこちらにもいらしたんです。後でうか
がったら、その泥棒は月曜日から金曜日ま
で毎日泥棒して土曜日に帰って、というよ

うに、泥棒をなに日本にやって来るんだそ
うです。結局愛知県で同じ手口でやって逮
捕されて自供した。

司会 日本にやって来て、つてことは外国
人なの？

S 韓国からやって来たそうです。

司会 このころは飛行機だからね。昔と違
って国際化している。

S 現金はもちろん、装身具、貴金属もち
やんと本物だけ持っていてるんです。本
当によくわかるなと思いました。

田中 時間に追われているでしょうに、よ
くひと目でわかるものね。

司会 それはプロね。まだ韓国にはプロ
がいるんだ。

S そうみたいです。感心しちゃいま
した。

司会 あとが大変だったでしょう。

S どうやって寝ようかしらと思うくら
い大変でした。うち中がちらかかっていて。

司会 それでは、最初は何を盗まれたか
わからないでしょう。

S はい、でもリストで出してください
って言われて。書き出してみると、人間っ

て結構いっぱい装身具とか持っていて驚き
ました。

田中 そうよね。

S 残していった宝石箱から、ここに何が
入っていたとか、子どもたちのお年玉の袋
から中身だけが抜かれていたので、その袋
にいくら入っていたかということまで調べ
ました。

田中 指紋とかついてないの？

S ええ。でも運動靴の跡はありました。
盗んだものを背広とか上着のポケットにジ
ヤラジャラ入れて、知らん顔で出て行っ
ちゃうのでなかなか気づかれないようです。

田中 泥棒の服装なんかしてないわけ
ね。

司会 盗まれたものは返ってきました？

S 何も返らないです。韓国で全部処分し
たようです。

車上狙い

司会 野田さんはどういう体験ですか。

野田 十五年ほど前、スキーに行くので車
に荷物を積んで、ちよっと車を離れたんで



川久保郁実さん

す。車に施錠していなかったのも悪かったです。車に施錠していませんでした。目と鼻の先に止めていて、明け方だったので用心もなかったのですが、重たいもの以外は全部盗まれました。皆で探しても出てこないし、警察に届けても「出てこないでしょう」とあっさり言われてしまいました。保険証、免許証、カードの入ったバッグも車に置いていたので盗まれてしまいました。

司会 その保険証でお金借りられたりしな

かったの？

野田 すぐ手続きしたので大丈夫でした。

田中 そういのが盗まれると後始末が大変ね。Sさん、そういうものは盗られなかったの？

S それはなかった。現金と貴金属だけ。

野田 手帳もそのバッグに入っていたのでそういうのが、いちばん……。

田中 私なんか手帳盗られたら明日から困っちゃう。それと住所録ね、もう商売できなくなっちゃう。コピーとつといたほうがいいわね。これだけの話でいろいろひらめいた。

一同 (笑)

田中 どうせいらぬから盗ったノートなんか捨てるっていうけど、それはなかった？

野田 警察に聞いたら、金目のものだけ盗って、あとはゴミ箱とか川に捨てられているでしょうということでしたけど、結局何も出てこなかったです。ただ、変な人が手帳を見て連絡してきたとか、そういうのがいちばん怖かったですね。

司会 それを見て電話をかけられたり悪用

されたりしたら大変なことよね。

恐怖の体験

司会 それでは最後に川久保さん。

川久保 昨年の三月に、留守中に侵入していた泥棒と出くわしたんです。

司会 何時ごろ？

川久保 九時半から十一時半くらいまで外出していて、帰ったときドアの鍵を開けたら中でガタガタツツて物音がしたんです。鍵を持つてる小一の娘が早引けして帰っているのかなと思って、「誰かいるの？」って大きな声で言ったんです。そしたらシーンとして、それから知らない男が玄関にバーンと出てきた。

一同 わー怖い！

川久保 マスクも何もしてなくて、見た瞬間に「ドロボー」って叫んでいました。マンションの三階なんですけど、「ドロボー、ドロボー」って叫びながら走って逃げたらすぐ後ろから走ってくるんです。

田中 あなた玄関のところにおいてよかったですね。入っていたら絞め殺されちゃった

かも。

司会 マンションは怖いよね。逃げ場がないから。

川久保 下の駐車場まで走っていったんですけど、昼間なのに誰もいないんですよ。

「ドロボー！」と言いながら私は座り込んでしまった。そうしたら自転車置き場のおかげから若い男の人が一人、それに金網を乗り越えてもう一人飛び出してきたので、「ドロボーです」って言って。

田中 でもあなたえらいわねえ。気丈ねえ。

川久保 はい、あの時はよく叫べたってあとからほめられました。その若い男性が一人追いかけていってくれて、もう一人は

違うほうに走って行っちゃったんです。あんまり怖くてしばらく座り込んでいたんですけど、誰も帰ってこないですよ。もし

かしたら全部泥棒だったのかなあ、なんて怖くなって。

田中 ありうるわ。

川久保 ひとりでいるのが怖いので、下の階のお友達のところへ「今、泥棒が来て

……」って行っただんですけど、彼女は全然気がついていなかったんですよ。

警察に電話している最中にパトカーが来たんです。追いかけていった方が通報してくれたみたいで。それから警察の方と一緒に部屋を見に行ったら、そんなに荒らされていなかったんですけど、床に貴重品の箱が並べてあるんですよ。泥棒が選んでいたところだったんです。

一同 えー？

川久保 「何か盗まれませんでしたか」って聞かれて調べたら、通帳と印鑑と現金と遊園地の割引券、外貨が持っていていきました。貴金屬も本物だけ選んで持っていました。すぐに通帳の届けを出す手続きをしてくださって言われて、通帳からの被害はなかったです。

司会 引き出せなかったのね。

川久保 指紋も採って、モニタージュ写真も作りましようってことになって。何人も写真を出してきて「こんな感じですか」って選はせるんですよ。

田中 へー、原型があるんだ。どんな顔の人だった？

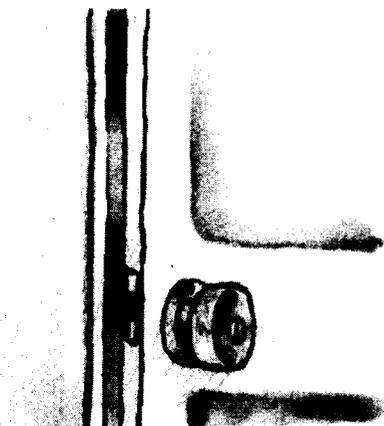
川久保 目が細くて、がっちりした顔でまっ黄色の髪でした。服は紺色のジャージ

のような服で、手にコンビニエンスストアの袋を持っていたんです。

田中 コンビニの袋に入れるのかしら。

川久保 たくさんのものが入っているようには見えない。多分、服の内ポケットに入れていたんじゃないかしら。「外人ですか」ってきかれて、「日本人だと思います」って言ったんですけど、考えてみると外人だったような気がします。

あとから聞くと、近所でそういうのが数件あって、かなりのプロの仕業だったようです。閉めてあった鍵が開けてあって、今話題のピッキングらしいんです。



田中 あなたすぐく連がよかつたわよ。最初にガタツつて音がしたから。シーンとしてたら入って行って、部屋の中で鉢合わせしたらそこで……。

川久保 でも、あつちも「アッ！」と息をのんで驚いていて。

司会 むこうも驚いたんだ。

川久保 二十歳ぐらいの若い男の子だった。

貴重品の箱は置きっぱなしだったんですけど、お金とか抜いたあとの封筒はきちんと戻してあって、寝手もちゃんと戸が閉まっていた。多分こつそりやろうとしていたんだと思います。私なんかポーっとしているので二日くらい気がつかないで、箱を開けてやつと気がつくんじゃないかな。

司会 そうしたらもう預金はおろさされているわね。ハンコ取られているし。

うるうるな手口

田中 Sさんとこはすごい勢いで荒らさされていたわけですよ。

S ええ、もうめっちゃくちゃで、どこに何

があるのかわからない、床が見えないような状態でした。

司会 プロの場合は荒らすっていうわね。あらゆるところを見るんだって。

S そうですね、全部ですね。びっくりりしました。

司会 じゃあ川久保さんの泥棒はまだ多少、素人なのかしら。

川久保 でもあとになって考えると、ハンコとか通帳はいろんな所に置いてあるのに、全部持っていかれてました。それに、鍋の場所まで変わっていたんですよ。あまり使わない大きい鍋を久しぶりに使おうとして気がついたんですけど。

田中 鍋の下まで見るんだ。

司会 冷蔵庫は必ず見るといいうわね。割と冷蔵庫に隠す人が多いから。

川久保 うちは書類立ての中に入っていた手帳も盗られた。ふつうの書類の中に混じっていたものなの。だから結構長い時間家について物色したんじゃないかなと思うんです。九時半から十一時半くらいですけど。

司会 真つ昼間ね。

川久保 犯人は結局二人組だったことがわかって、私が下で会った一人は泥棒で、見張り役だったらしいです。

田中 そんなところに若い男が昼間いるはずないもんね。

川久保 犯人を追いかけてくれたのは、ご用聞きに来ていた若いおにいちゃんでした。

司会 結局とられちゃったものは現金と貴重品でしょ、その貴重品は出てきた？

川久保 いいえ、出ないです。

司会 普通質屋にでも入れればすぐに見つかるのにね。だからやっぱ海外に持ち出しちゃったのかもしれない。

田中 検挙率が今、すごく下がってるでしょ。やっぱ海外に逃げられちゃったたらどうにもならないよな。

司会 逃げるのは簡単だもんね。

川久保 とにかく犯人に出くわしたのが怖くて。道を歩いていてふつと誰かが出てくると息をのんでしまうんです。私の顔も見られているので、もしかして戻ってきたらどうしようとか考えたり。

司会 まだ恐怖はありますか？

川久保 家に帰ってドアを開けるときの一番怖いんです。誰かいたら、つて考えと。S そうなんです。しばらくは家に入る瞬間が怖くて、その怖さで出かけられなくなっちゃいましたね。警察に聞きましたら、犬を飼うのがいちばんいいとのことだったので、東急ハンズに行って「犬に注意」とか「猛犬注意」というステッカーをいっば

い買ってきて貼ったんです。犬を飼っているお友達に頼んで、犬の鳴き声をテープにとつてもらったんですけれど、なかなか難しいんです。

司会 時々、ワンワンっていうのを外に聞かせようとなきったわけね。

S 年がら年中鳴いているのも変だし、「猛犬注意」は貼つてあるものの、こちら



はやめてしまいました。

川久保 人が入るとワンワンと鳴る装置も効果があるそうですよ。

うちのお隣さんがその日の午前中にドアを開けたら廊下に男が二人立っていて、人相を聞いたらうちに入った泥棒と同じなんです。目が合ったら「ごめんなさい」つて下に行っちゃったんです。最初は隣の家に入ろうと思つていたみたいで。

田中 近所づきあいもよくしておかないとだね。

それにしても、入られるつてことがいやだね。

川久保 気持ちが悪いです。

S 警察がやって来て写真を撮るときも恥ずかしくていやでした。

田中 警察は二一〇番して呼ぶわけ？

S ええ、そうしました。

田中 どれくらいの時間で来ました？

S わりとすぐ来ましたが、五分くらいだと思えます。待つているあいだが怖かったです。二階にまだいるんじゃないかと思つて。

田中 警察の対応つていうのはこっちの納

得のいくような感じだった？

S そうですねえ。ただ、最終的に犯人は愛知県で捕まったので愛知県警が事情聴取に家に来たんですけど、そのときには地元
の警察は来なかったです。

計画的、組織的犯罪？

S 「泥棒のルートマップ」っていうのができてるんだそうです。日本に来たら、東京だったらこの家々をまわるとこれだけ稼げるっていうような。警察の人に「そういうルートマップに載ってしまいましたよ、おたくは」って言われても……。

田中 本当？ こわいなあ。

うちもやたら最近無言電話がかかるようになってね。

S あっ、それ前兆みたいですね。

田中 そうでしょう。嫌がらせだったらむしろは押し黙っていて、嫌な感じが伝わってきてガチャって切れるんだけど、それは出たとたんに間髪を入れずに切れるの。

司会 いなかったら泥棒に入ろうとおもっているのね。

田中 それがひと月くらい継続してあったんだけど、ある時からパタッとなくなつた。もしかすると……って思ったわけね。私が泥棒だったらリストを作って、何曜日何時にこの人は出かけるとかデータをとつてからやるでしょうね。川久保さんの場合はそうじゃなかったの？

川久保 普段決まってる出かける曜日があつたんですけど、全関係ない日でした。

司会 じゃあ無言電話がかかったりとかなかったの？

川久保 言われてみればあつたかなというくらいで、特別にということはないです。

司会 野田さんはその後、どんな用心をされていきますか。

野田 ちょっと車を離れるときでも必ず鍵はかけますし、何度も振り返って確認するようにしています。貴重品も身につけるようにしていますし、車の中の見えるところには小銭だろうと置かないようにしています。

司会 覗いてみて何かあると思われると窓をやぶられたりするものね。損害よね。

S お友達の話なんですけど、自宅から少し離れた場所に車庫があつて、シャッターの下りの車庫だったので車にキーをつけたままにしていたら車ごとられちゃつたんです。車に乗ろうと思つたら車がなくなつて。

川久保 車は完全に組織ができていて売りやすいそうです。

田中 それも外国よね。

トラウマが残る

田中 皆さんのお話を伺っていて思ったけど、泥棒っていうのもトラウマになりますね、精神的な。鍵を開けるときの怖さとか、どれくらい経ってからぬけた？

S やっぱひと月は怖かったですね、入る瞬間が。

田中 ひと月ですめばいいわよ。あなたどれくらいだった？

川久保 うち引越したんですよ。ちょっと探していたこともあって、とにかくそこを離れたいというのですがすぐに見つけて、一か月くらいで引越しました。

警察の方に「同じところを狙うことってあるんですか」ってきいたら「なくはないですね」って言われて。あと、「顔を見られて何もなくてよかったですね」って言われたのが怖くて、その後巡回をよくしてくださるよう何度もお願いして交番のお巡りさんと顔見知りになったような感じがします。

田中 新しい家へいったら怖さがぬけた？

川久保 精神的に鬱になるくらい恐怖感はずよかったですね。不安感は六か月くらい続きました。

田中 かもね。大変よね。

気持ちの変化

川久保 恐怖とか怒りとかいろいろな感情があるんですけど、最後は前向きに、無事でよかったとか、ものは持たないほうがいいとか考えるようになりました。主人も言っていたんですけど、人にとられるようなものは持つちゃいけないんだなとよくわかりました。

田中 なるほど。

川久保 貴金属にまったく関心がなくなっただですよ。

S それはあります。私もそうです。盗られてしまっても、別になくても暮らしているんです。

川久保 そうなんですよ。

S 全然必要のないものだったって思ったら、逆に精神的にすごく身軽になつて。

川久保 人間、自分の持つているものを案外知らなかったり、本当に必要じゃないものに執着していたり、地震のときもみなさんそうおっしゃっていましたけど、ものに執着しないほうがいいんだっていう気になりました。

S それはあります。すごくいい経験になりましたね、そういう意味では。

田中 それはいい意味のリアクションかもね。「もの離れ」というか。

川久保 盗んだのが外国人だつて聞いて「なんで人が働いて貯めた正当なお金をとっていくんだ」って最初は怒っていたんですけど、彼らにとってはどんなに危険でも一回盗めば一年間くらい暮らしていけるんだって聞いて。

★わいふバックナンバー

(特集テーマ)

264号 ふるさとの伝統行事

265号 私の初体験

269号 再就職で得た仕事・得られなかった仕事

272号 カウンセリング体験

273号 子どもとテレビ

274号 引越騒動

275号 料理と私

277号 不妊治療・私の場合

278号 「おけいごと」との格闘

279号 あなたの夫は何番目の男？

281号 思い出の地・再訪

283号 私の読書歴

285号 美容と私

286号 私の健康法

288号 車と私

289号 私の職業

シリーズ老後の暮らし

お年寄りが安全に暮らすために

変わる主婦・変わらない主婦

お申し込みは ☎ 〇三—三三六〇—四七七一

司会 海外に持って逃げればね。

川久保 彼らも必死で働いているんだなあと。

田中 わーすごい。誰かがあなたにそういうふうと言ったの？

川久保 ええ、主人が。もちろん頭にはきていましたけどね。

入られないために

司会 具体的にはどういうふうにするのが一番いいのかなあ。通帳とハンコは別々にしまつとか。銀行の金庫に預けるとしても、預けると不便なものがあるんじゃない？

S 防衛してブロックすればするほど生活は不便になりますよね。家になるべく現金を置かずにちよこちよこ引き出すとするとそれでもう不便だし、出かける時もまめに警備をかけてからだと、それだけで五分十分違つてしまいますからものすごく不便なんですよ。

司会 やっぱり不便なのはしょうがないのかしらね。入ろうと思つたらたいいのところは入れちゃうっていうから、いかに被

害を少なくするかつてことでしょ。

S 家の中にもセンサーをつけて、そこを通過したらピーツと鳴るようなものをつけたんですけど、猫が飛び上がつてセンサー



に引つかかつて「どうしました！」つて連絡があつて、「猫です」つて。

一同 (笑)

司会 犬は飼いたいけどなかなか飼えないものね、大変だし。

田中 マンションで犬を飼つていいところ

つてあんまりないでしょ。

野田 うちのマンションは大丈夫です。

田中 だんだんそういうふうには飼つてもいいところが増えてるんでしょうね。

川久保 ものに執着しないのが一番ですね。ただうちの場合、娘が留守番してなくてよかつたなと思ひました。私じゃなくて娘がドアを開けて入つていたらと考えたらいちばん怖いです。

司会 それは怖いわ。相手が子どもと見たらね、何するかわからないですよ。

川久保 子どもひとりの留守番は危ないなと思ひました。

司会 さつきお母様がずっと家にいらしたつておっしゃつたけど、昔は「留守番」といつて家は空けるものじゃなくて必ずだれかがいたんですよ。

田中 そうそう。

S やっぱり人の気配つていうのはすごくいいみたいですね。

司会 そうでしょう。

田中 今日はいろいろ勉強しました。とても充実した話でした。

(え・渡辺美帆)

国会議員になつてしまつた②

東京都千代田区

黒岩ちづこ

前回の文を今読んでみると、随分牧歌的な感じがする。今の状況とは大違い。何回か厚生労働委員会で質問を続けてくる中で、役人達の手の内が少しわかつてきた。

ウソは言わないけどホントのことも言わない。微妙にずらして回答をし、すり抜ける。

役人の体質を見抜き、単なるメンツで言っていることにどこまで食らいついていけるのか。それが議員に課せられてある力量ということだろう。力を

つけた!

ハンセン病裁判の控訴をめぐって、私も動きまわつた。何十年間の患者・元患者の皆さんの勇氣ある行動は、メイヨをかけて行われたのに対して、役人達は、ちっぽけな彼らのメンツで対峙しただけだった。

このことは、在外被爆者の援護法適用を認めた判決に対しても、また、無年金障害者の問題も、全く同じ構図である。

役人達がメンツをかなぐり捨てて、

大変な思いをしている当事者に寄り添

える日は、いつくるのだろうか。本当は役人としても、国民一人一人の要求に応えていくのが本来の役割なのであるから、当事者に寄り添うことこそやりがいのある仕事になるにちがいないと思うのだが。

国のエネルギー政策も一体いつまで原発を「国策」といい続けるのか。五月に行われた刈羽村の住民投票に対して「プルサーマルに反対」を呼びかけて超党派の女性議員がかわるがわる刈

羽村にいった。大淵絹子、福島瑞穂とその日は三人だった。十数か所で街頭演説をしたが、聞いてくれる人がいる場所はほんの僅かだった。原発立地のために潤っている部落では人が出ていない。

当日はテレビ局等マスコミがかなりきているのだが、どうも素人っぽい人がビデオを撮っている。聞いてみたら「出てこれない人に見せるために撮っている」と言う。従って人が出ていなくても家の中で耳をそばだてている人に届くように語りかけていた。

しかし、それにしても他の二人と私の演説は余りに違う。何といつても場数を踏んでいない新米である。議員になる前、三六五日一日も欠かさず辻立ちをしてきた大淵絹子さんの話術には、舌を巻いた。その場に合わせてフワーと話し出すのだが、肝心なところではメリハリをつけて、きちんと結論のところへ聴衆を引っ張りこんでいく。私もあんな話し方ができるようになりたいたと痛切に思った。

この住民投票が結果的に勝利したのには、女たちの票がかなり多かったからだという。命をつむぐことにより近い女性のほうが危険に対して敏感だったというのは当然という気がする。

とはいえ、同じ女性である田中真紀子氏は自分のサイン入りのチラシを配り「安全性は大丈夫だから国のエネルギー対策に協力を」と刈羽村民に呼びかけたのだという。

彼女は頑迷な外務官僚と戦っているということでも多数の支持を得ているが、新潟における田中真紀子の存在は単なる利権屋にすぎない。父親が持っていた様々の利権を彼女は守っている。一番大きなことは、民法改正に彼女は反対であるということ。改正には選択的夫婦別姓と非嫡出子差別撤廃の二点があるのだが、この後者には絶対反対の彼女である。これも彼女の権利に基づくと思われる。「女」ということで一括りにできない彼女の事情がある。

国会には女性議員全員が加入してい

る女性議員懇談会（女議懇）がある。これを作るのに貢献したのは市川房枝さんだとのこと。男女共同参画社会基本法やDV（ドメスティックバイオレンス）防止法などの成立に大きな力を發揮してきた。また先ごろ国会にやっと産休制度が導入されたのも、女議懇の力が大きい。これを受けて「地方議会にも産休を」ということで、先日「産休ネット」が立ち上がった。ほとんどの地方議会には制度がなく、大きなお腹をした議員さん「この子が生まれるのは「事故扱い」になるんです」と訴えていた。地方議会では超党派の女性の行動はとてむずかしいとのことだった。

何党に属するかということが意味のあることもあるが、逆に足かせになることもある。私は無所属でいることによって、テーマ毎に議員連盟に加入して志を同じくする人達と活動を共にする自由を手に入れている。

ここまで書いてきたところで、ちょっとしたハプニングがあった。

厚生労働委員会で私のした質問に対して、大臣が「何とかします。約束します」と答えたのだ。これにはまわりがびっくりとまげたらしく、私の隣の席の西川きよしさんは「すごいね。今まで何人も人がいろいろ言ってきたのにニツチもサツチもいかなかったんですよ」と言う。

国民年金が任意加入制だったころの学生さん達が、事故などで障害を負っても障害年金がもらえないため、二十五人の原告で国を被告として七月から裁判に持ち込むことになっている。

この件について「九四年の国会において、衆参両院の付帯決議において『速やかに検討する』とあるのに、七年間もこのままであるとは、正に立法不作為ではないか」と追及した時のことである。

今まで遠くから吠えていたのが、今では至近距離で吠えられる。大臣に直接モノがイえる。このチャンスをあつと六年続けたいと念じている。



ケアハウス
「すずかけ」を訪問



あ
なたへ

ス
マッシュユ

黒岩ちづ子さん
がんばって！

東京都世田谷区 山田恵子

新潟、七人の子供、それに保母。
このキーワードで、ふるうい朝日新聞の記事が蘇ってきました。東京での仕事を捨ててお連れ合いの仕事の関係で新潟に移り住んだこと。双子二組を含む七人の子供を育てながら男女の違いや、きょうだいの序列の違いで子供の人格形成にどんな影響

がもたらされるか研究していること。とは言いながら末っ子にはめちゃくちゃ甘く、上の子供達からは響きを買っていること。その傍らで保母の資格を取って働いていること。詳細は違っているかもしれませんが、あの記事は「国会議員になってしまった黒岩ちづ子さん」のことではなかったでしょうか。

東京からもぎ取られるように見えず知らずの土地に移り住んで、失った仕事を惜しいと思わなかったのでしょうか。七人の子育てなんて私だったらそれだけで人生真つ暗です。そ

れなのに新たに保母の資格をとって再出発。どんなパワーの持ち主か、と三人の子育てと自分の仕事にへ口へ口になっていた私は、ため息をつきながらあの記事を読んだものです。どんなことがあっても結果を他人の所為にせず肯定的に捉える生き方が、潔いと思いました。

「わいふ」で再びあの素敵な女性にお会いできるとは思ってもみませんでした。それも国会議員だなんて本当にうれしい。花開く人はどこにいても開くものなんだなあ、と思います。それとも私達一人一人がそのパワーを内に秘めているのでしょうか。

さきがけは実際壊滅状態ですが、黒岩さんのような人にこそ国会ですつと働いてもらいたいと思いました。応援しています！

今度お目にかかるときはどんなところで輝いているでしょうか。楽しみにしています。

就職に 私も迷いつつぱい

東京都世田谷区 後藤 晶 (42歳)

二九〇号のゴルさんの、「就職騒動」は私も共感するものだった。求人広告を眺めているいろいろ想像しては、応募する前にあきらめる、そんなことを何年続けたことやら。

「家族や家事に差し支えない時間なら」

「そしてそれが自己実現と言えるものなら」

専業主婦を体験すると、この責任と自由のすべてとひきかえにするほどの仕事か、そうそうあるとは思えない。主婦の生活だけで満足していただけるなら問題はないが、ほかの仕事もしたい、自分の余暇を減らしても社会で認められたいと思うから、ゴルさんのように悩むのである。

ワイドショーでは専業主婦論争と

いうのをおもしろおかしくやらせていて、子育てや夫の世話は立派な生きがいだという有閑マダム(古い?)らが出てくる。私も結婚前はそう思っていた。でもそのうち気づく人もいるかも、そうでなくてもどんな運命や家庭の変化があるかはわからない。お金のためだけに人は働くのではないし、自分の環境に合わせて心境も変化するのだから。

十七年の主婦生活の間に、私は断続的にいろんなパート仕事をしていた。最近では家族の休日の土日に仕事するときさえある。子供はいつのまにか成長するし、夫も子供がつきあわなくなつてからは自分の趣味に時間をかけるようになった。いまの労働市場では、パートかフルかの両極端の選択しかできないことは、私も不満だ。

だけど一回目の挫折など、どうつてことないですよ。いいナと思つたらどんどん面接を受けて、見聞を広めたらいいでしょう。そのうち求人

広告の見方もわかつてくるし、どんな職種や条件が求められているのか、今のうちに準備できることはないかなど、必ず役に立つことがあるはず。

社会の仕組みが悪いとはいへ、迷うのは自分に合っていないからでは。そのうち人がなんとやると、これだと思える職場に出会うときがあると思う。その時は子供に放課後一人の時間があつても、地域活動への参加が減つても、あまり悩まないんじゃないかな。ずっと仕事をしてきて家族もそれに慣れていたのなら、残業も抵抗なくできるだろうが、子供を専業主婦のいる家庭で育てた場合は、事故や離婚でもない限り、急激な環境の変化には誰も二の足を踏むだろう。

学校からの電話連絡を回すとき、夕食後と思われる時間帯でもまだ保護者が仕事で帰宅していない家が案外あるので驚く。けっこうみんなたくましい感じ。

自営業ならよくあることだろうが、



夫は会社員、私も雇われているほうが性に合う。迷ったり喜んだりしながら、目の前の仕事に、とりあえずは一生懸命、そしていまだに、より自分で納得できる仕事を模索している。

セールス電話は 気分が悪い

二九〇号「セールス電話が
おそろくさ」へ

埼玉県さいたま市 新井純子

大変な体験をされましたね。

まじめに、まっとうに暮らしているのに、こんなことで気分を害したくないし、怖い思いはしたくないし、要らぬエネルギーは使いたくない。今回のそれは犯罪の範疇に入るのではないかと、と思いながら読んだ。

私の体験は、塾、家庭教師、そのたぐいだ。消費生活アドバイザーをしている友人に、この手の電話が多

くて困っていると言ったら、

「相手の代表者の名前と電話番号を聞いて、メモをしておく。余計なこととは言わずに切ること」とアドバイザーをもらった。

その通りに実行したある夜、セールスの男性は「なぜ、そんなこと聞くの、そんなことは関係ないだろう、何でこっちの言うことに答えないんだ」と乱暴な口調で言うので、「責任者の名前も言えない人の所に、息子をお願いする気はない」と電話を切った。

その後、数回たて続けにかかってきた。私はドキドキしたけれど、声を出さず、受話器を取っては、その辺に置いた。最後には「おい、おい、くそ」だった。

娘には「お母さん、優しく断つてよ、怖いじゃないの」と言われたが、頼んだ訳でもない電話に、いちいち愛想よくつき合っただらう。彼らの手口は、自分の名前を名乗って、さも知り合いのような口振りで

話すので、子供たちから取り次がれてしまう。こちらの状況お構いなしに、べらべらとしゃべる。

同一の会社と思われる所から、息子のテストが終わるたびに電話がきていたが、その件が最後で、現在は無い。

それにしても、電話ばかりではなく、携帯電話に勝手にメールを入れてくるのが、大きな問題になっているが、なんだか、便利な物とのつき合い方を考えてしまう。嫌な世の中。



個人情報もれている

東京都新宿区 林 直美

二九〇号「セールス電話がおそろしい」を読んで、なるほど、こんなパターンもあるのかと、情報を得た気分になった。我が家にもさまざまなかセールス電話が、こちらの都合など無視して強引にかかってくる。

ある時、在宅の仕事を斡旋するらしき会社から電話がかかってきた。仕事のために簿記の検定を受け、その費用を月謝感覚で払えという内容だった。半年後からの仕事で取り戻せるというが、約七十万円である。資料を送るという女性に対し、私が断ると、急に口調が厳しくなり、高慢な態度になった。「あなたねえ」ときた。私もつい、金がないと逆効果な理由をつけたいのに、バカ正直に専業主婦だと言ってしまったのが、

よけい悪かったらしい。半分説教である。私の年齢までしつこく聞くので「答える必要はないし、私には私の考えがある」と言うと、私が折れないとみたのか「三十八にもなって甘えたこと言って」と捨て台詞を残して、一方的に電話を切った。

あまりにも失礼な電話に腹が立つたが、その気持ちがつつきりするまもなく、別の電話があった。似たような内容で、今度は行政書士の試験で五十万という。要するに主婦相手の勧誘なのだ。

初めての時は「直美さんはいらっしゃいますか」と名指ししてきた。「どちら様ですか」このやりとりを三回したら、「もういいです」と若い彼はあきらめた。喜んでいたら、その後三回かかってきた。

二回目の時、夕食の仕度のまっ最中で、彼はまるでテープレコーダーのように、一方的に喋り続けた。どうしたものかと考えているうち十三分も過ぎてしまった。そこへ夫が帰

ってきた。結局、夫が電話をかわり、切ってくれた。強気な私らしくないと夫に言われたが、「わいふ」で読んでセールス電話の怖さを思い出し、切るに切れなかったのが正直なところである。

夫は警察へ話すか電話を切るか、それ以外に対応の仕方がないと言う。確かにその通りだ。貴重な時間を無駄話に延々と付き合うのはバカらしい。しかし、昼間一人でいる身にしてみれば、やっぱり不安が先立つのだ。その翌日、十三分も一人で喋りまくった彼が、説明が足りなかったとまた電話をかけてきた。向こうも一方的なら、こちらもと「説明は充分に聞きました。私には必要ありません。失礼します。切りますよ。切りますね」ガチャン。その後も電話が鳴ったが、私は無視した。まだ数回はかかってきそうな勢いだったが、何度きても、私にはそうするしかない。

彼らも仕事だから仕方ない気持ち

もするが、怖いのは、見知らぬ相手がかこちらの事情を非常によく知っているということである。強気で押し切りたいと思うが、考えてみれば、相手は私の電話番号はもちろん、年



齢（前述の彼女はよくもしらじらしく聞けたものだ）、資料を送るための住所もみんな把握している。パソコンを持つていることも、専業主婦であることも、すでに知っていた口ぶ

りだった。個人情報ごとくまで洩れているのか、考えると不安でたまらない。下手にののしって、家に火をつけられても困る。二件ともすぐに調べてもらったが、電話番号も非通知で、番号案内にも記載されておらず、結局、腹立たしい気持ちだけが残ってしまった。

今の世の中はサービスの提供が早くて、問題点に対する法律が追いついていかないらしい。とにかく、無防備になってはいけない。実質的な被害だけは受けまいよう、自己防衛するしかないのかもしれない。

もう一度考えてみて

千葉県船橋市 岩田和子（49歳）

食事中に喫煙しようとした男性に、遠慮を申し出たという私の投稿に、二通のご意見があったので、私も再度意見を申し述べます。

まず天野さんへ。あなたのご投稿

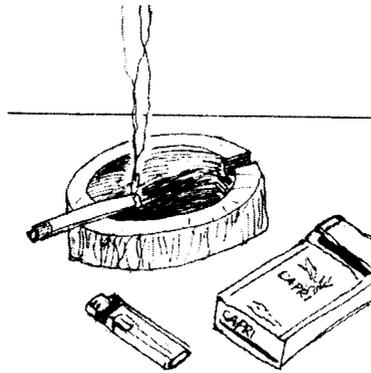
は、私の投稿に関連する点は全くないと思いますので省略させていただきます（しかし喫煙コーナーでタバコを吸っている人に「吸うな」っていう人いるんでしょうかね、この日本で）。

藤池さん。

あなたのおっしゃるとおり、他人から自分の行動を否定的にみられて「嫌だなあ」と思わない人はいません。しかし「嫌。だからそういうことはしないで。すべきじゃない!」というところへ論旨をもっていくために、少々誤解と憶測があると思います。以下あなたの文章に沿ってその誤解を解いていきます。

私は「男性が灰皿を要求した時点ですでに怒って」「いたわけではありません。この店は分煙だと思ってい

ている私が席を移らなければならぬ」とは思わなかったの（藤池さんだったら思いますか?）、この男性は見たところ紳士のようなから、話せばわかってもらえろと考へ、お願いしてみたのです。あなたが誤解した



ように「煙は迷惑」とは言わず、「私は煙が苦手なので」という伝え方で。この欄のテーマのように、高飛車な切り口上で「止めなさい」などは絶対にはいけません。相手が止めることへのエクスキューズをつけやすいようにと、方便的な嘘までつ

いているくらいです。この辺のことは、もつとよく私の文章を読んでいただければおわかりになると思います。案に相違して、紳士と思っていた相手から無頼漢まがいの返答をされて腹が立った（頭には来ません）のは事実ですが、ここで腹の立たない人間で、私には想像できません。なので先に来て食事をしてる私が、コートやら仕事カバンをかかえ、皿小鉢持っつてすぐ席を移動しなきゃならないの、と怒るのは当然でしょう。「席を移るという発想がない」のは当たり前だと私は思います。

昨今はテーブルに灰皿を置かないことで禁煙を示している店も多いので、たしかに私はそのように思い込んでしまったのですが、「非分煙」とは「喫煙者優先」ではありません。両者には同等の権利があるはずで、したがって分煙でないから非喫煙者のほうが遠慮して移動するもの、という理屈は成り立ちません。彼が見かけどおり真の紳士だったら、「あ、

失礼、じゃ私は向こうの席に移りま
すよ」と言えただろうに、と私は残
念に思います。

藤池さんのご意見で不思議に思う
のは、他人への迷惑の原因をつくつ
た人を責めずに「遠慮してほしい」
と控えめに懇願している人を責めて
いることです。私が本当に喘息かな
にかの患者であつても、そのように
非難なさいますか？ 逆に、ハンデ
イのある人でなくては、人に迷惑行
為を認めてもらおうとしてはいけな
いのですか？ またそれはなぜ？

あなたの疑問のとおり、私の食事
は後半、とても味気ないものになり
ました。あなたの憶測の範囲でいう
と、周りの人もいやいな雰囲気で食
べたかも知れない。「いったい誰が悪
かったのでしょうか」という文章の次
には、文脈からいって当然「あなた
(岩田)が悪かったのです」と続くで
しょう。でも私はそうは思わない。
だれも「悪い」というほど悪くはな
いと思うけれど、不快な雰囲気が生

じたなら、その責めは原因をつくつ
た人の側にあると考えています。原
因なくして結果なし、です。

ついでに微笑ましかつたのは、藤
池さんがご自分の心理に合った状況
設定だけを考えて文章化していらし
ったことです。ほかのお客さんの中
には、いやいな雰囲気を感じる人も
いれば、私にエールを送りたい人だ
つていたかも知れない。また私が第
三者なら、「おつ、おもしろいじゃ
ん！」と、耳ダンポになつたに違ひ
ないと思います(事実は、周囲に私
たち以外のお客はいませんでした)。

そして最後に、「受ける迷惑ばかり
考えてはいけな」という言葉
がありました。その前の文章を受け
るとすれば、それは「悪いことだけ
ら」という理由に基づきます。

藤池さんがそうお考えになるのは
いっとうにかまいませんが、それは
ご自分の生き方だけに止めておいて
いただきたいと、これもまた懇願い
たします。

なぜなら、こうした考え方は、用
いる人次第で、どれほど危険なこと
になるかわからないからです。もち
ろん、私はそのようには決して考え
ません。

「他人」のタバコ

東京都中野区 鈴木由美子

小学生の時に気管支喘息という持
病をかかえて四十年になる。発病す
ると一日に何百回もせきこむ上、嘔
吐や呼吸困難を伴い、夜も眠れない
状態。発作の原因は風邪や睡眠不足
なのだが、悪化させるのは行く先々
で出会う「他人のタバコ」である。
二八八号の岩田和子さんの提起は他
人事ではない。

新幹線は禁煙車、レストランは禁
煙席を選んでいるが、そんな安全地
帯はポツンポツンと離れた飛び石の
ような存在。たとえばお芝居の当日

券を買う行列で身動きならないときに、前後の人の煙が直撃する。こんなときは「あー、すみませんが煙でセキが出ますので」とお願いせざるを得ない。待合室やロビーでも、できるだけ相手の気を悪くさせない



ようにと気を使いながら「お願い」をする習慣である。

ところが私は男性並みの大柄な女なのだ。タバコを消しながら「お強そうですけどねえ」の一言を浴びることがある。そして、岩田さんと同じく「ここは禁煙じゃないんだよね」

と言われることも。「申し訳ありません」と頭を下げ、あとは消すも消さないも相手にまかせている。

喫煙者の中には、禁煙席以外は、タバコの吸い放題が保証されていると思っている人がいるようだ。公共施設や駅ホームにある巨大灰皿付き喫煙コーナーでなら吸い放題でいいが、他の大部分の場所では、そばの人に迷惑をかけないか判断してから吸う社会性が要求されるのではないか。「タバコはご遠慮ください」と言われたら、イヤミ抜きですぐ消す習慣をつけてこそ、喫煙を楽しむ生活を続けることもできるだろう。

私たちは、他人に迷惑をかけては軌道修正を繰り返して生きている。家の外に出れば、傘のしずくが人にかかったことを詫び、車椅子の通行を邪魔する荷物をどけるようなことがいくらかでも起きる。喫煙者もそんな感覚で、さわやかにタバコを消してほしいと思う。

(え・弘法堂建二)

自費出版は「わいふ」くごうぞー

「わいふ」編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

イラストも用意できますし、お書きになれない方のために、聞き書きのまともいたします。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実にお安いです。事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

ちなみに最近は、読者からのご依頼により、『虹の雲』、『春のかたみ』、『出会いに合掌して』などを制作いたしました。

皆さまも人生の記念に計画されてはいかがでしょう。

黄金級の大歓迎

大阪市住之江区

バセダカオル

いざイランへ

いよいよその日がやって来た。イラン人の夫と結婚して四年、初めてイランを訪問するのだ。夫と出会ったころ、イラン出身だと言われたとき、何気ない返事をしながらも、あれ、イランってどこだったっけ、なんて考えてしまった。普通の日本の若者と同じように、中東の砂漠の国、戦争をしていた国、

といったイメージがおぼろげに浮かんでくるだけだった。

今までに夫の家族と、電話で話してきた印象はよいものである。しかし、この旅行には一抹の不安があった。イランは厳格なイスラム教国であり、厳しい法律、結束の固そうな家族、わたしには入りこめそうにない。テヘランのメヘラバード空港に到着したのは、現地時間で早朝だった。外



国人でもイスラム法に従わなければならないので、現地女性のようにスカーフを頭に被り、コートや羽織った。初めて降り立ったイランの地は、夏なのに少し肌寒い。凜とした空気が頬に触れる。石造りの、いかにも冷たそうなカウンターをいくつも通り過ぎた。そして、両替所で外貨の検査を受

メヘラバード空港にて
大歓迎の日

けていたところ、

「ハロー」

と男の人に呼び止められた。振り向くと、どこかで見たことのある人が立っていた。写真で見たことのある夫の兄弟だ。

「お兄さんが」

と夫を呼ぶと、夫は驚いた様子で振り返った。兄に気づくと、手をかけ合い、一瞬見つめあった。そして握手し、抱き合った。二人とも涙が光っていた。わたしはなぜかどぎまぎしてしまふ。

兄は空港のままで迎えに来られるはずはないのだが、税関に書類をもらいに来る用事があったので、到着時間に合せて入って来てくれたらしい。

「もう一時間も前から、外で迎えが待ってるんだ」

と兄が言う。

「日本人の新妻の歓迎に、車六台で二、三十人來てるんだよ」

車六台も!!

税関で荷物をすべて開けて調べたので、一時間以上もかかってしまった。

ペルシャ語がわからないわたしは、税関の交渉を夫に任せ、周りの人や出口のほうを見ていた。出口はガラス張りの壁があり、外側は満員電車のような混み具合で、異様な光景だった。二十メートルほどの幅のガラスの壁の向こうは、黒山の人だかりである。

全員が誰かの迎えに来ているらしく、我も我もとこちら側を見つめている。目を合わせるのが怖いほどだったが、その内に見覚えのある顔を見つけた。甥や姪たちだ。大きく手を振ってくれるので、振り返した。

税関の段取りの悪さにイライラしながらも、ようやく外に出ることができた。外の迎えの人たちは、わたしたちの出でくるのを見計らって、出口の辺りを陣取ってくれていた。それでも出口の扉を開けた途端、誰が親戚で、誰が他人かわからないほど、大勢の人に取り囲まれた。

「サラーム！（こんにちは）」

まず、近寄ってきた甥と握手した。その後ろから姉の手が伸び、抱きしめ

られた。涙を浮かべる母も、わたしを引き寄せてキスした。次々と、男の人たちからは握手、女の人たちからはキスと抱擁で迎えられた。

グラジオラスにマーガレット、たくさんの花束が手渡された。多すぎて持ちきれず、子供たちを乗せたベビーカーの上に置いていくと、子供が花に埋もれてしまうようだった。そのうち、子供たちもみんなに抱っこされて、キスされていた。

「サラーム（こんにちは）」

「ホシユマディ（ようこそ）」

この時にわかるのはこの二語くらいだったが、いろんな所から飛び交い、とても歓迎されているのがわかった。日本でも会ったことのある夫の友人から話し掛けられた。

「テヘランはきれいな所でしょう。

そう思いませんか」

「ほんとにきれいですよ」

と答えた。正直な気持ちだった。

空港前の駐車場から見ると、青く輝く美しい空や、鮮やかな緑の木々は美し

いと思った。山の傾斜にあわせてテヘ

ランの住宅街が遠くに見える。その上には雪を頂いた山々が連なる。空港の隣はゴルフ場になっていて、ブレイしている人が小人のように見えた。それを覗きながら、車のほうに向かった。

わたしたちの滞在に合わせて、景気のよい姉の夫が新車を買っていた。わたしが先に乗り、他の人たちもそれぞれ車に乗り込んだ。六台で、総勢三十人を越えた。

テヘランの家

街並みを見ながら、両親の家に向かった。テヘランの街ではタイル張りのマンションが多い。ほとんどが三階建てから五階建てで、道路に面して建っている。

内側に建っていて、前に庭がある造りの場合でも、道路に面して高い塀で囲まれていて、人を寄せ付けない威圧感がある。わたしなどは結構後になるまで、滞在中の両親の家が見分けられない有り様だった。車に乗っていると、

道の両側に塀ばかり見える。

両親の家は落ち着いた住宅街にある。周りの建物と同様に、タイル張りのマンションで、一階は駐車場になっている。六台で帰ってきたので、何台かは駐車場に止め、止められない車は外に止めて、三十人ほどがみんな駐車場に入ってきた。

羊が一匹連れられて来た。お祝いをするまで、誰も家に入ってはいけないという。イランでは、祭りの日や大きな祝いごとのある日には、羊をほふる。つまり、みんなの前でいけにえにし、後で解体して食べるのだ。この儀式のような光景は、テレビでは見たことがあつたけれど、私とは別世界のものだった。また、テヘランの近代的なマンションの駐車場でなされるものとは思っていないかった。

羊をさばくことにかけてはプロ級という田舎の叔父が、羊を寝かせて、首を押さえる。もう一人が体を押さえるので、羊は動けない。最後に水道の栓を開け、ホースの先から出てくる水を

羊に飲ませ、羊の顔をメッカの方向に向ける。大きなナイフを手に取り、頭を持ち上げ、首を一気に切り裂く。

そして、血を地面に、ここでは、駐車場の排水溝に流す。首を切り落とすにしても、ぴくぴくと動くことのある体を押さえつけ、血が完全に抜けるまで、切り口に水を流し続ける。好奇心から見てみたかったけれど、やはり背筋に寒気が走った。

ようやく家の中に入る。玄関を開けると、大きなホールになっていた。リビングルームにあたり、三十畳はありそうな部屋である。床には大小様々のペルシャ絨毯が敷き詰められ、天井にはシャンデリアが三つも掛かっている。ソファアーやクッション、テレビ棚くらいしか置かれていないので、とても広々している。これなら三十人いても平気そうだ。

部屋では日本のように床に座る。胡座をかいたり、足を崩したりして座る。胡という字が現在のイランであるペルシャなど西方を意味するとおり、イラ

ンでは男も女も胡座をかく。

姪の十代の女の子たちはスカーフもコートも脱いで、Tシャツとジーンズの普通の格好になった。あとは姉や兄嫁などの四十代以降の女性たちだが、コート、チャドル（頭から全身を覆う大きな布）は脱いでも、スカーフは取らなかった。二十代くらいの人でも、いとこや友人の奥さんともなれば、コートも脱がない。わたしの立場としては、どうすればいいのかわからない。夫に聞こうにも、他の人と話ばかりしていて、なかなかつかまらない。とりあえずコートだけ脱いだ。

壁にクッションが立てかけてあるので、みんな壁に沿って座っている。男女それぞれ大勢いるのにも関わらず、男性側と女性側に分かれてしまっている。でも完全に分かれるでもなく、部屋の反対側同士でいっしょに話していた。

母や姉などは、台所でチャイ（紅茶）や果物の用意をしていた。まず出されたのは、シャルバットと呼ばれる冷た



女性たちに囲まれる

い飲み物だ。果物の濃縮シロップを薄めて、氷を浮かべて供される。ワイン色のシロップと水を混ぜないで差し出されるので、とても美しい。それをスプーンで混ぜて飲む。それを甥や姪の若い子たちが配る。

次に配られたのは果物だ。りんごやすもも、小さい胡瓜と小さいナイフを載せた皿が配られた。残った果物は、大きなバスケットに入れて、部屋の真ん中に盛ってある。ここでは胡瓜も果物だ。みんなが胡瓜の皮を剥いて食べるのに驚いた。味が濃いので、皮にも灰汁が強いらしい。反対に桃は皮を剥かなかった。

少し食べるのを休んで、部屋の様子や人々を観察していると、ほうっとしているように見えるのだろう。

「ボホリ（食べなさい）」と真ん中のバスケットからすぐ、果物を補充してくれるのは困った。

チャイが出てくるころには、少し緊張も解けて落ち着いてきた。わたしたちの荷物は隣の小さい部屋に集められ

ていた。姉に促されてその部屋に入った。他の女性たちも集まってきた。小さい部屋で女性ばかりになると、ほとんどがスカーフやコートを脱いで、足を伸ばしてくつろぎ始めた。ドアを開けていないので、男性から見えない訳ではないのだが、女性を尊重して見ないようにしているという感じだろうか。

スカーフを取って隣に座った姉が、手を握って熱心に話し掛けてくれる。もうスカーフを取ってもいいよ、と言

つてくれているようだ。他の女の子たちも前後左右に集まって、抱きしめたり、キスしたり、手を握ったり、動物園の見世物のよう。みんなが一举一動を見てるので、圧倒されてしまう。

話を通じないので、姉はわたしの夫を呼んで通訳させた。言葉がわからないうと、結局みんなの様子を見ているだけになる。身振り手振りでコミュニケーションは難しい。でも、歓迎されているのはよくわかった。

もうスカーフもつけなくてよさそうと思ったので、外してリビングのほう

に戻った。姉や兄嫁はまたスカーフを被っていた。外では法律に拘束されることがあっても、家の中では個人の裁量に任されるらしい。スカーフをつけたい人はつける。チャドルを着たい人は着る。タンクトップでいたい人はいる、といった様子だ。特に外国人であるわたしにあれこれ言う人は、滞在中を通して一人もいなかった。

金色の女王のように

イランには花嫁に金を贈る習慣がある。日本なら結婚式の日にお金を包むところだが、ここでは式の時、花嫁に金のアクセサリを渡す。近い親戚は重いもの、遠くなるにしたがって軽いものでよい。もらったアクセサリは花嫁の私有財産になるらしい。

金は生活に身近で、金の店はどこにいても多い。アクセサリといってもグラム単位で売られ、万国共通の金レートプラスわずかな加工料で買うことができる。また、金レートの値段で買い上げもしてくれるので、お金に換

えたり、小さなアクセサリを集めて買い上げてもらい、より大きなアクセサリに換えたりすることも多い。親戚からもらったものを売ってしまうことには、あまり抵抗はないようだ。

本来なら結婚式で渡されるものだが、わたしはイランで式を挙げなかった。結婚して四年も経っていても、こちらの親戚にとって初対面の花嫁であるので、金を用意してくれていた。

「ほらここに座って」

と姪が座布団のようなのを敷いて、座らせてくれた。みんなが周りに集まると、まず母がビロードの包みを持ってきた。そこには、太い金の鎖のネックレスが収められていた。震える手で取り出すと、わたしにかけてくれた。抱きしめてキスしたので、わたしも同じようにした。みんなが拍手して、父は後ろのほうで立ち、にこにこして私を見つめていた。

次は下の兄の番らしい。彼はわたしにブレスレットをつけてくれた。冗談で兄が、母と同様に私にキスする真似

イランの食卓風景
あらかじめ料理をすべて並べておく



をみると、夫は兄をにらみつける。みんな笑った。欧米の人と違って、親子兄弟以外の異性同士は挨拶にも抱き合ったり、キスしたりはしない。ここでは姪の一人が近寄ってきて、にっこりしながらキスしてくれた。

夕方になっても、入れ替わり立ち替わり人々が訪れた。空港に来てくれた人たちの中でも、近い親戚ではない友人などは帰っていった。新たに伯母さんの家族、医者をしているいとこの家族、またいとこの家族と次々と訪れた。

誰かが来た時、帰る時、必ず同性同士は肩に手を掛け合い、両頬にキスし合って挨拶する。台所仕事に追われる母も、何度も玄関へ挨拶をしに来た。夫の帰国のように、長らくイランを離れていた人が帰国した場合、たとえ仕事があっても、近い親戚なら必ず空港まで迎えに来る。遠い親戚でも、帰国後二、三日以内に家を訪問するのがマナーである。

アルコールは禁止されているので、どんなパーティーでも紅茶、コーラなど

で盛り上がる。到着したこの日、残ったメンバーは深夜までパーティーを続けた。ラジカセで早いテンポのイランのダンス音楽を鳴らす。踊るのは、十代の甥や姪たちである。イランのダンスは腰をくねらせ、とてもセクシーだ。

女の子は指を繊細に仰ぐように広げ、男の子は腕を上や横に真っ直ぐに伸ばし、精悍そうに見える。一歳になる息子は、もうすつかり慣れ、ダンスを真似していた。周りから大人が拍子をととり、はやし立てて盛り上げる。近い親戚だけとはいっても二十人近くいるので、にぎやかである。

みんながわたしを受け入れ、輪の中に入れてくれたのがうれしい。

イランの人間社会は、想像していたような、宗教に凝り固まった、暗く厳しいものではなく、家族愛に満ちた、あたたかいものだった。わたしの中のわだかまりが溶けていくようだった。興奮していたのにもかかわらず、安心して眠りについた。

(写真提供・筆者)

ズバリ一言

読んでがっかり

仙台市泉区 馬場紹美（29歳）

図書館でリクエストを出してから、一か月近くも待っていた「今、話題の本」がやっと私のところへまわってきた。

しかしその本を開いて、数ページもいかないうちからなんだかムカムカしてきた。そして最後まで読んで呆れて

しまった。

その本とは、井形慶子さんという方の書いた『古くて豊かなイギリスの家、便利で貧しい日本の家』である。

この著者は自分が単なるイギリスかぶれではないし、本の内容もイギリスを礼賛し、信奉しただけのものではないと言っている。しかしハッキリ申し上げて、この著者はイギリスかぶれ以外の何者でもない。

その本ではイギリスと日本の住宅、及びその周辺事情について論じられているのだが、その比較の根底には著者の価値観である「イギリスは正しく、日本は間違っている論」が流れていて、私には到底まともな比較とは思えなかった。

例えばこの著者にとって、総レンガの洋風高級住宅に梅や松が植えてあって、玉砂利が敷いてあるような組み合わせは非常に許し難いことらしい。どのくらい許し難いかをこのように説明している。『これではファッションショーでモデルにフォーマルドレスを着

せて、下駄を履かせているようなものだ』と。そして『そんな家を最先端をいくハイセンスな住宅と信じる感覚に愕然とし、その異様さに見れば見るほどため息が出た』と表現している。

しかし洋風住宅に梅や松があつて何がそんなにいけないのだろうか。もしかしたらその家は二世帯住宅であるかもしれないではないか。外観は息子夫婦の要望で洋風に。そして庭の一部には親の好む梅や松を植え、互いに折り合いをつけたという事情があるのかもしれない。洋風住宅には洋風庭園という固定された価値観がすべてではないと思うのだが、そんな私の考え方のほうがダサイのだろうか。（もともと著者はその二世帯住宅についても敵意を持っているのだが）。それにフォーマルドレスと下駄の組み合わせだって十年後は最先端になっているかもしれない。ファッションなんてタブーを壊すことからはじまるのだから。

さらにこの著者の偏った価値観はこんなことまで述べている。『高層住宅

に住まう人々は精神的に荒廃し、犯罪の温床になる」と。ここを読んで、私は子供のころのある出来事を思い出した。小学校六年生の時、転校した先の学校で『お前は公団の賃貸住宅に住んでいるから貧乏だ』と毎日からかう男の子たちがいた。その子たちは分譲住宅に住んでいるので、私のような貧乏人とは身分が違うという訳だ。きっとその子たちの親が、知らず知らずのうちにそんな考えを子供に伝えてしまっただろうが、この著者も同じようなことをやりかねないと思うのは考えすぎだろうか。もしもこの著者の子供が、高層住宅に住む友達を家に連れて来た時、親として全く平等な心で我が子の友としてその子を受け入れることができるだろうか。その子のふとした行為について「あの子は高層育ちだから」という感情がわいてしまうのではないだろうか。

また著者は政治に関してもイギリス政府は国民のために努力していて、だからこそかように豊かであると述べて

いる。しかしその豊かさが決して自国民の努力だけではなく、むしろ長年にわたる植民地政策で築き上げた豊かさであるというところには、全く意識が届いていない。そうしておいて日本の消費文化については苦言を述べている。

もちろん私自身、何でも使い捨てのゴミばかりが増えるこの社会の状況を変えたいと願う一人である。しかしこの、無駄が無駄を生むようなやり方

日本は経済大国になっていったことも認めざるを得ないだろう。この著者だってそのおかげで、自宅の部材を買うために、何度も渡英できたりする訳である。

著者は本を書き進めるうちに、イギリスへの憧れを再認識したそうである。しかしこの人のように、ただ盲目的に憧れていたのでは本当の比較はできないのではないだろうか。そんな疑問を多く抱かせる内容の本であった。



福祉について思う

大阪市住之江区 中西紀美子（72歳）

昨年大阪府立老人大学の福祉科に籍をおき、毎週一回の授業で、午前中は一般教養、各方面よりの講師の話聞き、午後は専門の福祉の勉強を一年間学んだ。

福祉の一般的な知識は勿論、特養ホーム、ケアハウス、知的障害施設などの見学と手伝い、アイマスクをつけての歩行練習、車椅子による路上の運転実習や、それに対しての各グループによる意見交換、討論会など学問に沿って福祉全般を学んだ。漠然とした福祉に対する私の考えを改め直す日々であったと思う。

終了間近いある日、先生がこれまで福祉について少しでも関わったことがある人の体験談を求めた。その中に、私が興味をもった話を書いてみる。

F市の地区の福祉関係の役をしてい

るA氏と、A市の地区の世話役をしているB氏の二人のことである。

A氏は長年役所勤めの後、定年退職、その後児童塾の経営、書道の先生の傍ら、地区の中で役を持っていて忙しい



毎日を送っている。一方B氏は長年民間企業で勤めて定年退職、地域の老人会の役員や、福祉ボランティアもやっています結構忙しい日を送っている。

このお二人の話は、独居老人（主に男性）のケアの仕方についてであっ

た。独居老人は頑固で片意地で、これまでの人生で社長職、大会社の部長級、役所の幹部、校長先生などを歴任した方は特に手をつけられないとの意見であった。

A氏の担当の独居老人も、何度訪問しても居留守を使って、かたくなに戸も開けず、話に応じない変屈者であった。それでも根気よく訪ねていたが、善意が通じぬままに、死体となっていたと、生々しく傷ましい話であった。

B氏も同じような変屈で頑固な独りの老人をいくら訪ねても応じないの、対応の仕方をいろいろと模索しているうちに、ふと気がついて手紙を出すことを思いついた。近所の出来事、子供達との交流、日常的なことを気がつくままに、常に使っている言葉で返事を期待することなく書き送っていた。そのうち何度目かの訪問で心を開いて感謝の言葉がでたそうである。B氏は、私は字も文も下手なことが幸いしたのでしようと謙遜されていたが、A氏の轍を踏むことなく解決、B氏の

福祉に対する心意気がうかがわれて感心した。改めてA氏とB氏の違いについて考えると、A氏は長年の勤めで身についた行動が、(その人の仕事に対しての情念にもよるが)役所勤めの弊害で(語弊があるかもしれない)通り一遍の対応に努力しても、もう一歩心が通じなかったのではないかと思っ

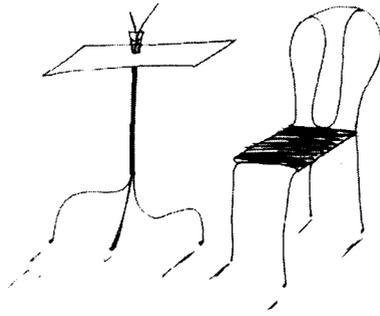
た。福祉の声は巷に満ち満ちて、介護保険などいろいろと法律もよかれと施行されてきているが、関わる人が個々の対応の仕方に、B氏のように心を通わせなければ、仏作って魂入れず、何の効果もないのではないかと、危惧する思いの昨今です。

「わが家」の価値

奈良県生駒郡 高松恭子

わいふ二九〇号、田中慶子さんの「無洗米」を見て、「やっぱりわいふだ」

と思った。彼女が朝日新聞に載った男性投稿者の無洗米に関する文を読み、家事を精神論で評価していることに疑問を感じ、反対意見を投稿したのは記憶に新しい。文章仲間で回し読みした



その文は要点が簡潔にまとめられ「これは必ず載るよ」と言っていたのに没で、同じような反論も載らなかった。

朝日新聞を購読している方は多いと

思うが、特に関西版の声欄に疑問を感じていらっしやる方はいないだろうか。このコーナーは読者が社会に向けて自分の意見や主義・主張を発信できる場で、新聞が唯一、読者と直接つながっている大切な場だった。それが最近、堂々と体制批判をしたり、反対意見を述べたりした投稿が減り、美談やほのぼのとした話題に終始している。そういう投稿しかないなら仕方ないが、現に田中さんのきわめて論理的な意見が没になり、呆れた投稿が載っていた。それは、夫がアメリカ留学中で不在の時に第一子を出産することになった女性のものであった。不安だったが、産婦人科医である父親に見守られ、実家で毎日母親と楽しいおしゃべりしながらベビー用品を買いそろえ、みんなに励まされながら無事出産した。自分は何と幸せだろうと感謝しているというものだった。

正直言って呆れた。この文がいけないと言うのではない。声の欄にふさわしくないと言いたいのだ。ひととき欄

もしくは、ホームページにでも書くべき類の文である。私は、わいふ「リラの花 桜の花」で、異国でたった一人でギョーム君を産んだ浅野さんにこそ感動するが、この声欄の親離れもできていない幸せなお嬢さんには何の感慨も持てない。

これは編集者の感覚がおかしいと思つたので朝日に意見を書いて出した。すぐさま、編集長から返事がきた。それには、自分たちが載せたいのは、どこかで読んだり聞いたりしたことを改めて述べたようなご高説ではなく読者の生の声なのだと言われていた。

意見に田中さんの投稿文を引き合いに出したわけではないが、彼女の文も誰かが言ったことを書きなおしたご高説だと言うのか？ 彼女が女だから、そして職業が自営業手伝いだから？と、思いたくはないが、そんなふうに考えたくもなる。

私も二か月前、高校時代のクラスメートだった河島英五さんの追悼文をひととき欄に投稿した。翌日、編集者か

ら書き直して載るかもしれないと電話があった。主旨が変えられそうな気がしたので没にしてもらった。そして母校の同窓会誌に送った。今度は会誌の編集をしている先生から電話があり、載せたいが、どうしても具合の悪い箇所があつて……、と言われた。卒業式でギターを弾きながら答辞を述べた河島君の行為に、反対であつたにもかかわらず生徒の決めたことだからと認めた答辞の学校を褒め、文部省の言いなりに形骸化された卒業式をしている現状を嘆いた部分である。もちろん、それなら載せていらないと断つた。どこもかしこもいったい何が怖くて、このように主義、主張を削ろうとするのだろうか。

確かに朝日新聞は、十年前の阪神支局襲撃事件以来、変わってきた。はっきりした意見、過激な意見は影を潜めている。子どもころから慣れ親しんだ朝日だが、骨抜き内容に失望しようやめてしまった。それにしても長年誇りに思っていた母校でさえこれ

だ。

となると、やはり投稿先は田中編集長と和田副編集長のコンビで怖いもの知らずの「わいふ」しかない。今回のいきさつを振り返り、権力を恐れないことの大切さを改めて痛感した。

小さな「わいふ」がとても大きく見えてきた。

子どもに伝えるべきこと

愛知県瀬戸市 武藤徳子（43歳）

中学生の時、図書室で一冊の分厚い本を見つけた。「南京大虐殺」。題名のものしさに手をのばし、ページをめくるうち私は動けなくなってしまう。内容もさることながら、おびただしい数の写真が、ようやく性を意識し始めたばかりの私に恐ろしい衝撃を与えた。

多くの惨たらしい写真の中で、一生忘れられないものは、一人の中国人女

性と日本人兵士の記念写真だ。りっぱな口髭の兵士は堂々と胸を張り、男らしく足を広げ銃剣を手に敵めしい顔で椅子に座っている。そしてその右手に女性は立っている、全裸で。目元と陰部に黒い目かくしがはいつているが、それは後に入れられたものだろう。

その女性は、何一つ身につけておらず、生まれた時そのままの姿でそこにいる。顔はうつむきかげんで、体の線は頼りなげ、その場から消え入りたいたような姿。

私の心臓は凍りついたが、誰にも自分の見た物の話をしなかった。恐かったのだ。それが何なのか理解できないし、したくなかった。その鬼畜は日本人ではないか！ 今までこんなこと誰も教えてくれなかった。父や母は時々戦争の話をしてくれた。アメリカの焼夷弾で母の家は焼けたこと、イモの蔓を食べたこと、空襲の時屋根の上に登って米軍機に「おまえらなんかこわくないぞ！」と叫び続けたこと、その時は本当に恐くなかったと父は笑った。



小学校の授業中先生も戦争の話をしてくれた。

衛生状態が悪く、子どもたちの傷あとはすぐ膿んで、そこにうじがわいたと。食べる物がなくてひもじい子どもたちは歩きながらそのうじを口に入れたと。「うそお！ 気持ち悪い！ 給食食べれーん！」と騒ぐ私たちに怒りもせず、

「本当だよ。信じられんでしょ」と微笑んだ。

原爆の話も聞いた。写真も見た。原爆の後に生まれた「無脳児」のホルマリン漬けは私たちの心をひつつかんだ。顔の上が巾着のように絞られた無脳児をしばらく私はノートの端に描き続け、クラスの間喧嘩には「無脳児！」が飛びかかった。何度も口にするので、子どもなりに戦争の恐ろしさを学んでいったように思うが、その時いつも日本は被害者だった。バービーやタミーのドレスを着せ替え「宇宙家族ロビンソン」や「陽気なルーシー」を見ながらアメリカという国に憧れてはいた

が、心の中で「日本にひどいことをした悪い国なんだぞ」と思っていた。

満州からの引き揚げ者の悲惨を知った時、ソ連も鬼畜の仲間になった。戦争は、日本がひどい目に遭ったからいけないのだと信じていた。

その考えは、あの写真で根こそぎひっくり返された。

少し後に「私は貝になりたい」という映画を見た。涙が止まらなかった。戦争というものがどういふものかやっとわかったのだ。そこにあるのは、国と国との力関係、欲の絡みあった利害関係だけであり、日本は正義の味方でも、悪魔の手先でもなく、被害者であると同時に加害者でもあった。隣の温厚なお爺ちゃんが鬼の形相で人を殺した。そういう狂気の嵐が戦争であると。

これ子どもたちに伝えねば。戦争を体験した世代が亡くなっていき、親も教師も経験を話せない。せめて歴史の教科書だけでも真実をあるがまま書いておくべきだろう。そこで興味を持った子は、図書館なりパソコンなりで

調べるだろう。教科書はそのきつかけだ。正確に事実を記さねば意味がない。

「新しい歴史教科書をつくる会」(西尾幹二会長)による中学校歴史教科書は、現行の歴史観が「自虐的」であるとの批判から執筆された。その内容抜粋を見て背すじが凍った。「南京大虐殺」は「南京事件」になりホロコーストではないと明言し、「韓国併合」や「大東亜会議」は日本側の主張しか伝えていない。「特攻隊」に至っては美化するような書き方であるし「従軍慰安婦」は消えてしまった。

アジアの国々、特に中国や韓国にしたことをあまり書き立てて子どもたちを刺激し、ショックを与え愛国心をなくさせてはいけないという考えからだと言ふ。なんとという情けない理論だろう。

彼らは子どもたちをどこへ連れて行くつもりだろう。歩き始めた子の前から石ころを全部取り去る親を賢いと言うだろうか？ 石ころにつまづいて、子どもは石の存在を知り、ころんだ痛

さを知り、立ち上がった時には石をよけようとす。それを見守るのが親のはずだ。

確かにショックは受ける。しかしそれで日本を嫌いにはならない。そんなに簡単に自分の生まれ育った国に嫌悪感を持つなら問題は別のところにある。事実をきちんと知らせ、子どもたちにもっと考えさせてやってほしい。縄文、奈良、平安も大事だが現代史にもっと時間はとれないものか。しっかりとした教科書と教師のサポートで戦争という悲劇をじっくり見つめさせてやるべきだ。

歴史をしっかりと学べば、なぜアジアの国々が、日本の文化や援助を受け入れながら、未だにするどい反日感情をさらけ出すのか理解できるだろう。自分たちの大事な祖国が、二度とまちがった方向に進まぬように、若い純粋な頭に考えさせてやることこそ、世代を越えて続けていくべき大切な義務だと思う。

(え・馬場紹美)



八十歳の手習い

東京都青梅市 福島みさを (79歳)

人生八十年、私はまさにそれに該当するおばあちゃんになっている。

六十八歳で九十九歳の姑を見送り嫁の座から解放されたが、長年の疲れか体調を崩し暫くの間、自然の中に身を

任せ癒しの日々を送っていた。

七十三歳になり健康を取り戻した。

夫が元気で自由の利くうちに、五年でもいいから好きなことをさせて貰おうと考え、高齢者の健康福祉センターが出来たのを機会に、茶道教室と華道教室に通い始め、今年七年目を迎えた。婦人会主催の書道教室にも仲間に入れて貰っていたが、夫の入退院、その後の事情で止むなく止めることになり寂しい思いをしていた。

二〇〇一年正月、新聞に書道の通信講座の広告が出ていた。「一か月一九八〇円の月謝で添削をしてくれる」という。ちょうど手頃なので早速入会の手続きをした。

数日後、縦四十三糎、横二十七糎、高さ十一糎の重い箱が宅配された。一円のお金も送金していないのに、こんなに立派な箱が届いて!と思いつながら開けて二度ビックリ。これって決して宣伝している訳ではありませんよ。

初心者用の書道に必要な道具一式、ビデオ学習の手引き、実用書道講座手

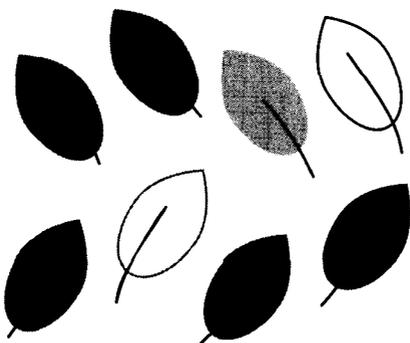
本集、本他に半紙大で表は直筆、裏はなぞって練習するような下敷きも入っている。大判の手本は「行書 楷書編」「かな 生活書編」「応用編 名筆の鑑賞」とあり、こんなにたくさん一度に来て、どうしたらいいのかと心配が先立った。困ったことになってしまった。

一月中は手をつけぬままになっていたが、第一回目の学費送金が二月十二日になっていたので大急ぎで送金した。そして初めて「天人」と半紙に二字清書して郵送した。

二月二十四日、書道の指導課より添削物が届いた。開けて見ると「天」は朱墨で三重丸。評は「伸びやかな筆運び、明るさの感じられる線は魅力的です。堂々とした書き振りはみごとです。力強さも感じしっかりと書けています。『人』の起筆はしっかりと入っています。直線的に勢いがあります。徐々に力を加えて太くなるように」この他細かい注意書き、丁寧な添削に驚きと共に天にも昇る心地がした。まるで小

学校の子供の心にかえり嬉しかった。

「今まで村木先生のもとで教えて戴いたお蔭」と先生に感謝し益々書くことが楽しくなった。小筆で細字を書く



時は机に向かって書くが、普通は床に座り小座蒲団をお尻の下に敷き、床に紙を置いて書く。腕もゆったり動くし力も入るのでその方法でやっている。

そして次の頁に進み練習して清書を

する。封筒に入れて投函する瞬間、なんともいえず満足している自分が愛しい。添削物がそろそろ返って来るころかなと待ち遠しい気持ちは、ラブレターを待つ気分である。

このような訳で二月から始め今五か月目で巻一の「行書 楷書編」を上げ、巻二の「かな 生活書編」でかなの散らし書きから年賀状へと進んだ。

老夫婦二人の生活は、寒い間は大きな炬燵に向かい合って本を読んだり、書いたり、テレビを観たりしているが、時に意見が対立する、そんな時は黙って表座敷の定位置に避難して墨をすることにしている。

心が静まったころにかなで俳句か短歌の手本を見て練習する。二枚清書が仕上がるころになると何もかも忘れ静寂の境地になっている。ついでに手紙を書く、楽しいひと時である。

娘や孫が手漉きの便せんや封筒を贈ってくれる。八十の手習いなど思ってもかけなかったが、何となく始めたことだけれど、今これに夢中である。

わいふ文章講座のおすすめ

公民館、女性センター、社会教育課などのご依頼で、しばしば「わいふ文章講座」を開いています。

編集長田中、副編集長和田、「わいふ」から巣立ったライター達を講師とし、五回から十回までのコースがあります。

その他に、「子育て」「教育」「女性」「高齢者」「社会参加」など、各種の問題について講演をいたします。老人ホーム情報センター主任研究員の水落も担当します。

お住まいの地域で開きたい方は、お電話をください。資料をさし上げます。それを持って公民館、教育委員会の社会教育課などの開講を頼んでみてくだされば、引き受けてくれるところも多いいと思います。

●PTA主催の成人教育、家庭教育学級での講師としても、ご依頼ください。

デイズニーランド ふたたび

栃木県宇都宮市

真野由美子 (36歳)



育児は万事私任せて、特別意見は述べない夫にも、ただ一つだけ注文があった。

それは、「禁デイズニー」である。

このごろのデイズニーのはびこりよ
うは許せない。どうにも嫌いだから、
うちの子どもには与えるな、と言うの
だ。

しかしこれは、小さいお子さんをお
持ちのお母さんならおわかりだろう
が、けっこう大変なことだ。

赤ちゃんの服、小さい子どもの服、
おもちゃその他生活用品の柄は、デ
イズニーものが非常に多い。お祝いなん
か頂くと三分の一はミッキーマウス付
きだぞ……っていうのは大袈裟かし

ら？ それに、ビデオ。デイズニービ
デオの数々は、もはや日本の育児には
不可欠なようで、レンタルビデオでは
用が足らず、どこの家にも必ずと言っ
ていいほどある。

そういう状況の中、おもちゃについ
たミッキーマウスのシールをはがし、お下
がりのプーさんのTシャツをしまい込

み、ビデオは国産のみ、私はせつせと
デイズニーの我が家への侵入を拒んで
きた。

しかしついにその日はやってきた。

息子が言ったのだ。

「お母さん、デイズニーランドに連
れていってよ」

絶句する私の横で夫はすぐさまいま
まいた。

「おまえ、あそこはバカバカしく混
んでるぞ。やめとけ、俺ア絶対行か
ねえぞ」

「でもさ、クラスで行ったことない
の僕だけだったんだよ」

「何が悪いんだ？ 人が行くから行
くのか？ 何でも人と同じならいいの
か？」

「僕が行きたいんだよ。面白いか面
白くないかは見ないとわからないと思
う」

（二年生にしてはとってもしつかり
した意見である）

「面白くないぞ。だって混んでてそ

れどころじゃないぞ。それにお前、デ
イズニーなんて見たことないだろう
が」

「あるもん。お友達のうちで見たし、
こないだ小学校でもピノキオ見たも
ん」

「……学校にまで入り込んでるのか
デイズニーは！ そういうの見せる教
師も安直だよな。ちよつと意見してや
るか」

いけない、息子の目にきらきら涙が
盛り上がる。私の心もキューツと絞ら
れて……ここまでだ。もう夫への義理
などかなぐり捨てて、私は言ったのだ
った。

「どんなところなのか見てくること
にしよ。あっちゃんとお母さんで。い
いよね、お父さん。それにね、あっち
ゃん、お父さんとお母さんが初めてデ
ートした場所はデイズニーランドだっ
たんだよ」

絶句。がっくりと夫は首を垂れたの
だった。

それでも夫は拒み続けて、デイズニ
ーランドには息子と私二人で乗り込む
ことになった。

その日は快晴で、舞浜の駅に降り立
ってぴよんぴよん歩いてるのは、息子
だけではなかった。恋人同士、親子連
れ、団体客、異国の人々の姿も目立つ。

十数年前初デートの私たちは「こんな
でかいもの作っちゃって、流行らなく
なったら悲惨だねえ」と話したものだ
ったが、東京デイズニーランドはま
ます大きく美しくなっていた。しかも
なんとという混みようだろう！ 私の想
像した「混んでる状況」の三倍くらい
混んでいる。

「お母さん、あの人風船あんなにい
っぱい持って、飛んでいっちゃわな
いかな。ねえあれが仕事？ いいよね」
息子は嬉しくてつい笑えてきちゃ
う、といった声。人込みにずるずる流
されてるこの状況さえ楽しそう。

若くて美しいスタッフは、おとぎの
国の住人のよう、皆さわやかな笑顔だ。
横文字の看板ばかりで読みにくいのが、

メインストリート・ハウスと呼ばれる屋内施設には、何やらおしゃれなお店が連なっている。それを抜けると、シンドレラ城が正面に現れた。

「うわあ、お城だ！」

おお、樹木が前来たときより大きくなっている。何だか本当のお城みたいだ。

「ジェットコースターに乗ろ、お母さん。宇宙空間をグルグル回るの、何て言うんだっけ？」

「スペースマウンテン、じゃない」

「どこだろう、エートエート」
息子は入口でもらった地図を広げて探し始めた。

スペースマウンテンは、一時間半待ちであった。夫の「ほらみろ！」という声が聞こえるようだ。

何でも、あらかじめ予約もできないらしいが、その予約券を取るのにもたっぷり並ぶらしいし、今からだと午後になるとか。もういつそ並んでしまおうと腰を据えた。

そういえば、あの日も最初にこれに

乗ったんじゃないかった？ あのときもずいぶん待ったけど、恋人たちにとって待ち時間は何でもなかったのだから。辛かったという記憶はない。息子はキョロキョロしたり、パンフレットを眺めたり忙しそう。ようやく建物の中へ。

懐かしい空間だ。へえ、変わってないんじゃない？ 「SF映画みたいだね」と二人乗り込んだあの日を思い出して、何だかキュンとした。隣では「すげえ」「ねえ、怖いと思う？」「帽子はとったほうがいい？」などと、興奮した息子。いざ宇宙へ。

「ギャー！」
暗闇の中、これでもか！とばかり、右に左に振り回される。やはりこれには乗るべきではなかった……。ふらふらと席から立ちあがりながら思った。あの日はきつと「ギャー」じゃなくて「ギャー」だったろう、と。

ところで、びっくりしたことがある。大通りの歩道がずーっと、レジャー

シートと荷物で埋め尽くされていたことだ。寝ているお父さんやいちやついているカップルもいる。なんか貧乏つたらしいことこの上ない。

どうやらこの通りはパレードのルートで、このシートは見物の場所とりらしい。

だけどまだ四時間も前だぞ。そこまでしていい席で見たいのかと呆れる。いやどうもそれだけではなさそうだ。そうか！ これは海水浴の基地と同じだ。

「俺いいよ、ここで荷物番してる」

「私買い物したい」

「エー、『トゥーリントン』に行こうよお」

「じゃあ別行動ね」

てな感じで、ここは集合場所も兼ねるのだ。そして皆でパレード見物。これだけ混んでる日曜のデイズニールン、合理的ではないか！

だけど、敷物の上でくつろぐなんて、こんなのオープン当時は許されなかつたのでは？ 私たちは貧乏な学生だつ



たけど、律儀に精一杯アメリカンでポップな若者を演じていたぞ。おにぎりも水筒も持ち込んだんじゃないけなかったでしょ？ どうなっちゃったんだ？？？

手をつないで、この『夢と魔法の王国』を巡りながら、あの日私たちは話した。

「なーんか、きれいすぎて胡散臭いよね。アメリカ人にはしっくりくるんだらうか？」

「俺なんかデイズニーなんて無縁の子ども時代だったしな」

「そうだよな、私もほとんど見たことないや。ピーターパンも白雪姫もシンデレラもメリーポピンズも、デイズニーのはちよつといただけないな」

「男がなあ、みんな歯がきらきらしてて」

「お姫さまもなんか、たしなみに欠けるって感じー。くねくねくねくねして」

西部開拓時代やインディアンの暮らしは、遠いアメリカの話で、それがこ

こ浦安にあつて、日本人が行列してるのは妙な気がした。こういうのがオシヤレなんだからね！と異文化を押しつけられ、ぎこちなくそれに乗って踊るのは居心地が悪かった。

バブルも後半だった。恋人たちは皆、クリスマスにはレストランを予約し、ブランドものを贈りあうような時代だったけど、私たちは身の丈や体質に合わないそういうものから、少しずつ卒業していったのだった。そうして、私たちのデイズニーランドでのデートもあれきりだった。

好きとか嫌いとかの話以前だ。生まれたときからデイズニーキャラクターのついたよだれかけをして、ミッキーマウスのおもちやで遊び、デイズニービデオで育っているのだ。ここはまさしく聖地であろう。本当に『夢と魔法の王国』なのだ。

あのころデイズニーの魔法にかかった若者たちの子どもが、育ってゆく。親子でアトラクションに長い列を作つて、膨大な買い物をして（ここデイズニーランドではバンバンお札が消えてゆく仕組みだ）。彼らはやがて、親とではなく恋人と、そしていずれは夫



● デイズニーランドふたたび

婦となり子どもを連れて、また通い続けるんだろう。何という巨大な市場なんだろう。デイズニーランド側だって、そういう家族連れがレジャーシート敷いちやうことくらい、目をつむることにしたんだろうな、きつと。

言つとくけど私はもう来ないぞ、とシンデレラ城に誓う。

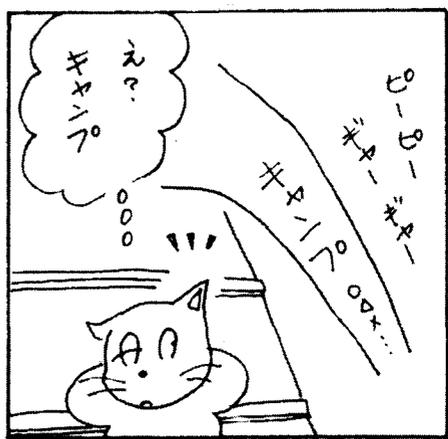
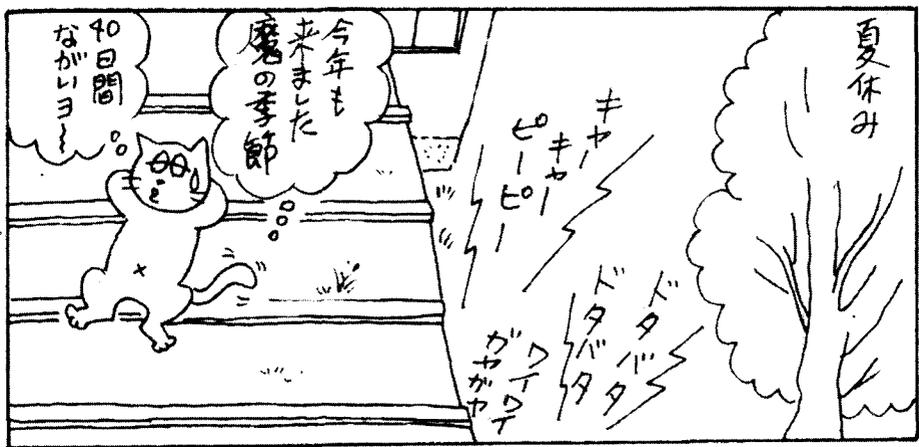
しかし、である。

さらに一時間待つて「スタージェット」に乗り、四十分待つて「カリブの海賊」に行き、二十分も並んで買った（千円もする）ポップコーンを頬張りながらパレードを見る息子は満足そうだ。手に持つてるのは、ミッキーマウスの扇風機（千六百円）、そう、節約主婦の面目丸つぶれ、皆私がい与えたものである。ああでも、久しぶり、息子と手をつないだのって。

「楽しいねえお母さん、また来ようね」
私たちもやつぱり魔法にかかつてしまったんだろうか？

（え・海砂）

これが
子供の生きる道
 栗田 ちかみ









失業騒動

川崎市 沖田美子 (47歳)

私は五月末で六年間勤務したC社を退職し、六月から失業保険を受給する立場になりました。つまり、会社都合で解雇されたことになりました。いままでずうっと働く母をしてきて、時間が足りないのがあたりまえに生きてきて、そして今、毎日が日曜日の身分になりました。失業保険をいただくことになり、求職活動を始めたのですが、

どのような仕事に就きたいか、どう生きていきたいか、何をだいたいにしていきたいか、自問しているところです。やっと長いこと夢にまで見た長期休暇が手に入ったと思えばいい、あせらなくていいと自分を励ましているところでもあります。

C社で働き始めたのが私が四十歳になった日の四月十三日でした。それが

ら六年間、とても居心地よく、楽しく働いてきました。

総務業務の事務方は私が入社した当初は四、五人で、常勤コンサルタントは十人くらいだったと思います。

入社して三年くらい経ったころ、事務方の担当は七、八人に増え、常勤コンサルタントも二十人くらいに増えていました。待遇も非常によく、気持ち

よい若者に囲まれて、とても快適に働いてきました。

私の仕事はクライアントに提出する書類を整えることが中心になっていました。中央アジア、東南アジア、アフ



リカ、中近東、中南米の国々のプロジェクトの提案書や報告書の作成に次々に関わりました。私はその内容を書くわけではありません。必要な図表を作成したり、形式を整えるだけの仕事で

す。

前の職場であるA翻訳会社での仕事は、印刷の部数が何百、何千で、ほんのわずかな校正ミスが多大な損失の原因になったりするのにくらべ、C社の仕事は十部からせいぜい五十部くらいの印刷なので、それほど神経質に校正する必要がなく、気楽だと思っていました。とても恵まれていると満足していたので社内で唯一のおばさん社員として人の嫌がる仕事や、面倒な仕事はすすんでやっていたつもりです。

十二指腸潰瘍になる

ところが、三年ほど前の健康診断で十二指腸潰瘍と診断されたところ、自分でも何がストレスになっているのかわからなかったのですが、とても憂鬱で、いらいらしていました。

アメリカ人のブラウン取締役は指示が明瞭で、とてもわかりやすい上、私はその指示通りに仕事をすればよくて、私が作業したものが指示通りであ

るかどうかも自分で確認するので気が楽でした。それに反し、もう一人の黒川取締役の仕事は、私とその指示通りに仕事をしたかどうかを黒川氏自身で確認しようとしないうちに、とても腹が立っていたのを覚えています。

何百ページという報告書の体裁を整えるのですが、例えば、フッターとヘッダーが指示通りになっているかどうかという簡単なことでも、細心の注意を払って指示通りにしたつもりでも別の目で確認をしてもらえると安心です。私の作業はパソコンの調子次第でうまくいったりいかなかったり、フリーズするたびに再起動するのに時間がかかります。しかも提出期限だから今週中にとか、今日中に仕上げてくれとか言ってプレッシャーをかけられていることなので、最終確認はして欲しくて中途の終わったところまでプリントアウトして持つて行っても、すぐに返ってきて、しかも何も見てない、ということにとても腹が立ちました。指示もアバウトなら、最終確認もアバウト

なのです。

ひょっとすると私は、できないことを要求されていると感じて、憤慨していたのかもしれないと思います。コンサルタントでもない私が、一人で作業して最終確認までするということが、どだい責任の範囲を超えています。黒川氏に、作業をする私に任せきりにしないで、ともに詳細の最終確認をしようとする姿勢を示してもらいたかったのだと思います。それとも私はそんなにたいそうなことを要求などされなかつたのかもしれない、すべて私の都合だったのかもしれないとも考えられます。つまり、頼まれた以上のことをしようとしてしまっていたのかもしれないません。

いずれにせよ、クライエントが外国の銀行で、報告書が英語の場合、若いアメリカ人のコンサルタントのアランさんやジョンソンさんの最終確認で、やっと提出した報告書が何件かありました。

そのころ、会社の中でちょっと私の

態度が目には余るということに注意を受けたことがあります。でも、扱いは厚遇されつつおりましたし、私も多少無理をしてもできることはなんでもしてきましたし、同僚のみなさんとも仲よくやってきました。

パソコンの進歩と普及にしましたが、仕事の内容も変わってきました。スキヤナーの進歩で入力作業はほとんどなくなってきましたし、パソコンがある程度、使いこなすコンサルタントが増えてきました。

それでも最終的に、それぞれのレポートの体裁を整えることを任されていたし、ちよつと手の込んだ図表を描くことも依頼されるので、仕事量にバラツキはあるものの、年々私の仕事の需要は増加し続けていたのではないかと思います。退社時間は急ぎの仕事がなければ五時とか五時半とか六時ごろで、急ぎの仕事がある時は、かなり遅くまで残業していました。

若い独身者の同僚が多く、同僚同士でお楽しみ企画がいろいろあって、お

ばさん社員ながら、時には子連れで、結構参加させていただきました。おいしいものを食べよう会とか、ただの飲み会だとか、サルサを踊ろうだとか、テニス大会とか、山小屋パーティとか、昇仙峡へのバス旅行とか、ゴルフコンペとか、ボーリング大会とか、ヨットのクルージングとかもありました。

始末書事件

十二月の下旬のある朝、出社した途端にその日の便でチュニジアに発つはずの社長が会社を出る時間だということに、沖田さんちよつと、ということに会議室に呼ばれました。まあ、そこに座りなさい、ということ、始まった話は、その前日の黒川氏と私とのやり取りの問題でした。

その前日、黒川氏が、「今週は忙しいですか」と尋ねるので、「はい、忙しいです、今週いっぱいブルガリアの最終報告書を提出することになっているし、タイに発する人の準備の

書類もあるし」と申しました。

「二日、いや、半日でいいんだけど」というので、「モノは何ですか」と尋ねました。「いや、二、三百頁くらいのレポートなんだけどね」ということです。「ちょっと待ってください、二、三百頁ですか、半日できるとか言わないでいただけませんか、どうせ半日ではできないのだから。ま、とにかくモノを見せていただかないか」とか申しました。

前日出社するとその二、三百頁のプリントアウトが私の席に置いてありました。急ぎの仕事があつたのでそれをかたづけた後、作業台でその黒川氏のプリントアウトを見てみました。ところどころに書き込みがありますが、書き込みの内容が矛盾するところも見受けられ、黒川氏がそこを通つたので、「この書き込みをすべて反映するのですか、後ろのほうの書き込みは前の部分にも反映させるのですか、矛盾しませんか、本当にこの黒丸をハイフンにしているのですか、ほかにも白丸もあ

るのだけれども」と申しました。私の言い方が立て続けであつたかもしれませんが、「沖田は文句が多い」とか言いだすではありませんか。その時に中島さんが黒川氏に話しかけたので、黒



川氏は彼と話し始めたため、書類をそこに置いたまま私は席に戻り、他の仕事をしていました。気がつくとも書類をそこに残したまま、黒川氏は去っていました。

私は他の仕事の件でブラウンさんと話していると、作業台にいてその一部始終をみていた八巻さんが、「ちょっと」と手招きします。「黒川さんが派遣の人を頼むと言っているけどいいの」と聞くので、「それがいいよ、頼んであげてよ。今ちょっと忙しいし」と申しました。

黒川氏の仕事はいったん彼の指示にしたがつて仕事を終えても、枝葉末節の変更が何度も新たに入ったりしてうんざりしてしまうのです。

その後、上田さんが黒川取締役の仕事にとりかかったようでした。私は六時に退社しました。派遣の方はその翌日から二日間来ていました。

「昨日みたいなことが今後ないようにな」という社長のお話でした。「私は頼まれた仕事をしなかったつもりはないし、説明を放棄したのは黒川取締役のほうなのですよ」と申しました。

その後、総務部長より警告書をいただき、始末書を提出するようになると言われました。何についてどう始末書を書



けと言うのよ、と思ったので、警告書
をもらって、始末書を出すようにとい
うことなのですが、なんと書けばよい
のでしょうか、と黒川氏に社内メール
でお尋ねしました。ぱくを怒らせたか

らです。という返事をいただきました。
怒らせたからって言ったって、怒る
のはあなたの問題でしょう、とか思っ
てもみたり、派遣の方に頼むように私
に頼んでくれればいいのにと思いなが
ら「派遣の方のように、私も初心にか
えてって新人のつもりで仕事に励む所存
です」というような主旨の始末書を提
出しました。

たぶんそれ以前からの黒川氏と私の
ギクシャクしたものの蓄積があつての
ことだったのでしよう。入社した初め
のころはそれほど仲が悪かったわけ
はなかったのですが、なんだか甘えら
れているような、寄りかかられている
ような感じがして嫌になってきていた
のだと思います。

一度目の始末書事件以来三か月のう
ち、一か月以上は黒川氏は出張して不
在でした。

不在はめずらしいことではありませ
ん。一度目の始末書事件以来、何事も
なかったかのごとく過ごしておりまし
た。三月中旬にパソコンが新しくなり、

今まで頭痛の種だったフリーズが少な
くなり、快適に仕事をしていました。

たぶん三月に入ったころ、私がセネ
ガルの報告書のフランス語版に悪戦苦
闘している時に、黒川氏の依頼で派遣
の方が二日ほどみえてイギリス人のセ
ムラーさんと仕事をしていました。

セネガルの件が終わって落ち着いた
ころに、セムラーさんより複数のファ
イルできてきている三百頁くらいの報告
書の目次を作ってくれないかと頼まれ
たので、パソコンの調子もよいので、
全体をひとつのファイルにして、目次
をつけました。派遣の方とセムラーさ
んとでかなりきちんとフォーマットさ
れていたのではほんの少しの手直しでと
てもうまくいきました。最近の傾向と

して、印刷物の他にPDFファイルの
納品を義務付けられることが多く、他
の件でPDFファイル納品をすること
になっていたのです、その予行演習を兼
ねて、そのファイルもPDFファイル
にしてみました。そしたらファイルサ
イズがメールで送ることのできるサイ

ズよりも大きくなつてしまったので、ひよつとしたりまたファイルを分割しなければならぬかもしれないと思つたため、黒川氏にメールで「PDFファイルにしてみたらメールで送るにはサイズが大きすぎるようなのですが、ファイルを分割したほうがいいですか」と尋ねてみました。返事は「ありがたい」というメールでした。

それから一週間経つか経たないかのことでした。プリンターに出力したファイルを整理していると、そこを通りかかった黒川氏が、「時間はあるだろうか」と私に尋ねました。私が「何をどうするのですか、……このごろやつたみたいな目次をつけてPDFファイルにするような仕事ですか」と尋ねました。すると、「いや、違うんだけどね。日本語なんだけど」と言います。それで、「何をするんですか」と尋ねましたが、そのままでした。

プリンターの出力が終わつて、席に戻ると、社内メールを受信していました。黒川氏からの社内メールで、「私

の仕事をしたくないと言うことですか」と書かれているではないですか。びつくりして、あわてて黒川氏のデスクまで行つて、「誤解ですよ、何をどうすればよいのですか」と尋ねました。すると、「これなんだけどね」と机の上の書類を指し示しました。どうやらそれは一度目の警告書をもらうきっかけになつた報告書で、十二月に派遣の方が作つたファイルのようでした。

「これにクライアントのコメントが書き込んであるんだけど、これをやって修正記録を削除して欲しいんだけど」と言います。「いいですけど、クライアントのコメントが私にわかるのですか、私の判断でコメントに対応して削除してしまつていいのですか」と尋ねました。すると、しばらく紙をめくりながら、

「自分でするからいい」と言うのです。でも、その様子が変なので、「ちよつといいですか」と会議室にきていただいて話をしようと思いました。

「私が何かしましたか、時間はある

だろうか、と訊かれて、私が何をどうすればいいのですか、と尋ね返しただけです。よねえ、なにか問題があるので「すか」と訊くと、「その言い方が悪い」と言います。

「言い方が悪いとか言われても、何かお引き受けする時にはどなたにでも、何をいつまでにどうすればよいのですか、つてお聞きするんですけれど。十二月の始末書の件についてもそうですけど……」と話をしようとする、

「まだわからないのか」とかいうことで、たぶん反省をしてないという判断でだと思つのですが、席を立つてしまふではありませんか。「それでいいのですか」と一応ひきとめたのですが、社長に言つてやる、とか言つて会議室を出ていつてしまったのです。

その後、「いま私がやっているタイプの仕事提出期限に余裕があるということがわかつたので、私、やりますけど」と言いに行きましたが、「自分でやるからいい」と言います。それで、念のため「派遣の方をお願いするので

すか」と確認しましたが、黒川氏は「いや、自分でするからいい」ということでした。

そしてその翌日、二度目の警告書ももらいました。あんまり理不尽だと思っただので、こんなものをもらったのだけれどね、とマネジャーに話しながら涙が止まりませんでした。それっきりにしています。

四月から新人が入り、さまざまなおリエンテーションがあり、やっと落ち着いた四日、総務部長より呼び出しがありました。そして、警告書をもたらしたら始末書（謝罪文）を提出しなければならぬ、提出しなければ三度目が出て、それで最後だと教えられました。しかし、私は最後を覚悟して始末書を出すつもりはないと申しました。そして、警告書の原因となったできごとについて説明しました。

「つまり、私は何も頼まれていないんですけど。黒川氏からどんな報告があつて警告書をいただくことになったか知りませんが、一方的な報告だけ

で警告書っていうのは、民主的じゃないんじゃないんですか」と申しました。総務部長には、わかりました、それで



始末書を出さないのですね、と言っていたきました。

翌日の夕方、今度は社長に呼ばれて

会議室に入りました。社長はとても心配していました。なんとか、始末書を書くなり、謝罪するなりしてもらえないだろうか、ということでした。

二度目の警告書をもたらした時、社長は海外に出かけていて留守でした。それなのに、黒川取締役の一方的な報告を受けて警告書を出したことは民主的ではないのではないですか。そして、前日総務部長に話した経緯を繰り返しました。

ただどね、相手は経営者の一人なんだよ、会社はねえ、階級社会であつて、民主主義ではないのだよ、と言われしました。

「でも、私は謝る気になれないのです。私は何も頼まれていないんですよ。何をどうすればいいのかはつきりおっしゃっていただければ、黒川氏の仕事だつてするつもりはあるんですよ。今回は何も頼まれていません。

二度目の警告書をもたらつて、嫌になつてしまいました。辞める覚悟はできています。今朝も子どもにお母さんは

仕事を辞めるかもしれないと言ってきました。辞めたら何をしようかと考えているところですか。しかし、これは会社都合になるのですか、それとも自己都合になるのですか。通勤定期が明日で切れるんですけど、新しい定期は買わないほうがいいですか」と私は言いました。

ま、頭を冷やして考えてくれ給え、と言われました。

「ご厚意感謝します。ありがとうございます。さいました」ということで退室しました。

退職して

その後一か月、何事もなかったかのように勤務を続けましたが、有給休暇もたくさん残っているんだらう、その休暇をとりなさい、と言われて、休暇をもらい、五月末日づけで退職しました。

解雇ということで、六月にハローワークで失業保険の手続きに行ってもらってきた書類で、私がどうして解雇の

対象になったのかに該当する項目は第八項目と第九項目かもしれないと思われました。第八項目とは「上司、同僚から故意の排斥又は著しい冷遇若しくは嫌がらせを受けたこと」によって退職したものの「第九項目とは「事業主から直接に退職することを勧奨されたことにより退職した者（従来から設けられている「早期退職優遇制度」等に応募して退職した場合は、これに該当しない）」です。

そういうことであれば私は解雇といふことで異存はありません。あつけないものです。人が嫌がること、面倒なことを引き受けるおばさん社員がいなくなつて、社員のみなさんは困っているだろうなと思います。私の補充のために派遣の方をお願いしているとしても、他の社員のみなさん一人一人の労働負荷は重くなつただろうな。と思うとちよつと申し訳ないような気もしますが、仕方ないですね。

失業して失つたものは仕事ですが、ありがたいことに私には家族がありま

す。夫は忍耐強く連日深夜帰宅の妻に文句も言わず、子どもの学校の提出物などのフォローもしてくれました。十年以上就労していて得たのは家族の各自の自立と生活力かな。でも、私の家事能力は失業しても一向に改善する気配はありません。

子どももこのごろやつと、家に母さんがいる生活にも慣れてきました。

しばらくは求職活動をするつもりですが、今回は就労証明書が必要なわけではないし、あせらず、どのような仕事に就きたいか、考える余裕を持ちたいと思います。他国の人々の幸せに貢献する仕事に関わってきたのだとすれば、今度は身の回りの、生活弱者に貢献できるような、福祉関係の仕事も視野に入れて求職活動してもいいかもしれないと思つています。

いままで時間がなくてあたりまえの生活を送ってきた私にはちよつどよい充電休暇になりそうです。

(え・柳沢順子)

子育てフォーラム

NMSのページ



理想の部活って何だろう

神奈川県中部 一石井しのぶ（42歳）

息子が中学でソフトテニス部に入り、毎日夕方六時過ぎまで練習し、七時ごろ帰ってくるという日々が続いている。六月になってからは、朝練習もはじまり、朝は六時二十分に起き、五十分にあわただしく家を出ていく。

この中学校の部活動は、部によって練習方針が様々で、運動部でも朝練が全くないところや、週に一度、練習が休みのところもある。休日の練習も、顧問の先生しだいでまちまちである。

ところで、このテニス部は、三年前に、指導できる先生が転勤してしまったため、ずっと休部状態だったのだが、今年、たまたま前の学校でテニスを指導していた先生と、テニスのインストラクター経験のある新任の先生がこられたので三年ぶりに復活した部である。テニスを長年指導してきたというベテラン先生は、前任校で、テニス部を何度も全国大会に連れていったという人だ。インストラクター経験のある若い先生も、自分でも試合で日本中をまわっていたという。テニスに情熱をかけた二人が一緒に顧問になったため、仮入部の時からテニス部は人気で、新入生約一四〇名のうち五五名も入部

した。新一年生のみの部だというのに、練習時間も相当長く、いつのまにか運動部の中でも熱心なほうの部になっていった。

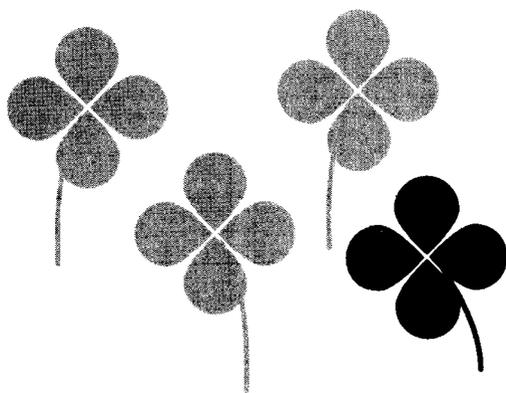
親の気持ちとしては、朝練も休日練習もない、比較的楽な部にはいつてくれたら、心配も少なくて済み、よかつたのだが、息子はたまたまはじめたテニスのおもしろさに目覚め、練習を休もうともしない。

五月末に部活動懇談会が開かれ、部の方針と練習日についての説明があったが、そのプリントを見て正直いつてとても驚いた。目標は全国大会で、せっかくの第二土曜も朝の九時から夕方四時まで練習。日曜日も一日練習の

日があつて、休みはほとんどない。私は思わず「練習日が多すぎるのではないか、土日のどちらかは休みにならないのか」と言ったのだが、「全国大会を狙うには、これでは少ないくらいである。強くならなくても楽しんで部活をやりたい人はどうぞ休んでください」という説明だった。先生がいくらいつでも休んでいいですよと言つても、子供同士の人間関係や本人の気持ちで、疲れていてもそう簡単に休めるものでもない。実際、相当疲れがみえるので、たまには早目にきり上げて帰つてきたらと言つても、子供は頑として受け入れずがんばつている。しかし、テスト一週間前は部活ができないので、一週間目にはいった今は、朝もゆつくりできて家族中ほつとしてるところだ。

はじめのころは、子供たちも先生の言葉にのせられて「みんなで全国大会へ行こう!」とはりきつていたのだが、学校の体育祭の日でも、朝と放課後に練習があつたり、土日も連続でめいっ

ぱい練習だつたりという日が続くうち、何人かはやめて他の部に移つてしまつたらしい。テニス部の女の子に「日曜練習はきつくないの」と聞いて



みたら「行つてないよ、遊びたいから」という答がかえつてきた。
女の子のほうがわりとさめているのかもしれない。しかし、息子を含めた

男子部員、約一二名は、毎週ダブルスでランキングをつけられてしまうこともあつて、お互いに意地があるのか、誰も休日に休もうとはしない。男子部員のおかあさんの一人は、塾のある日は夜中の十二時近くにやつと寝られるので体が心配だと言つていた。休日がないので勉強時間もなかなか作れず、このままで大丈夫だろうか、成績も気になつてくる。息子がテニス部にはいつてから、体のことや勉強のことなど心配がよりふえてしまった感じだ。こんな生活が二年以上続くのかと思うと少々ゆううつだ。だいたい、全国大会をめざしてほしいなんて、思いもしていなかつたのである。先生たちの意気込みはすごいが、最近、体調をくずした子がふえていると聞き、またさらに、練習方針に疑問を感じはじめている。私は、中学校の部活は、毎日楽しんで体力がつけばそれで十分だと思つている。今さら他の部に移る気なんてまるでない息子を見ながら、これだけののか考える日々である。

記憶の箱

千葉市美浜区

大野幸子



「羽田空港に国際線を……」とある大臣のコメントや石原都知事の賛成のコメントがニュースの一つとして流れたのは確か二か月ほど前のこと。もちろん、二〇〇二年のワールドカップを控え外国人等の旅客増に対応するためには当然のことであろうし、交通の便からいっても羽田を希望する人が数多

いであろうことは納得できること……。

私は千葉県に在住しているので成田空港こと「新東京国際空港」までは車で四十分もあれば着くことができる。だが空港までの所要時間や交通の便がどうのこうのと考えるほど利用したことがないのが現実。なぜならば海外旅

行への希望はあっても、その予定なるものは皆無に等しいのだ。この先、海外旅行が実現するとしても何回利用するであろうか……。

いくら空港に近いと喜んでみても先立つもの（お金）がなければ海外への脱出など無理なことは自分で承知しているのだ。だから私にとって国際線が

増えることに何の反論もないし、まるで他人事に思える。そんな軽い気持ちでその時のニュースを見ていた。翌日のニュースで再びそのことが話題となり、今度は昨日の大臣のコメントに千葉県側（新東京国際空港公団）が憤慨しているとの内容を放送していた。私はそれを見て、「そう、そうだよ！あれは一体、何だったんだろう？」そんな思いが心の中で強くはじけ散った。

今から三十五年も前のこと、当時私は高校二年生。私は佐倉の女子校へと電車通学をしていた。あのころの佐倉は成田に隣接した、まだまだ未開発の地であった。昔は城下町として栄えたなごりを残していたが、なんといっても田舎そのものであった。

上野―成田間を結ぶ京成電車は、あの日もいつも見慣れたのどかな風景の中を走っていた。私と友人三人は期末試験の最終日を終え、ホッとした気持ちで帰路へと向かっていた。窓からは初夏の緑に色づけられた田んぼや水面がキラキラと輝いている印旛沼が見え

る。私と友人達はガラガラに空いている車両の端の一角を陣取り雑談に夢中になっていた。誰かが一言しゃべっては笑い、聞いてはまた笑い、そんな楽しい電車通学を満喫していた。その車両には私達の笑い声が電車の騒音に劣ることなく響いていたに違いなかった。何の変化も刺激もない田舎への通学での唯一、楽しい時間だったのかもしれない。

電車が佐倉を出て三つ目の駅を発車すると同時に、五メートルほど離れた向かい側の座席に若い男の人が座っていることに、初めて気づいた。その男の人の腕に巻かれたタオルに目がくぎづけとなった。私の全神経は、それに集中したのだ。そのタオルに赤い血のようなものが付着していることは一目でわかった。

「ネエ、あの人ケガしているよ」

「三里塚（成田）のデモに参加した学生じゃないか？」

「そうだよ！きつと大学生だよ」

「あれ血だよね……」

私達は声のトーンを落とし小さな声で隣の友人に次々と言葉のはしごをした。その若い学生らしき人は私達の存在を知ってか、知らないでか……こちらを見る様子もないまま、顔は上を向き頭を窓ガラスにあずけ目を閉じていた……。負傷したその左腕を痛がるでもなく揺れる電車に身を任せていた。

次の瞬間、その学生を見つけていた私は自分でも想像のつかない行動に出た。私は友人達が制止する間もない早さで、その学生の前に立ちふさがっていた。

「大丈夫ですかあ……」

「……」

その学生は初めて私の存在に気づいたのか「ハッ」としたように目を開いた。その顔は疲労に満ち少し汚れていた。汚れているのは顔だけでなく……白いワイシャツも。

「そのケガ……大丈夫ですかあ」

「……」

無言でうなずき再び目を閉じる学生。

「成田の……空港反対のデモに行っ
たんですかあ？」

「……」

「なぜ、そこまでするんですかあ！ 人
のために自分の体を張るんですかあ!!」

その時、学生は初めて声を発した。

「……君たちには分からない」

その口調はあくまで、やさしく弱々
しかった。が、同時に絶望に満ちてい
た。そして、それだけ言うと再び目を
閉じた。

私はなぜだか急に悲しくなった。確
かに「なんの思想や信念も持ち合わせ
ていない田舎の女子高生に……一体何
が分かるというのか！」そう学生は言
いたかったのではないだろうか……。
私はそれ以上、話しかけることをやめ、
友人達のいる元の席へと戻った。

私の行動に啞然としている友人達も
無言となりまもなく着くであろう降り
るべき駅を待った。やがて駅のホーム
に電車はすべり込み停止をすると、私
はもう一度その学生らしい人のほうを
見て勢いよく降りた。私はその場所に

立ち、ドアが閉まり再び発車する電車
を見送った。窓越しに見える学生は相
変わらず目を閉じたままだった。

三十五年も前のこの日のあの場面が
昨日のことのように鮮明に思い出され
るのだ。なぜそんなに強く脳裡にイン
プットされてしまったのだろうか……。
ただ不思議なことに、あの学生の顔は
思い出せないのである。あの日、窓か
ら見た新緑の青さと、タオルに染みた
血の赤い色、学生の着ていたワイシャ
ツの白い色……、そして極めつけは唯
一、学生の言ったあの一言。それらが
手に取るように思い出されるのであ
る。それが、どうしてなのか私にも分
からないまま、歳月だけが過ぎ、やが
て記憶の箱にと収められ、このニュー
スを見るまでは、その箱を開くことは
なかった。

十七歳の私は、あの日以来「成田空
港反対運動である三里塚紛争」なるも
のに関心を持ったが、よく分からなか
ったのだ。成田に空港ができることは、
そんなに悪いことなのか、国の方針に

なぜ、暴力に訴えてまで農家の人や学
生までもが抵抗し続けるのか……。一
体、彼らは何を守ろうとしているのだ
ろう。農家の人々には代替地や、それ
なりの補償も提示されての空港建設案
に、なぜあれほどまで反対運動をする
のかが理解できなかった。それは、あ
くまで自分の日常とはかけ離れた出来
事ではなかった。

やがて「成田空港反対紛争」は日に
日に激しくなっていくた。当時、京成
電鉄は反対派学生の唯一の交通手段で
あったため、学校帰りの電車で多くの
反対派の学生（デモに参加した彼ら）
と遭遇することが何度もあった。機動
隊との闘いを終え帰路に着く彼らの姿
は異様な雰囲気車を車内全体にただよ
せていたのだった。闘いは彼らを疲れ
させ無言にさせていた。機動隊が投げ
たであろう「催涙弾」が衣類に付着し
たためなのか、電車に乗り合わせてい
る反対派学生以外の私達の目も、涙が
しみて開けていられないほどであっ
た。でも誰ひとりその状況に文句も言

わずに、ひたすら降りるべき駅まで黙って耐えていた……。私はこの場所と、この瞬間を彼らと共有することで自分も学生達と共に闘ってきたかのような錯覚すら覚えた。だからといって暴力を肯定した訳ではないのだが、その時、なぜだか私は大人になった気がした。今でいう「カルチャーショック」だったのだろうか。時間すらゆっくりと流れる田舎での生活の中、初めて味わうこの刺激的な体験は、私が激動的な社会と接触した唯一の機会であった。

農業を営む人達にとつて土地を失うことは何よりも死活問題、あんな巨大な物体が毎日、上空を行きかい、それにとまなう騒音……。今までの生活が一変することへの不安。先祖代々から受け継いだ土地に執着し守り抜こうとした気持ちも今になって理解できるのだった。その反面、広大な土地である成田に空港が建設され、まだ、幾つもの問題を抱えてはいるが、その後、目ざましく発展しつづけている千葉県。国その選択に反論する気もない。もし

あの時、成田での空港建設が反対派によって中止となっていたとしたら……。日本のどこかの地で同じことが繰り返されていたであろう。

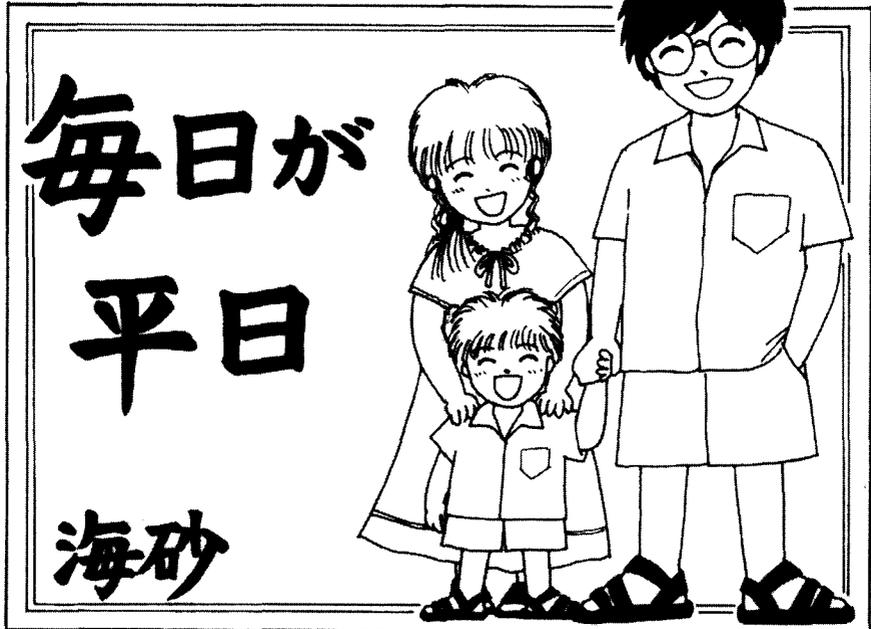
空港反対運動の拠点であった「三里塚紛争」も政府側の強制撤去という形で幕をおろしたのだった。その間、どれほどの双方の負傷者の血と涙が今の「成田空港」の滑走路の下の土にしみ込んでいることを思うと……。

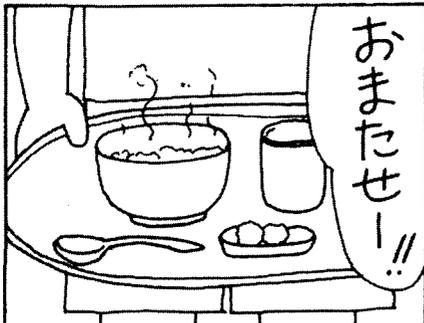
「あれは何だったろう」という気持ちだが、三十五年前のあの時に私をタイムスリップさせた。

「羽田を国際空港に……。」という、いとも簡単なコメントに、多くの犠牲のもとに開港したであろう「成田空港」への、千葉県側の気持ちに同感できたのは私だけだったのだろうか。

三十五年ほどの月日が流れ、これらのニュースをどこかで目にしたのであろう彼らは今、どんな気持ちでそのニュースを見たのか、その思いを知るよしもない。







おまたせー!!



じゅわんじゅわん
じゅわんじゅわん

ありがたい...
いただきます...
おいしい



うん...
ほんと、ほんと。
お母さんが
お料理を
作ってくれた

えん??
ほんと?!
やったまー
ほんとに
おいしい??



本当においしかったよ
このおかゆはどんな菜おじ
きと一番よく効くね!!

とりあえずこのことは
おいておいて.....



お
ガラガラ



ドバン
ガッシャーン
ガッシャーン

あ??



だ...
大丈夫かなあ??

ドキドキ



いや〜母子感...

私も ひとつ

ホンネを書く

千葉県船橋市 祥 まゆ美

人とケンカのできない気弱な性分。口から出るのはあたりさわりのないことばかり。でも文章でなら、思ったこと言いたいことが書ける。創作以外、ウソは書かない、自分を大切にしたいから。思いのたけを書けば心が晴れてくる。だから、手紙もママに書く。友人知人は迷惑かも知れないが、電話で話すのはつかれるので、もっぱら、書きまくっている。めったに返事が来なくて淋しいけれど……。

アボカドの受難

仙台市泉区 馬場紹美

ゴミ箱に捨てることをためらうくらい、存在感のあるアボカドの種。昨年、発芽させる方法を知り遊び半分でやってみた。一か月ほどで芽らしきものが出てきた。厳しかった冬も越え、南生まれの彼は弱々しくも何とか生きています。

しかし、私は何と罪深いことをしてしまっただのかと後悔している。アボカドは本来、太陽の光が痛いくらいのもので、もの凄く大きな木に育つのである。気の毒なことをした。

手作り絵本

埼玉県所沢市 鈴木和子

娘の誕生日に、手作りの絵本をプレゼントした。常々、我が家の柴犬の太郎くんの絵本を書きたいと思っていた。

イラストがうまく描けないのでどうなるかと思ったが、「タローくんシリーズ」として五つのお話を頑張って書きあげた。

母として何かを残してあげたかった。そのひとつが手作り絵本で、ささやかな娘への思いをこめた贈り物。

演歌のヒロイン

愛知県瀬戸市 武藤徳子

半年もの確執を経て、やっと雪どけ状態になれた息子と買物に出た。帰り際「五分待って」と言われ車に戻った。数分後ドアを開けた息子が「これ……」とさし出したのは、一輪のカーネーション。今日は母の日！涙でうるうるしながら、母親って踏まれても踏まれても子どもにも身も心も捧げ尽くす女だとわかった。まるで演歌！煙草の吸い殻で嘘がわかるのも、膝が重さを覚えていられるのも母さんなんだよ！

私も経験あり

神奈川県藤沢市 本間美恵

私もセールズ電話で悪い思いをしました。「結構です」といったら「私がしゃべっているんです」と言うのです。その口調の強さにたじたとりました。私の場合はおまけに電話をとって「ハイ」というとガチャンと切れること。主人が病院へ行ってる時にかぎって墓石、墓地のセールズ電話がはいり、実にイヤな思いをしています。

リラの花 桜の花

静岡県浜松市 鈴木佳子

フランスに行くたびに感じていることが、詳細に記され、とつても嬉しくなりました。

先月の時は、ブルターニュのことが書かれていました。娘一家はブルターニュに暮らしています。ブルトン語もときどき言ったり、春に孫が誕生したので、フランス語、日本語も語りかけているそうです。しつめの厳しいフランスが大好きな娘は、日本の文化もとり入れた育児をしています。日本とフランスの懸け橋になるように！

「母の日」に

山形県山形市 加藤智恵子(70歳)

母の日に娘が大好きなバラの花束を持って来てくれた。そして「貰うことばかり考えてないでね」と言い残し帰った。「お返しを……」と言うのかと少しムツとした。だが私にも九十二歳の母が居ることに気付いた。昔はこんな習慣がなかったから花を贈った記憶はない。

私は娘に言われたことを理解し、恥じ、庭に咲いている特大のボタンの花一輪を花束にして、バスに乗り込み母に届けたのでした。

鳩の着物と私

愛知県春日井市 伊藤てる子

二九〇号のグラビアに、私も家族が掲載され恐縮している。「若き日の父と母」の私の着物姿、娘が「この着物見せてっ」「あなた達をお世話くださった〇〇様のお孫さんの守胸着にするためにあげたの」「フーン！」たった一枚あったこの写真もアルバムから消えていた(娘が持って行った)。グラビア掲載によって、ズングリムツクリな私の若い日のスナップが戻り、わいふに深謝している。

子育ての矛盾!!

東京都新宿区 林 直美

アンケートに答えた。ホツとする時は？「二連の家事が終わつて、家で静かに一人でくつろぐ時」癒される時は？「ただいまー」と元氣よく帰ってきた子どもの笑顔を見た時」一人になりたいと思いつつ、いざ一人になると、子どもの顔を見たいと思う、複雑な私。親離れもまだだけど、それ以上に子離れできない私。大阪小学生殺傷事件に胸が痛い。

美空ひばりに似てる

東京都足立区 永田道子

美空ひばりの十三回忌のことで今、テレビで美空ひばりが絶唱している。私はふと青春時代のことを思い出した。それは会社の先輩にいきなり「あなた美空ひばりに似てるけど、あの顔がよくないね」と言われ唖然としてその人の顔を見つめたことである。

でも、現在もなおひばりの映画や歌のビデオが発売されている。偉大な歌手に似ていると言われたことは光栄なのかしら。

お姑さん、ごめん

栃木県宇都宮市 真野由美子

夫の両親と同居することになった私に、同居の先輩、友人Mがアドバイスをくれた。

「ムツときたときは、思い切りムツとした顔するといいよ」

なるほど、お嫁さんだからっていつもニコニコしてする必要はないのね、と納得。

そして三か月、「おかげでうまく行ってるよ」と言うとき、Mは慌てて、「あのねえ、ムツとした顔は陰でこっそりするの！」

パートタイマー

横浜市港北区 森田章代

「わいふ」の読者になって一年。何より真剣に読むのは再就職に関する投稿だ。筆者の方々の「ちゃんらんぼらんなパート」「しがないパートの身」の言葉に胸が痛む。私自身、パートタイマーだから。私は今のパートの仕事を楽しんでいると言えるが、それはパートならではの自由時間に「学ぶ」という小さな灯りがあるからこそなのだ。三十代後半の主婦はどこに「将来」を見つけられるのだろうか。

エロジー? エロジー?

神奈川県藤沢市 臼井優子

生協で買物をし、袋詰めをしながらふと隣のおばさんを見てびっくり。トレイにラップ包装の商品をひとつひとつ開けて備えつけのポリ袋に移し、トレイは回収ボックスへポイ。うなぎのタレでベトベトのトレイもそのままボックスへ。おまけに個別包装済みの日用品やどらやきまでひとつひとつポリ袋詰め。その人の周りだけ別の空気が漂っているような感じがしました。

「リラの花 桜の花」終了に寄せて

東京都三鷹市 林 夏子(46歳)

桜の花に始まり、リラの季節に終わった。素女さんの半生記、毎回楽しみに読みました。男女、人種、家庭、子供、宗教などの問題を真摯にまた誠実に綴られ読み手を魅了しました。とりわけ、最終回は、この連載の締めくくりにふさわしく、桜とリラとの因縁をからめたみごとな筆の運びでため息が出るほどでした。それにしても、信仰をもつに至る経緯は、人様々なのですね。

母とつて

東京都世田谷区 太田啓子(42歳)

運番の仕事を終えて家にたどり着いたら、七時四十五分になっていた。
「今日のタメシどうすんの?」と聞く息子に、「これから大きいそぎで作るよ」と答える私。
「そうか。仕事から帰って来たばっかりなのに大変だね。悪いねえ……」
その一言に、十五年間の子育てのすべてがむくわれたと思った。

将来の夢

大阪市住之江区 バセダカオル

「ボクは大きくなったら、サッカー選手になりたいねん。ママは何になりたいん?」と息子がきいた。うーん、ママはもう大きくなっちゃってるんだけど、どう説明しよう?
「ボク知ってるで。ママはお姫さまになりたいんやろ?」と上の子が言った。あらら、お姫さまとは?! 子供ってファンタジーの世界に住んでるんだ。いつまでこんなこと言ってくれるのかな?

ジェンダーフリー

東京都世田谷区 後藤 晶(42歳)

シンプルな服を着たい小学生の娘といっしょに「男児服」売り場でTシャツを選ぶ。同じサイズ表示でも「女児用」より「男児用」がかなり大きめに作られている。色やプリントも、まだまだ違いが一目でわかる。
成人用も、革靴など男性用は大きめ、女性向けは少しでもほっそり見えるようにとデザインされている。あたりまえのようだけれどなぜかしら、と思う。

ひとりひとり違う。 でも一緒に考える。

さまざまな社会の動きを伝えている新聞です。
結婚する。しない。子どもがいる。いない。年齢の違い、環境の違い、立場の違い、ひとりひとりがみんな違います。
でも、地球のこと、この国のこと、家族のこと、いろんなことを一緒に考えたい。



WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL



ふえみん婦人民主新聞

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-31-18
TEL 03 (3402) 3244、3238 FAX 03 (3401) 3453
Eメール femin@jca.apc.org URL <http://www.jca.apc.org/femin/>

◆大阪支局
〒530-0041 大阪市北区天神町3-10-8-404 TEL&FAX 06 (6356) 0778

見本紙
送ります

プランケット版4ページ 毎月5日・15日・25日発行 購読料：年間9,000円・半年4,500円(送料共)

「母と子」8月号 (定価500円/送料68円)

〈今月の視点〉 見直したい学校文化

多様な価値世界を学校文化の中に (後) 汐見 稔幸

—80年代からの学校と教育学の呻吟—

アメリカ便利 地域の学校って何のこと? 山本 由美

子どもの権利条約を考える 山田 雅康&編集部

倫理とは何かを考える (その2)

これからの教育への期待と不安 巨理 歩

「母と子」

4月増刊号

定価1050円(送料84円)

編著/久松英保・半田 博

21世紀の母親と子育て

—「生きる力を育む」ための14章—

「母と子」

6月増刊号

定価1050円(送料76円)

校長の挑戦 (青塚 武司 著)

—腎不全を抱えた小学校長の奮闘記—

203-0054 東久留米市中央町5-4-8 電話0424-74-9125 母と子社

東

京は空梅雨で、せつかく買った雨水を溜めるタンクも、一杯になったのは二度ほど。桶を金ノコで切り器具を取りつける。溢れることはなく余ったら下水に流れる仕組み。

植木鉢と小さな池に使っている。もつと有効に雨水を利用したい。シオカラトンボが卵を生みつけ、鳥も水浴びにきた。雨よ降れ！ (望月)

先

日、父の七回忌を行ないました。六年とは早いものだとつくづく思います。その間に父の兄弟は、みな父のもとに逝ってしまいました。法事後にそれぞれの子供達が集い、話をしたのですが、出てくる話
は不況、リストラ、息子の進学、太りすぎに高血圧等々、あの世から父たちは、どんな思いで見ているのでしょうか。 (成井)

い

つの頃かエスカレーター
の右側一列は歩き専用と
なった。じつと立っていると後
の人が舌打ちして強引に追い越
していく。駅では急ぐ人のため
に仕方ないと譲りましょう(大
江戸線には「エスカレーターは
歩くために設計されていません」
と貼紙がでた)。他の場所でも暗
黙の了解のように整然と左側一
列に並んでいるのを不思議に思
えてならないのは私だけ？(野村)

出

石焼の、その店に入った
途端、私は固まってしま
った。すべての器の前に「さわ
るな」の貼り紙。壁には「見る
だけの客はさわるな」とある。
おそるおそる「買うつもりなん
ですが、さわってもいいですか」
とあるじに問うとムスツと頷く。
小鉢を買って外へ出て、連れ
と大笑いしてしまった。それに
しても透きとおるように美しい
白磁であることよ！ (山本)

あ

る新聞に、中南米の国コ
スタリカの学校記事が載
っていた。多くの子供が国の大
切な輸出品であるコーヒーの収
穫を手伝うため、休みは12月か
ら2月までであるという。また、
大人たちの大統領選挙に合わせ
て、小・中学生も大統領選出の
模擬選挙をやるらしい。なんで
も、国の政治に参加するという
大切なことを小さい時から学ば
ためだそうだ。素晴らしい教育
ではありません？ (万波)

仲

間と天竜川を下った。去
年下ったときは、すこぶ
る調子がよく、一度も沈しなかつ
た。今回はちよつと大きな瀬
で沈した。ロールで起きるため
水の中でパドルを水面に出そう
とするが、強い波に押さえられ
て、しずんでしまう。これはな
んだ！ パドルが水面に出なけ
れば起きあがれない。三度試み
たがだめで、カヌーから脱出し

と

た。悔しくて夜も眠れない。(水落)
てもふしぎなことなのだ
が、投稿の中に原稿用紙
の周りの余白を切り取って、中
のマス目だけにしておくものが
ある。今号ではご丁寧に横と下
を全て切り除き、上をアーチ型
に形をつけて来たのがあった。
余白は編集のさい赤字の書き
込みをするスペースで、絶対必
要なものなのだ。切り取ってき
た人は容赦なくボツにする！
それにしてもなぜ？ (和田)

フ

ランスから浅野素女さん
が里帰り。夏の一か月、
上の坊やを日本の学校へ入れる
ためとか。朝練なんていうクラ
ブ活動にもやすやすと溶けこみ、
日本語の授業もやすやすこなす
逞しさには舌をまきます。
それにしても二つの文化の狭
間に育つ子どもを育てる親の努
力はいへんなもの。ただ頭が
下がります。 (田中)

「ファミ・ポリテイク」より

●都議選がおわって「自民勝利」とマスコミが書き立てています。いつものいい加減さで、まったく腹の立つこと！

しっかりと数字を見てほしいのです。自民党の得票は前回より約五%しか増えていません。当選候補者も五十三人で、改選時の五十二人よりは増えています。これが「勝利、勝利」とわめくほどのものでしょうか。

●ただはつきりしたことは、共産党と社民党の凋落。そのなかから見えてきたのは、「無党派浮動票」と言われているものが、これまでこの二党にかなり流れ込んでいたらしいという現実です。自民に対する反感からその対極にある政党に投票していた人がかなりいた。そして小泉人気のもと、今度はその票が自民にもどった、と見るのが一番自然ではないでしょうか。

●それが証拠にきちんとした政策のもとに活動してきた生活者ネットは全員当選。このことの意味の重さをおかみ締めしています。参院選でこれがどう働くか。興味津々です。

NMS研究会より

●大阪で起こったおそるべき児童殺傷事件。容疑者が精神を病んでいたかどうか？が問題になっていますが、彼は確実に「ふつうの人」だと思っています。

●世の中にはいろいろの人間が生まれてくるものですが、生まれつき異常にプライドの高い子も生まれてきます。昔だってそれは同じことですが、現代日本の特殊性は、その子たちに「自分は天下の王様だ」という潜在意識が赤ちゃんのときに強烈に刷り込まれること。しかも成長するにしたがつて、それが否定されていくということ。

とくに子どもが「よい成績」をとれない場合、親からもそして学校からも否定されることが増えて、子どもの心には恨みが蓄積されていきます。「王様」と思っていた心に増殖する恨みの深さは測りしれません。●犯罪に走る若者たちが口ばしる「有名になりたいたい」という言葉は、彼らの潜在意識を見事に表しているではありませんか。この手の犯罪がこれから増えていくことはたしかです。

老人ホーム情報センター便り

最近お元氣な人から情報をほしいという申し込みが増えた。先日も五十八歳の女性から、将来夫と二人で入居できる有料老人ホームの情報が欲しいと相談があった。その人はすでに、かなり多くの情報を集めていた。こんな若い年齢で多くの情報を集めているのは珍しい。

老人ホームに入居するのは、ズーッと先と思っせいか、多くの人が情報を集め始める時期が遅い。

将来老人ホームに入居しようと考えているなら、まだ体力、気力、判断力、行動力のあるとき、自分と相性のよいホームを選んでおいたほうがいい。判断力や行動力がなくなつてからではよい選択はできない。一度の体験入居でくたびれ果てて、もうどこでもよいから、入居してしまおう、となつてしまいがちなことから。

●無料電話相談 毎週木曜日

●面接相談も受け付けます(有料)。

電話でご予約下さい。

TEL 〇三―三三三―五二二八五四

特集テーマ

二九三号(十二月一日発送)の特集テーマは「私の「別れ話」ヒストリー」です。

若いときには、「出会い」も多ければ「別れ」の数もそれだけ多いはず。

女をものにするのはたやすいが、うまく別れるのが難しい、などと豪語す

座談会 私も言いたい

二九三号のテーマは「私のお国自慢」です。

ふるさとの山はありがたきかな、と石川啄木は歌いました。誰にとってもふるさとはなつかしいもの、それぞれのお国のよいところを自慢し合ってみ

私の意見・あなたの意見

二九二号のテーマは「新しい歴史教科書をめぐって」

現在議論がさかんですが、残念なのは、たいいていの場合、その内容がパターン化していて、新鮮味に乏しいのです。そこで「わいふ」の読者なら、こ

るドンファンもあつて、恋愛の果てに相手を捨てるのは男の側に多いように思われています。しかし実はどうしてどうして、女のほうが未練なく相手を捨てることも多いのです。

深刻な別れ話もあれば、こっけいなものもあるかも知れません。ましよう。

東京なんて、騒音、人混み、空気汚染と一つもいいところがないみたいですが、それでもここで生まれた人間は、「便利で何でもありの文化芸術都市」などと喜んでいるのです。

お国自慢の心理はこんなもの、ハタの教科書をめぐって、目のさめるような意見を発表してくださるのではないかと思います。

教科書を読んでいただくかねばならぬのがいささかネックですが、図書館でも注文なさって、目を通してからあなたのご意見を寄せてください。

あなただけのユニークな「別れ」のヒストリーを語ってください。ただし「生木を割かれた」式の別れではなく、自発的な別れを語っていただきたいのです。でなければ「悲恋のもの」になつてしまいますから。

字数 四千字前後 締切 十月十日

から見たらばかばかしいようですが、そこがふるさとの尊さ、ありがたさでしょう。大いに自慢をしていただきたいと思えます。

日時 九月十日(月) PM二時～三時半
場所 わいふ編集部
申込 八月末日までに電話で

「歴史」をどう解釈するかというあなたの意見を盛り込んでもちろん結構です。かなりハードなテーマではありますが、どうか挑戦してみてください。

字数 千字前後
締切 八月二十五日

募集します

きまり

定期購読を申し込まれている方はどなたも投稿できます。
投稿の前に以下を必ずお読みください。

◆「ムラリア」わが家の歴史写真

どこの御家庭にもある古い写真とその説明をお寄せください。「父・母を語る」「子育てのころ」などのテーマにそってでも、ただ古い写真を並べても結構です。

お申し込みは電話で編集部まで。

◆特集

毎回テーマを設定しています。一四九ページをこらんください。

一六〇〇字のコラム

(どのコラムも字数は目安で、多少長くても内容がよければ掲載します)

◆エッセイスト・クラブ

キマった文章、豊かな内容の随筆をお送りください。

◆ズバリ一言

オピニオン、評論を。独自の意見で。

◆家族のスケッチ

同居、別居を問わず、あなたの家族のことをお書きください。

◆子育てフォーラム

おさない子、思春期の子、どんなときも親にとって子どもの存在は気になるもの。あり

のままの関係を描いてみませんか。

◆ワーキングライフ

あなたは、どんな働き方をしていますか。さまざまな仕事の喜びや苦悶物語を。

◆夢これに夢中

人生八十年時代。趣味その他、仕事以外に生きがいを持つ方も多いはず。あなたは何に夢中ですか。

◆フリートーク

どんなテーマでもどうぞ。どのコラムにも当てはまらないテーマの自由なコーナー。

八〇〇字のコラム

◆あなたへスマッシュ

本誌の投稿や記事についての感想、意見を載せます。何号のどの投稿に対するものかを明記して。

◆ことばでハッピー

言葉の使い方はとても難しいですね。時には人間関係をこわしたり。でも発想を変えて工夫することで、お互いの関係をよくすることも可能。失敗談も含めて明るい話題を。

◆パソコンワールド

急速に普及し始めたパソコン。楽しんでい

る人、振り返られている人、体験談を。

◆読んでよかった

読書感想文のコラム。どんなジャンルのものでも結構です。著者・出版社・出版年月・定価を書くこと。本文は七六八字。

四〇〇字のコラム

◆笑える!

嫌な話題の多い世の中。思わず笑ってしまった楽しい話を。

◆私の意見・あなたの意見

賛成か、反対か。一四九ページにテーマを載せています。皆さんの率直なご意見を求めます。

その他

◆私もひとこと(一四六ページ参照)

どんなことでも気軽にお書きください。

◆わいふネット(一四六ページ参照)

教えて欲しい。聞きたい! それに対するお答えも。読者参加のQ&A。

◆情報コーナー

お知らせ、募集など。要点を漏れなく整理してお寄せください。(見出し共で一四字二四行にまとめて)

投稿の

◆特別寄稿

字数自由。どのようなジャンルのもので結構。本誌に適當と思われるものは掲載します。出版社に紹介することもあります。(ただし詩、短歌、俳句を除く)

◆コミック、イラスト、写真

一度作品をお送りください。本誌に合うものであれば依頼したいので。

注意

- 原稿はお返しできません。
- 投稿は一人一篇。ただし、「あなたへスマツシユ」「読んでよかった」「私もひとこと」「わいふネット」「情報コーナー」とはだぶつても可。
- 締め切りは原則として偶数月の二十五日。郵送で当日必着。(読みにくいので、ファックスではお送りにならないようお願いします)
- 他誌との二重投稿はお断りします。
- 写真や、イラストを用意できる方は原稿とあわせてお送りください。
- 誌上での匿名、ペンネーム使用可。ただし

いくつものペンネームを使い分けるのはご遠慮ください。

●掲載を希望しないお便りは「私信」と断り書きを。

●投稿は多少添削することがあります。

●原稿の最初に次のようにお書きください。

原稿用紙は必ず開いたまま右上一カ所を留める
ペンネーム・匿名希望の方は明記

タイトル 本文……	コラム名 ペンネーム・匿名 住所 会費番号 本名 電話番号	年齢 なくても可
------------------	--	-----------------

(1)

ページを明記
(場所はどこでもよい)

匿名の方は住所を
載せるかどうか明記

●四〇〇字詰原稿用紙に縦書き。

●ワープロ打ちも二〇字×二〇行を一枚に。

へあて先〒162-0062 新宿区市ヶ谷加賀町二一五―二六

わいふ編集部

投稿のきまり

編集集だより

◆前号の座談会「老後は子どもの世話にないたくない」では老人ホームに入りますか」ですが、老人ホームに入りたいという人のご出席は全くありませんでした。もともとお一人しかいらつしやらなかったのですが……。

ある有料老人ホームの経営者によると、今の高齢者はベッド・タウンの一戸建てに住んでいる人が多いが、年を取って管理や家事がたくら感じられるようになると、都心の便利なマンションに移ろうと考える。現にそれでマンションが売れているらしいが、さらに年を取って病気がちになると、

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐに、本に郵便振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様。限られた書店にしかおいてありませんので、直接お申し込みください。

そこにもいられなくて介護専用型のホーム……公的なものか、私企業の有料かに入らざるを得なくなるようだという事でした。

誰しも悪いことは考えたくないけれど、必ず病み、必ず死ぬのが人間ですから、最後の住居についてはこれからも議論していきたいと思えます。

◆その座談会ですが、まことに申し訳ないことに、ご出席者のお名前を間違えました。山本雅子さんが山本道子さんになっていました。

訂正して深くおわび申し上げます。

◆「募集します」のページにあるように「新しい歴史教科書」をめぐる議論が盛んです。何しろ中国、韓国から激しい抗議

があり、五十五年前に終わっている戦争について、日本の被害国に対する対応に、納得のいっていない人々が多くいることは事実なのです。

しかし言論の自由の認められている日本では、何が出てても当然であるわけで、問題はそれを文部省という政府の機関が、検定合格という形でオーソライズすることではないでしょうか。ご投稿を期待します。

◆投稿なさる前に規定をよくお読みください。

一号につき一人一篇の規定なのに、一篇三篇を一つ封筒に入れてくる方さえあります。だぶつてもいいものは規定に書いてありますから、お確かめください。

購読中止は……

必ずお申し出ください。誌代が切れる際には、郵便振替用紙を同封していますが、送金をお忘れになる方があるため、誌代が切れても、引き続き送本しています。ご連絡がないと、お送りしてしまいますので、ぜひハガキかお電話を。

わいふ◆291 (隔月刊)
●発行日 2001年9月1日
●編集 わいふ編集部
●定価 620円(本体590円)
●年間購読料 4224円(送料共)
●印刷 平河工業社
●発行所 (株)グループわいふ
〒162-0062
東京都新宿区市谷加賀町
2-5-26
電話 (03) 3260-4771
FAX (03) 3260-4773
●郵便振替 001503-110430
加入者名 わいふ編集部

N

ew

M

othering

S

ystem

子どもに「生きる力」をつける子育てを！

密着育児——それが楽しいときもある。でもそのうちやってくる、やりきれない現実。核家族の日常の中で、子どもとの距離のとり方を学ぶのは難しい。NMSでそれを、ぜひ学んでください。

子育ては
NMS !!



▼二人の子どもに添い寝をしています。上の子を添い寝で育てたときはまだしも、次の子が生まれたら、上の子はますます私にくっつくようになって、私が下の子のほうを向くと、「こっち、向いて！」。

あーあ、これいつ終わるの？

▼機嫌のいいときに一緒に遊んであげましょう。なんて書いてある育児書がありますが、そんなことやってられつかと思いませんか？

す！ 次男は一歳半ですが、すごく活発な子。家にいるときは、始終何かの上によじのぼっています。一人で何かして遊んでいるときは、親にとつてようやくほっとする一瞬なのに「一緒に遊んであげましょう」なんて言われるとうんざりです。子どもと遊んで楽しい人、いるの？

泣けば抱っこ、泣けばおっぱい——そんなふうに言われ始めたのはここ20年前から。それ以前の育児書を読むと、「えっこれナーニ」と目からウロコ。アメリカでも、まだまだ「厳しい育児」がふつうでした。

そしてあの時代、今のように我まな駄々っ子はいなかったのです。子どもを愛しても、なめられない親になりました！

資料請求は 〒162-0062 東京都新宿区市谷加賀町2-5-26

NMS研究会へ。 ☎03-3260-5500 FAX同3260-9398

⑧ 使ってみた介護保険

安宅 温著◇利用のための知識袋 実際の利用者からの聞き取りをもとに、サービスの賢い利用法を読み物風に紹介。巻末に介護保険用語集を収録した役立つ一冊。一八〇〇円



① 終末期医療への願い

◇がん患者になって知った死の現実

宮尾茂子著 一四五六円

② 生活保護ケースワーカー奮闘記

三矢陽子著◇豊かな日本の見えない貧困

一八〇〇円

③ わたしは盲導犬イエラ

日比野清監修 盲導犬イエラが語るその日常生活。一八〇〇円

④ 輝くわが最晩年◇老人アパートの扉を開ければ

雲石とみ著 老人アパートでの一人暮らしの実相。二〇〇〇円

⑤ 盲導犬誕生

社会福祉法人日本ライトハウス監修 平野隆彰著 盲導犬に関する様々な疑問に答える。一六〇〇円

⑥ ともに生き ともに働く

障害者の雇用と企業経営 障害者を雇用する企業の実際を描く。平成10年度中小企業研究奨励賞準章受賞! 一八〇〇円

⑦ 夢子がおばあちゃんになるとき

平野隆彰著◇21世紀の福祉をになう君たちへ 一八〇〇円

MINERVA21世紀福祉ライブラリー好評既刊

◎新シリーズ第一弾 高齢者の食生活を支える役立ち情報満載! お年寄りの食事Q&A



森山喜恵子著 長年お年寄りの食事づくりに携わってきた著者が、実際に食事づくりを担う家族やヘルパーの疑問に答える62問。調理方法や宅配サービスのほか、すぐに使える情報を随所に盛り込んだ。一六〇〇円

知りたい専門職のすべてがわかる、好評シリーズ最新巻

④ 保育士まるごとガイド

全国保育士養成協議会監修◇資格のとり方・しごとのすべて 豊富な現場取材をもとに、保育士の現状を紹介。一二〇〇円

⑦ 看護婦・士まるごとガイド

日本看護協会監修◇資格のとり方・しごとのすべて 看護職、保健婦・士、助産婦をめざす人に最適の手引書。一五〇〇円

すぐ役立つ 福祉のホームページ

川村匡由編著 情報の海から2000サイトを厳選し、その特徴を紹介。福祉の情報を探す人の手がかりとなる一冊。二六〇〇円

風かおる「終の棲家」

風の村記録 編集委員会著 設計監修 外山義◇もしわたしが暮らすとしたら…から始まった私たちの特別養護老人ホーム作り 一八〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1番地 宅配可・価格は税別
TEL.075-581-0296 FAX.075-581-0589 <http://www.minervashobo.co.jp/>